

研究集録第21号
昭和59年度

特別活動の特質をふまえた
豊かな人間性の育成

昭和60年2月28日

東京都小学校特別活動研究会

本年度の研究集録と目次

- 会長あいさつ 1
- まえがき(本年度の研究をとおして) 1
- 昭和59年度研究発表大会要項 2
- 新春座談会 3
- 各研究部の研究 9
- I 学級会活動 9
- II 児童会活動 31
- III クラブ活動 55
- IV 学級指導 81
- 役員・本部幹事・理事名簿 103
- あとがき(編集後記) 105

— 今までの研究集録一覧 —

第1集(昭和39年度)	特別教育活動における指導計画作成上の諸問題
第2集(昭和40年度)	特別教育活動の本質をふまえた指導計画のあり方
第3集(昭和41年度)	特別教育活動の本質をふまえ望ましい指導計画と実施計画
第4集(昭和42年度)	望ましい指導計画による実践事例とその考察
第5集(昭和43年度)	望ましい指導計画による実践事例とその考察
第6集(昭和44年度)	改訂指導要領実施のための具体的方策と問題点
第7集(昭和45年度)	改訂指導要領実施のための具体的方策と問題点
第8集(昭和46年度)	新教育課程実践上の諸問題
第9集(昭和47年度)	教育課程実践上の諸問題
	— 各内容相互関連と他の領域等の関連 —
第10集(昭和48年度)	特別活動と他領域との関連
第11集(昭和49年度)	ひとりひとりを生かす特別活動の特質と指導のあり方
第12集(昭和50年度)	ひとりひとりを生かす特別活動の特質と指導のあり方
第13集(昭和51年度)	ひとりひとりを生かす特別活動の指導のあり方
第14集(昭和52年度)	楽しく充実した学校生活をめざす特別活動
	— 新教育課程をふまえて —
第15集(昭和53年度)	楽しく充実した学校生活をめざす特別活動
	— 新教育課程をふまえて —
第16集(昭和54年度)	楽しく充実した学校生活をめざす特別活動
	— 新教育課程をふまえて —
第17集(昭和55年度)	楽しく充実した学校生活をめざす特別活動
	— 新教育課程をふまえて —
第18集(昭和56年度)	豊かな人間性を育てる特別活動
	— 集団活動の指導原理とその実践的解明 —
第19集(昭和57年度)	豊かな人間性を育てる特別活動
	— 集団活動の指導原理とその実践的解明 —
第20集(昭和58年度)	特別活動の特質をふまえた豊かな人間性の育成
第21集(昭和59年度)	特別活動の特質をふまえた豊かな人間性の育成

研究集録第二十一集によせて

会長 外村 近

降る雪や明治は遠くなりけり (中村草田男)

あまりにも有名な句であります。都特活も昭和39年に生まれ、二十一年目を迎えることになりました。成人式も終わり社会的責任の自覚の時代に入りました。

そして、59年度の研究として研究集録第二十一号をみることができました。それも、約五百名の会員の熱意の結集の成果であり、都教委並びに全都1500校の校長先生はじめ諸先生方のご支援の賜物と厚く感謝し、みなさまとともに喜びにたえないところであります。また、会の発足以来その充実・発展のために尽力・寄与された歴代会長、役員の方々の伝統的なご支援、ご指導の積み重ねと深謝申し上げます。

ときまさに教育荒廃、教育の質的低下が強く呼ばれ臨教審に国民の話題や関心が熱く向けられています。思うに特活は、本来的に各教科で学び得なかった自発的自治的活動の充実を目指してまいりました。いうなればときの話である自己教育力を育てる源泉といっても過言ではないのであります。自己教育力を育てるといってもそれは、豊かな人間性の基盤に立つものでなければならないのであります。

この豊かな人間性育成を特別活動の領域から切り込んで実践研究を重ねてきて三年目になりました。研究主題である「特別活動の特質をふまえた豊かな人間性の育成」もようやく一つの駅に辿りつきました。豊かな人間性といってもその側は六面あり八面あるように多面体で構成されているわけでありまして。したがって、この三年間でその総ての側面を研究し、実践し尽くすことは十分ではありませんでした。しかし、私たちは現場人で実践家です。実践的研究が使命であり、特長であります。その点からは、一つの基盤を築いたと思います。

それには、いうまでもなく、竹石専門部長のもと、岩下・新倉・安岡副部長、大谷学級会部長・今野児童会部長・関口クラブ活動部長・米本学級指導部長の方々の積極的意欲的情熱的指導性の発揮にほかならないと思います。ご苦労さまでした。心から感謝申し上げます。

また、59年度は、都特活発足以来今日まで、ご指導ご鞭撻いただいた文部省主任視学官青木孝頼先生に全体講評をいただくことができました。文字どおり万障お繰り合わせいただいでご指導を仰ぐことができました。会員のみなさんの喜びはいうまでもなく、ありがたく光栄に存じます。厚く厚く御礼申し上げます。

研究に最後という言葉はありません。むしろ、成人式を終えてからが、ほんとうの人間らしき道を一步一步踏みしめていくものです。そのように、都特活も20代、30代と今後に期待するのが大きいと考えます。

みなさまのご批正とともに全都の小学校でこの冊子をたたき台に特別活動のますますの充実・発展、100万児童の豊かな成長を願いたします。

本年度の研究をとおして

専門部長 竹石 善一

「特別活動の特質をふまえた豊かな人間性の育成」をテーマにして、全都の会員が一丸となって取り組んできた特別活動の研究も、二年目を終ろうとしています。各研究部はそれぞれ具体的な研究テーマを設け、研究授業をとおしての実証をし、積み重ねをして相当な成果をあげることができました。

しかしながら、子どもたちの自治的・自主的な活動をねらうあまり、教師の指導助言が適切さを欠いたり、一人一人の子どもに期待を大きくもつために過重負担になったり、集団活動を重視する余り、個々の子どもの特性が見失なわれがちであったり等、教師自身の反省すべき点も再確認されました。これらを謙虚に反省をし、特別活動の特質である、実践的な集団活動を通して子どもの育成にむかって研究をすすめてきたわけです。A校の子どもの作文には

『ぼくは、六年間の思い出にもなり、また学校をよくしようという目標をもって代表委員になりました。これはという悪いところを一つ一つなおしていこうと思います。例えば、ろう下は右側を正しく歩くこと、けじめのある学校での生活をする、礼儀正しい学校にするとか、いろいろな問題があります。これらを少しずつ、みんなと協力して立派な学校にしようと思っています。……』 私達は、各教科・道徳等との関連を考えながら、一步一步子どもの夢を実現させるべく研究を進めてきたわけです。本年度の研究テーマを次の様に設けました。

○ 共通テーマ

『特別活動の特質をふまえた豊かな人間性の育成』

○ 各研究部の研究テーマ

- ・学級会研究部 「学級経営を基盤にした学級会活動のあり方」
- ・児童会研究部 「児童会活動の特質をふまえた望ましい指導のあり方」
- ・クラブ活動研究部 「クラブ活動の特質を生かす指導のあり方」
- ・学級指導研究部 「授業を通して指導過程のあり方と資料の活用」

各研究部は部長を中心に、幹事・会員の先生方が年間12・13回と各地区に出向いて、話し合いの研究だけでなく、授業公開を通して深まりの実証にあたってきました。その成果は遅々かもしれませんが効果があらわれてきているものと確信しております。

望ましい集団・集団活動を通して、個性の伸長を図り、心身の調和的発達を促すとともに、社会的に必要な資質を身につけ、自主的精神に充ちた子どもの育成を図るべく、四研究部門の独自の特質に基づく目標と内容を、相互に関連し合いながら、充実・発展のため、学級の創意を生かした教育活動の実践に努力をしました。課題も残りました。しかし、特別活動ならではの研究であり、本年度のテーマ追求の道でもあったわけです。また、来年度にむけて一步一步み続けましょう。部長・幹事・先生方の研究に感謝申し上げます。

昭和59年度 研究発表大会要項

1. 日 時 2月28日(木)午後1:00～4:00
2. 会 場 都立教育研究所(第二研修室 3F その他)
3. 研究主題 特別活動の特質をふまえた豊かな人間性の育成
4. 時 程

1:00 1:20 1:50 2:00 2:30 2:50 3:20 4:00

受 付	全 体 会	移 動	分科会(学級会・児童会・クラ ブ・学級指導別)			全体講評
	あいさつ オリエンテーション		研究発表	研究討議	講 評	

5. 研究会

- (1) 全体会 進 行
- ◆ 開会のことば 庶務部長 石川 和 男
 - ◆ あいさつ 副会長 古 橋 宏
 - ◆ 祝 辞 会長 外村 近
 - ◆ " 東京都教育委員会
 - ◆ " 全国特別活動研究会
 - ◆ " 全国道徳特別活動研究会
 - ◆ オリエンテーション 専門部長 竹石 善 一
 - ◆ 閉会のことば 副会長 小 河 一 久

(2) 分科会

	学 級 会	児 童 会 活 動	ク ラ ブ 活 動	学 級 指 導
テ ー マ	学級運営を基盤とした学級活動のあり方	児童会活動の特質をふまえた指導のあり方	クラブ活動の特質を生かす指導のあり方	実践力を高める学級指導 その指導過程と資料のあり方 —終末部分の工夫—
運 営 部 長	大谷 武夫 (港・高輪台小)	今野 正保 (新・淀三小)	関口 照治 (墨田・業平小)	米本 滋雄 (葛飾・梅田小)
司 会	吉田 健治 (台・西町小) 藤田 研二 (文・駕籠町小)	若林 彰 (板・板橋四小) 光堀 早苗 (江・越中島小)	後藤 治司 (荒川・第二瑞光小) 湯田 耕司 (三鷹・井口小)	重松 誠 (港・御田小) 田中 尚子 (小平・小平一小)
発 表 者	森 秀伸 (杉・堀之内小) 山本 英一 (文・柳田小)	山崎 誠二 (台東・竹町小) 伊藤 雅祥 (江東・亀島小)	福島 尚子 (板橋・九小) 田中 和子 (板橋・赤塚新町小)	高松 和彦(武蔵野・武蔵野四小) 飯田 良一 (千体田・西神田小) 篠原 昌子 (中央・月島一小)
記 録	赤羽根 智 (多・東永山小) 中井由貴子 (足・梅島小)	山崎 敏光 (多・北永山小) 早乙女悦子 (板・稲荷台小)	佐藤伊都子 (墨田・両国小) 長田 信彦 (豊島・高松小)	高山 厚子 (板橋・志村五小) 篠崎たか子 (荒川・赤土小)
助 言 者	八王子市立清水小 校長 岩園 敏明 足立区立栗島小校 長 早川 一 港区立松町小教頭 門倉 昭三 立川市立立川六小 教頭 高見沢豊栄	墨田区立二葉小教 長 大西 弘 新宿区立天神小教 頭 岸下 紀夫 板橋区立下赤塚小 教頭 松野 彰夫 練馬区立北町西小 教諭 渡辺 寿	千代田区立淡路小 教長 北村 康富 東大和市立東大和 九小校長 関口主一郎 港区立三光小校長 小川 国寿 江戸川区立下鎌田 東小教頭 小野 真澄	中央区立月島第一 小校長 小河 一久 豊島区立平和小校 長 石川 和男 世田谷区立千歳小 教頭 新倉 剛 練馬区立泉新小教 頭 安岡 正凱
全 体 助 言 者	元 東京都小学校特別活動研究会会長 前 東京都小学校特別活動研究会会長	白井 健二・小谷 威・ 久納 六郎・小島 明・ 中田 英義 宏瀬 英二		

(3) 全体講評 文部省主任視学官 青木 孝頼先生

『都特活・'85年を語る』

60. 1.13 合宿研修会より

出席 (外村 近, 小河 一久, 岩園 敏明, 早坂 一, 小野 真澄, 竹石 善一
大谷 武夫, 吉田 健治, 今野 正保, 関口 照治, 後藤 治司, 米本 滋雄
松野 彰夫, 渡辺 寿, 高見沢豊栄, 小川 国寿, ・司会=竹石・渡辺)

昭和60年1月30日, 新春の薄日を受けた箱根の外輪山を眺める強羅・早雲閣ホテルを会場にして, 恒例の新春座談会が開催された。

外村会長のあいさつに続いて, 竹石専門部長の司会により, 各研究部の研究経過, 集録のまとめのめやすについて報告された。

以下, 「本年度の研究をふまえ, 残された問題, 60年度への研究の抱負」について, 専門部及び各研究部長に語っていただいた。

○専門部

とかく研究というと, 理論研究のみに走り, 裏づけとなる授業や児童の実態をおきざりにする。そこで, 昨年度は実践活動の生きた事例を通して研究を続けてきた。

本年度も, 昨年度に引き続き, 『特別活動の特質をふまえた豊かな人間性の育成』を主題にして研究を進めてきた。「特質をふまえ…」とうたって, 特別活動でなくては指導しえない内容や, 個性の伸長・集団活動の指導をとりあげた。もちろん, 各教科や道徳と関連させて指導しなければならない点も多々あることはいうまでもない。

各研究部では, 正副部長を中心に, より具体化した各研究部のテーマを, 各会員の意欲と協力により追求されたことと考える。また, 具体的事例をもとに研究を深めながら, 評価についてもふれることにより, 特別活動の特質が一段と明確化されるだろう。

○学級会活動研究部

昨年度は『学級経営を基盤とした学級会活動の在り方』を主題に, 5回の持業研究を通して研究を進めた。その結果, 学級経営と学級会活動との関連性がある程度つかめた。学級会活動が独自のものでなく, 十分な学級経営がなされてこそ児童一人一人が生かされ, 集団の質が高まり, 実践力も生まれるということである。

ところで, 昨年度の課題として残された「学級経営の中で, 学級会活動がどのような役割を果たすか, また, どう位置づけたらよいか」を追求し解明するために, 本年度も昨年度と同じ主題で研究を進めることにした。

本研究部では, 学級経営イコール学級会活動でもなく, 学級会活動が学級経営の一分野でもないと考える。双方が互いに有機的に関連し合って, 特別活動の本質に迫るものと考えている。

本年度も授業研究を中心に, 学級経営と学級会活動の関連を明確にする研究を進めてきた。

- ・第1回文京区柳町小・1年「たからさがしのやり方を考えよう」の授業を山本英一先生、
- ・第2回は杉並区堀之内小・4年「紙飛行機で学級の記録をつくろう」の授業を森 秀伸先生、
- ・第3回は文京区駕籠町小・2年「水そうで飼うものをそうだんしよう」を藤田研治先生が、
- ・第4回は足立区梅島小・2年「ひまわりのたねを1年生にプレゼントしよう」を中井由貴子先生が公開して頂いた。1月中に研究をまとめ、研究発表会に臨む。

○児童会活動研究部

昨年度は『児童会活動の特質をふまえた望ましい指導のあり方』を主題に研究したが、まだ十分に深められていないことがあるので、本年度も継続研究をすることとした。

児童会活動は都内の各学校で進められてはいるが、児童の自発性・自主性が十分に発揮されていないし、全校児童の積極的な参加も未だしの感がある。

これら改善を要する問題の要因の一つとして、児童会活動の特質が明確にされていないことが指摘できる。例えば、全校児童が参加する教育活動には、児童会活動、学校行事、学校創意、ゆとりの活動があるが、それぞれのねらいや方法などの違いが不明確で混然としている状況がある。また、児童会活動が学校行事の一部として位置づけられている例もある。この場合児童に任せられた活動が児童の活動になっておらず、創意工夫が生かされず、教師主導となったり、結果だけを重視したりする。

研究の進め方としては、昨年度は実践からの学びを大切にすることから、授業研究や実践資料をもとにした。本年度も継続研究のため、昨年度と同じである。特に授業研究が柱となる。

6回の部会は毎回30人前後の参加があった。6月淀橋三小、9月青梅三小、10月竹町小、11月亀島小で授業、特質をふまえた望ましい指導を追求した。その結果まとめたことは次の通り。

○月1回程度の代表委員会では、事前の指導が大きなポイントを占める(この充実なしに児童の活動になりえない)○全校対象で内容が龍大な場合、教師の指示的助言が多くなるので、ねらい・内容とも精選・簡潔化を図ること、○的をしぼった資料を用意すること。

今後、全校縦割り班の活動、リーダーの養成をゆとりの時間との関連で明確にしたい。

○クラブ活動研究部

昨年度は『クラブ活動の特質を高める集団活動のあり方』を主題に研究した。反省点として
○クラブ選択指導では、児童の考えの多様化に伴う設置クラブの変化をみたい。○円滑な組織運営をするには伝統あるクラブの育成が必要で、実態の理解や発表の場の多様化が大切である。
○年間実践時数が基準を下回る学校が多いので、時数確保の工夫が必要である。等が出された。

本年度は『クラブ活動の特質を生かす指導のあり方』を主題に、昨年度の反省に基づき、具体的な問題をとりあげることとした。

○学校としてクラブをどうするか(組織……児童・教師)、○どんなことをするか(指導計画と実施計画)、○どう運営するか(活動方法)、○望ましい活動か(集団活動)、○今後の手だてはどうしたらよいか(学級担任とクラブ担当者とのつながり)などである。

クラブ活動の目的「健全な自主性の育成、豊かな社会性の育成、個性の伸長」のため、クラ

ブ活動の特質を次のようにおさえた。

- ① 学年の枠をはずした集団活動
- ② 同好の児童の集団活動
- ③ 共通の興味・関心を追求する集団活動
- ④ 計画や運営を児童自身がする集団活動

その上で、指導計画や実施計画（教師の助言・指導のあり方につながる）、リーダー（自治的運営と極めてつながりがある）、評価（運営改善に生かす手だて）、実態調査から、の各内容で研究をまとめた。

○学級指導研究部

最近数年間の主題を列挙すると、『実践的態度を育てる指導計画のあり方』（54.55）、『実践的態度を育てる学級指導の計画と展開』（56）、『授業を通して指導過程のあり方と資料の活用を考える（特に導入部分の工夫）』（57）、『同、展開部分の深め方の工夫』（58）

そこで、本年度は、57・58年に引き続き『授業を通して指導のあり方と資料の活用を考える』の主題で、実践への意欲づけを行う終末部分に重点を置いて研究を進めてきた。

ところで、終末部分の指導の充実は、導入・展開部分の適切な指導にかかっている。次の点をおさえた上で深めていった。① 主題取り上げの時期と必要性（設定理由）、② 児童の実態把握、③ 指導過程、④ 発問の吟味、⑤ 導入・展開・終末における適切な資料の活用。

授業は、適応に関する指導にしぼり、3回実施した。内容のいい授業になってきたと考える。

○ 補足説明や意見

- ・ 学級経営の基盤を強調すると、学級会を敬遠する教師も出てくる。発言は多いか、ルールはどうか。どのように進められたか、など、よい授業の条件を考えてみた。33時間の1時間に過ぎない。学級経営から学級会を見直してみよう。少し違った見方で気軽に相互に見合おうということで研究してきた。（学級会）
- ・ クラブ見学は1回実施、とかく教師指導型になりがちなので、それを脱却するため、指導計画や実施計画にメスを入れてみた。また、児童の手で運営させるにはリーダーの育成が大事で、特定の児童がメンバーを掌握、リードしていく資質を身につけさせたい。（クラブ）
- ・ 特別活動の評価については、指導要録の記入は考えるが、児童を高めるための評価をいやがる傾向がある。重荷にならない評価をつっこんで考えてみたい。
- ・ 学級指導の指導過程の研究は1年目が導入部分、2年目が展開部分、3年めの本年度が終末部分と進められたが、指導後の児童の変容（生活にどのようにプラスになっているか）とか、非行防止のポイントはこれだといったものが出るとよい。（学級指導）
- ・ リーダーにも、クラブ長的なリーダーと、その時々（本時）のリーダーがある。あまりリーダー養成だけを強調したくない。（クラブ）
- ・ 特別活動の時間が、ゆとりの時間に食われている面もある。
- ・ 周辺の地域にも特別活動実践上いろいろな問題がある。管理職自身、特別活動についての理解が不足している人をしばしば見受ける。
- ・ 最近の「自己教育力」の氾濫に関して、学校の授業の変革が行われている。

教育過程の見直しや児童の復権の主張などである。特別活動についても、その特質である自主的活動、集団活動、実践活動をもう一度ふり返って見る必要がある。

- クラブ活動で今でも多く見られるのが教師主導型で、それが伸び悩む原因となっている。
- 学級活動でも、任せられる内容を考え直してみる必要がある。
- ゆとりの時間では、全校規模で実施するもの、学年や学級単位で実施するものなど、いろいろな型態があるので、詳しく検討してみたい。
- 特別活動の指導は、児童が主体的に実践していくことを助けることに主眼をおきたい。
- 児童会の役員（会長や副会長）を選挙で選ぶ学校が非常に多い地区もある。選挙がよいのか他の方法がよいのか、ねらいや発達段階などから総合的に検討しなければならない。
- 都特活としては、特別活動推進上の重要な事項について 年度当初にしっかり打合せておく必要がある。前年度の反省を生かして、現部長を中心に、全体のテーマをもとに各部はどんなテーマを設け、どのような研究をするのか、各部一斉の会を設定したい。

○ 20周年記念事業の構想

- 都特活20周年を記念して、10周年の時と同様、特別活動の指導に役立つ図書を出版する。
- 内容は、特別活動各分野についてのQ & Aの形で、読みやすく役立つものにしたい。
- プロットは、各部の部長に原案を出してもらおう。
- プロジェクトチーム（会長・副会長・専門部長・各研究部長）でプロットを決定する。
- 出版のメドは、60年7月末とする。

UMEKUSA

これからの教育の重点（教育過程を考える場合の柱） 文部省・熱海則夫先生

- (1) 自己教育力の育成 （主体的に学ぶ意欲・能力・態度を含め、自らが自らを教育する力）
 - まず個人差を考え、一人学び（自分一人で学習を進める）を授業の中にセットする。
 - 個人差に応ずる教育の展開（文部省指導資料集を出す。20工夫例）
- (2) 基礎・基本の重視
 - 不変のものと考えていかねばならぬものがある。中身が何かを考えるのが課題。
 - 読み書きそろばんでなく、知・徳・体の教育のそれぞれに基礎・基本がある。
- (3) 個性・創造性の伸長
 - 教育への最も良い要望「もっと個性的教育を」「創造的人間をつくれ」など
 - 発達段階を考えながら、個人の特性を伸ばす。劣っている面も補いながら。
 - 日常の積み重ねの中で、子供の発想や考え方の傾向を大事にする。
- (4) 文化・伝統の尊重
 - 国際化時代、自国の文化・伝統を大事にする習慣。相手国の文化・伝統の共感的理解。
（自国の文化・伝統に誇りを持ち、外国の文化・伝統を尊重する）

I 学級会活動

テーマ 「学級経営を基盤とした学級会活動の在り方」

I まえがき

- 1. 研究主題について 11
 - (1) 学級経営と学級会活動 11
 - (2) 研究テーマについて 12
 - (3) 集団経営 4つの視点 12
- 2. 研究への取り組み 13

II 実践事例

- 1. 「たからさがしのやりかたを考えよう」 14
文京区立柳町小 1年 山本学級
- 2. 「紙飛行機で学級の記録をつくろう」 18
杉並区立堀之内小 4年 森 学級
- 3. 「水そうで飼うものを相談しよう」 22
文京区立駕町小 2年 藤田学級
- 4. 「ひまわりのたねを、1年生にプレゼントしよう」 26
足立区立梅島小 2年 中井学級

III 研究の反省と今後の課題 30

—— 学級会コーナー ——

- コーナー 1 係の計画への助言 13
- コーナー 2 学級経営と関連させて 17
- コーナー 3 司会を全員に 25
- コーナー 4 学級活動を育てる「先生の話」 29

○ 研究の過程

59. 5. 31 (木) 定期総会, 分科会, 組織づくり
 59. 7. 6 (金) 研究テーマ決定, 研究の方向について
 59. 10. 30 (火) 授業研究 文京区立柳町小 1年 山本学級
 59. 11. 21 (水) 授業研究 杉並区立堀之内小 4年 森 学級
 59. 12. 5 (水) 授業研究 文京区立駕籠町小 2年 藤田学級
 59. 12. 12 (水) 授業研究 足立区立梅島小 2年 中井学級
 59. 12. 20 (木) 執筆原稿打ち合わせ
 60. 1. 17 (木) 執筆原稿検討
 60. 1. 24 (木) 執筆原稿検討
 60. 2. 15 (金) 研究発表打ち合わせ, 諸準備
 60. 2. 28 (木) 研究発表会

研究・執筆者名簿

部長	大谷 武夫	港・高輪台小	神山 裕子	大田・仲六郷小
副部長	吉田 健二	台東・西町小	大数見 仁	中野・大和小
(司会)	野村みや子	小平・三小	小幡 一美	中野・桃園小
"	藤田 研治	文京・駕籠町小	小関 哲之	豊島・清和小
(司会)	山本 英一	文京・柳町小	木村 淳子	荒川・尾久小
(発表者)	森 秀伸	杉並・堀之内小	小野 英一	板橋・大谷口小
(記録)	赤羽根 智	多摩・東永山小	久富美智子	板橋・豊島平三小
(記録)	中井由貴子	足立・梅島小	地引 平	練馬・石神井東小
(記録)	高見由紀子	文京・窪町小	山品 昭一	足立・栗原小
	安念 英子	文京・柳町小	小出 昌子	足立・入谷小
	穂積 輝子	新宿・落合四小	小林 健二	足立・新田小
	三村 勝久	台東・清島小	青木 睦子	江戸川・下小岩二小
	石岡 勝彦	台東・根岸小	長谷川支圭子	八王子・一小
	梅津 典子	江東・第三大島小	篠木千奈美	府中・住吉小
	松村 二美	江東・南砂西小	鶴沢 典子	小平・四小
	遠藤 明子	江東・南砂西小	浮田 芳夫	狛江・三小
	小林 陽子	江東・南砂西小	山本 明美	狛江・八小
	山本富佐子	品川・城南小	見沢 敬子	清瀬・九小
	矢田 邦子	目黒・道田小	木内 悦雄	多摩・西永山小

I まえがき

1. 研究主題について

(1) 学級経営と学級会活動

① 学級経営のとらえ方

学級経営とは、児童が好ましい人間関係で営まれる豊かな学校生活・学級生活をすべての児童に体験させることである。そのためには、学級生活を円かつに行うことの基礎的な条件を整えることをめざして計画、実施されるものである。

具体的には、
・一人一人の児童をより確かに理解し指導すること。
・学級における集団（学習集団、生活集団）の助長をはかって、学校内の他の集団（他学級、学年、全校、委員会、クラブなど）との交流を円かつにすること。
・教室環境を整備すること。
・家庭や地域社会との連携を深めることなどである。

あわせて、学級経営にたずさわる担任の人間性、児童一人一人の個性と学級集団の特質を生かすことが、学級経営上、大切であるという考えで研究を進めてきた。

② 学級会活動との関連

学級経営と学級会活動との関連については、昨年度の研究の中で明らかにされているので、その実践事例から例を挙げて述べてみたい。

○ “連帯感を育てる学級会活動の在り方”に迫るために、学級経営の様々の場面、例えば「児童が日記を書く、それを教師が読み、その中から抜すいして学級だよりに載せる」とか、「学習の際のグループ研究の積み重ね。グループ遊び。当番活動の指導の中」で連帯感を育成し、関連を持たせた。

○ “すべての児童に活動の場を持たせる学級会活動の在り方”の実践においては、学級会活動だけでなく、学校生活のすべての活動の中から、一人一人の児童の活躍できることを取り上げ、活動表に記入し、仕事にたずさわる回数を平均化させた。

また、ほめられ表を作って、どんな幼稚な活動でも、それが自主的に行われたものであれば、見逃さずほめるようにした。そして、意欲を喚起したりする方法をとって、関連を図った。

○ “自分達が自らの活動と実感できる学級会活動をめざすための在り方”という研究主題に迫るためには、学習を自主的にする喜びを味あわせる指導として、教室整備も児童にまかせる部分を多くした。また「調べられる」「罰せられる」という意識を個々の児童に持たせぬように点検的なことは、最小限におさえた。その上で、教科、学級指導などとの関連を十分に図った。

○ “信頼関係を育てる学級会活動の在り方”では、心から通じ合う人間関係に配慮した。教師が児童の話をよく聞き、児童の言動を素直に認め、ほめたり、励ましたりした。また、児童の小集団活動の徹底化を図り、小集団同士の相互の結びつきを密にして関連を図った。

以上のように、それぞれの実践事例で、学級会活動と学級経営との関連性が明らかになった。

(2) 研究テーマについて

本年度は“学級経営の中で、学級会活動が果たす役割について視点を当てて研究を進めた。

具体的な方法について、例を挙げて説明してみたい。

学級経営の重点に“通じ合う人間関係を育てる、”ということをねらいにしたとき、“通じ合う人間関係、”を育てるには、○ 認め合う、○ 励まし合う、○ 力づける、の三つを児童の前にはっきりと示し、それを様々な学級での活動の場面で、培っていくことである。そこで、これらのことが、どのように高められていくのかを明らかにしていくのが研究の課題である。

(3) 集団経営 4つの視点

次に示すのは、研究会で講師の先生よりご指導いただいた集団経営に関する事柄である。

① 教師の人柄と学級経営（教師の姿勢）

教師の人柄は学級経営を大いに特長づける。それ故に、子どもの心をひきつける教師でありたい。学級の子供たちが、自分の方を見ているという意識、その子らに届く気迫、頼りがい、共同目標思考（教師も児童と一緒にやるという気持ちが表れること）などが、重要なポイントである。

② 学級での指導と人間関係

学級の風土・雰囲気、・ 明るいか暗いか、・ 温かいか冷たいか、・ 方向性がある教室かどうか、という見方で判断できる。

また、○ 認め合う関係 ○ 励まし合う関係 ○ 力づける関係 が、教師と子ども、子どもと子どもの間に見られるかということも大切である。

③ 学級経営とリーダーづくり

リーダーとは、・ 総合的役割（まとめる—先導性） ・ 生産的役割（つくり出す—着想、アイデア） ・ 前進的役割（士気を高める—正義感） を期待されている。学級経営の中で育てていかなければならないものである。

④ 学級経営と学級会活動

- 聴く………態度づくり（発問の工夫、話し合い活動のルール、受容的人間関係）
- 感じる………心情づくり（教科道徳、興味関心、生活実態）
- 反応する………活動づくり（役割行動、学習と生活の一体化）

多面的な角度から行っている学級経営を基盤にして、学級会活動に重点をおいて指導したとき、いったい、学級会活動は、学級経営のどの場にどのようなよい影響をもたらすのか、以下の実践事例の中で明らかにしていきたい。

2 研究への取り組み

本年度は、昨年度の研究課題として残された「学級経営の中で、学級会活動がどのような役割を果たし、どう位置づけたら良いか」を追究し、解明する必要がある。そこで、昨年度と同じテーマ「学級経営を基盤として学級会活動の在り方」にして研究を進めることにした。

研究の方向づけをするために、第2回の部会で、各部員同士学級会の現状や学級会に対する考え方、取り組み方などについての情報交換をした。

- ・ 学級会とは何だろう。全員に所属感をもたせる。学級づくりの研究をする。
- ・ 話し合いをうまくさせるには、教科の授業から生かす。
- ・ 児童に課題意識をもたせる。教師が児童個々をよく見る。
- ・ 実践力をつけさせるために、係活動を重点においている。
- ・ クラスづくりに力を入れ、班長の力を伸ばすようにしている。
- ・ 誰でも話せる学級の雰囲気づくりに力を入れている。
- ・ 児童が生き生きとしていくには学級会が必要である。
- ・ 児童に生活を見つめる視点がない。生活を気づかせる。

以上の様な事柄や、現状の悩み、教師の指導不足や認識の薄い点などがだされた。

これらの事は、学級経営と学級会活動にかかわる問題である。

そこで、本年度も研究を進め深めるにあたって、机上の空論を追うのではなく、地道に授業研究をすることによって検証していくことにした。

研究の方向は、次のような考えで行った。

- (1) 各地区、各学級の学級会活動の現状を出し合い研究の方向を探ぐる。
- (2) 昨年度の成果と問題点をふまえテーマを設定する。
- (3) 授業研究を中心に問題点を追究し、テーマに迫る。
- (4) 講師をお迎えして、授業後の問題点、学級経営とのかかわりについてのご指導をいただく。

〈学級会コーナー 1〉—— 係の計画への助言 ——

新しく係の編成をしようとする時、前とまったく同じ係名が並び、「他に考えられる仕事はないの。」と、問いかけても、「これでいい。」とがっかりさせられた経験は、どなたもお持ちだと思う。それならばと、計画を立てる際に、二つの助言を試してみた。

1. だれがやっても同じことでは、しかたがないので、自分たちが考えた新しいことを一つは、考えてほしい。2. もしも、計画がうまくいなくても、先生が手伝いますから、安心してやりなさい。

その後、小さな工夫でも認めてやり、失敗したりなまけていても見て見ぬふりをし、良かったらすかさずほめた。また、「前の係は良くやっていた。」とは、決して言わないことを心に決め、指導を続けた。

〔実践事例 1〕

文京区立柳町小学校

1年2組（男10名，女15名）

指導者 山本英一

1. 本学級の研究主題

意欲的にものごとに取り組む児童を育てる学級会活動の在り方

——— 心の通い合う学級経営 ———

2. 主題設定の理由

学級経営上で大切な人的環境，物的環境のうち，前者を特に重点に考えた結果として昨年度は，「認め励まし合う人間関係を培う」ことで研究主題にせまった。しかし，活動に継続性発展性があまり認められなかった。そして，そこには知的関心態度が十分に育っていないからではないかという反省が残った。

そこで，今年度は「課題意識を持つ」ということを主題にせまるものとして設定した。具体的には，低学年では「興味・関心をどのように持たせていくか」ということを実践課題とした。

3. 学級の実態

太り過ぎの児童が三名いて，中でも特にA子は運動を好まず遊び集団に入らないことが多い。B子は作業は早いですが，視力が低いせいか集中力にやや欠ける。C君は知的な能力はあるが作業が遅く，友達の歩調と合わない。D子は自分の判断で行動し，他との協調性がなく集団活動で独立する。E子，F子は一学期間登校拒否傾向が見られた。C君は，二学期になって給食が食べられず泣き出してしまったことがあった。

全体では，学習で人の話を聞く姿勢が良く，発言も一日の中で全員が発言できるようになってきている。しかし，友達の考えに安易にしかもしっかりとした根拠もなく賛成する児童も多い。遊びでは，男女がいっしょに遊ぶことが少なく，男子はサッカー，女子はいくつかのグループに分かれてなわとびや鉄棒で遊んでいる。家庭に帰ってからは同じ学級の友達と約束をして遊んでおり，公園・友達の家・児童館が主な遊び場所になっている。何も用がなくても担任のところに来て，だきついたり，手を引っぱったり，ひざの上に座ったりして話しかけてくる児童が特に女の子に多い。

(1) 話し合い活動

初めは，教師が司会，記録をして進め，次の段階で司会をやりたい者にやらせ，教師は記録をした。二学期からは，司会，記録ともやりたい者にやらせていった。そこでの記録は，教師が書いたたんざくをはる仕事をしている。

朝の会、帰りの会では日直が司会をし、昨日のこと今日のことで話したい者に発言させている。このことは、発表することへの抵抗をいくらか少なくした。

(2) 係活動

一学期はカレンダーやさん、黒板やさん、えさあげやさんといった名称で係をつくり活動した。教師が活動の場を与えたり、仕事に対する助言をしないと活動が止まってしまうので、二学期はどんなことをしたらよいかということを中心に考えさせ、係名もかなり具体的な名称とした。活動については反省する時間をとって意欲化に努めている。

(3) 集会活動

一学期は、いくつかのグループに分けられる仕事を教師が指示をして集会を進めていった。二学期になると、どんな準備をしたらよいか考えさせ、係の分担をして活動させていった。どういう風にやっていくのか聞きながら、その中で出てきたことをまとめて計画を教師が作り、必要なことは「これはどうするのか」と尋ねることで補っていった。実践後は帰りの会で、「今度やるときはこうすればいい」といった意見を出させ次回への意欲を高めるようにしている。

4. 指導の実際

本校の一年生の具体的児童像は、「興味・関心を持って取り組む子供」である。このことを考え、低学年の指導について以下の点を実践の重点とした。

1. 人の話は最後まで聞く。(認め合う心)
2. 拍手や賛同の声、そして発言により意志表示をする。(励ます心)
3. たくさんの経験を持つ。
4. できることは自分たちの手でやっていく。

昨年度の都特活の発表の中で、「前段の指導 — よりそい」、「中段の指導 — みちびき」、「後段の指導 — つきはなす」という三つの段階があった。このことを十分に踏まえた上でできることから子供にやらせていくといった指導をとった。

5. 学級会活動(話し合い活動)の実際 ————— 授業研究

(1) 議題

「たからさがしのやりかたをかんがえよう」

(2) 議題選定の経過

「みんなのこえ」という名の箱を用意し、所定の紙にみんなと相談したいことを書かせるようにした。その中から今回議題となることが決められた。出てきたものは以下の通りである。

- たからさがし(7人)
- キックベース(3人)
- なわとび(3人)
- たかおに(2人)
- 手つなぎおに(2人)
- いすとりゲーム(2人)

- やきゅう(1人)
- サッカー(1人)
- かんけり(1人)
- ゲーム(1人)
- クイズ(1人)

この中で一番やりたい人の多かったたからさがしをやるということで意見がまとまった。2回の朝の会で、だれがかくすのか相談させた。そして、場所は校庭ということを決めた。たからさがしをやるということになった原因の一つに、全校遠足で行ったポイントオリエンテーリングが楽しかったということがあった。

(3) 本時のねらい

- ① 友達の考えをしっかりと聞くことができる。
- ② 楽しいたからさがしになるように自分の考えを発表することができる。

(4) 実施計画

第 11 回 学 級 会 の 計 画		10月30日	
議 題	たからさがしのやりかたをかんがえよう		
司 会	高橋 伸吾・稲村 美実	記 録	森廣 靖明・武藤 由起
提 案 者	森江 貴子・池田由布子・高柳昌代・吉田貞仁・川島昌弘		
提案理由	楽しそうだから・おもしろそうだから・たからをつくるのがおもしろいから		
め あ て	友達の発表をしっかりと聞き、自分の考えは、発表しよう。		
話 し 合 い の 順 序		指 導 上 の 留 意 点 , 準 備 す る も の	
1. はじめのことば			
2. 10月の歌を歌う		「大きなくりの木の下で」	
3. 役割の紹介		初めてなので、やり方を教師が示す。	
4. 議題の確認		司会は、みんなにわかるように発言する。	
5. 提案理由の説明		同じでもよいから、全員に発言させる。	
6. 話し合いの順序の確認			
7. 話し合い			
① どんなものをかくすか		前にやったことがあれば、その経験を発表させる。	
② 一位、二位のきめ方をどうするか			
8. 決まったことを発表		記録が発表する。	
9. 先生の話		<ul style="list-style-type: none"> ・個人に対する評価をする。 ・たからさがしの実施には、まだ話し合う必要のあることがあることに気がつかないときは、朝の会などで話し合うようにさせる。 	
10. おわりのことば			

6. 指導後の児童の変容

教室環境の整備という点で、学級会コーナーを設けそこで議題の予告をし、さらに、決まったことも紙に書いて掲示した。このことは児童に興味を持たせる上で非常に役に立った。例えば「先生、今度の学級会は〇〇だよ。ぼくはこう考えたんだよ。」などの声が聞かれるようになった。この他に「みんなのこえ」を置いたことで集まる議題も多くなった。これらのことは、これまで実践されてきていることでけっして新しいことではない。しかしながらこのことを継続してやっていくことの大切さはあらためて感じさせられた。

人間関係の上で、特に自分の思っていることをみんなの前で言えるような雰囲気作りに心がけた。学習中、ある児童が発表したとき、「エー」という声が出た。その時に、「エー」と言うのは意地悪で、はっきり「ちがいます」と言うことは親切だと話した。それ以来、「ちがいます」「反対です」と言われてもいやな気持ちのままにいたということがなくなっていった。一学期当初から、「人の話をしっかり聞きます」ということを指導してきたので、人の話を聞く姿勢が良くなった。

就学前にも、様々なゲームやお楽しみ会を経験しているが、やり方が異なったりしていっしょの遊びになっていないことが多い。そこで、学級会の集会活動の中でみんなで決めたルールでやるようにした。すると、ふだんの遊びの中でもそれが生かされて、集団遊びが増えて人間関係の広がりが見られるようになった。

7. 反省と今後の課題

就学前の児童の経験の掘り起こし、さらにはそれをもとに同じ経験をさせていくことが集団活動を進めていく上で効果的であったが、十分実践ができなかった。

高学年になって出てくる「活動のマナー化」などの問題を解消していくために、低学年での指導はどうあるべきか。このことを今後の課題としていきたいと考えている。

《学級会コーナー 2》—— 学級経営と関連させて ——

意欲的に取り組む学級会活動にするためには、日常の学級経営は重要なものとなる。そこで、日常から“認め励まし合うこと”に重点をおき、次のように指導していくことが望ましいと考える。

- ① 発言のルールを他の教科で指導し、学級会活動で生かす。
- ② 一人一人の発言力を調べ、ちょっとした機会をも見逃がさず、良い点を認め励まし自信をつけさせる。
- ③ 日直の仕事を通して、朝の会や帰りの会での司会を多く体験させる。
- ④ 学級会カードに、自分の考えをまとめさせる。
- ⑤ 計画委員会をもち、事前に打ち合わせをさせる。

〔実践事例 2〕

杉並区立堀之内小学校

4年4組（男20名，女20名）

指導者 森 秀 伸

1. 本学級の研究主題

通じ合う人間関係を育てる学級会活動の在り方

2. 主題設定の理由

4年生になる時、学級編成なしに担任が変わった学級である。

学級会活動全体に活気がなく、みんなで何かに取り組み、いっしょに考えてやろうとする意欲が不足していた。

教師の指示したことはできるが、問題意識に乏しく、教師が問いかけても自分の考えがなく、ただ黙っている児童が多かった。また、自分にとって必要なことを話す時、一緒に付き添って代弁してもらうこともあった。特に話し合い活動では、特定の児童の発言で展開し、興味と積極性のある児童に独占されていた。また、自己中心的な考えが多く、友達の立場に立って考えることが少なかった。そのため、問題の解決がこじれがちであった。

以上のことから、教師と児童、児童と児童が、何でも気軽に自分の考えを出し合い、お互いがわかりあえたら、よりよい活発な学級会活動になるのではないかと考え、本主題を設定した。

3. 学級の実態

学級会活動は、全体的に児童一人一人が自ら進んでやる活動というより、各教科・道徳と同じように、教師がイニシアチブをとってやるものという意識が強く見られた。そのため、活動は受動的であった。

話し合い活動は、議題の問題意識に乏しく、当日にならないと活動ができないことが多かった。そして、生活目標の「あいさつをしっかりとやろう」とか、学級指導的な「忘れ物をなくそう」を話し合っていた。司会や記録は、いつも決まった児童がやっていた。話し合いは、計画性がなく、自分本位に考える児童がみられ、雑然としていた。

係活動は、各教科名をそのまま係にしていた。そのため教師の指示が多くなり、創意工夫の余地がなく、児童は意欲を失っていた。また、活動内容が話し合い活動を受けたものではなく、独立性が強かった。したがって、他の児童の理解が深まらなかった。

学級会活動というと、児童は、話し合い活動をするイメージが強かった。集会活動の内容も固定され、「誕生会」や、児童館の再生の「子ども縁日」をしていた。集会係があっても、

その係の児童は、実際の集会活動で学級会の係だけになって、参加できないでいた。

このようなことから、自分たちの学級という意識が弱く、教師と児童、児童と児童の人間関係が薄かった。

4. 指導の実際

学級経営全体で、①教師自ら児童の話を書くように努めた。学級生活上の諸問題をいっしょに考え、いっしょに行動した。その中で、児童の話をよく聞くことに心がけた。発問を工夫し、問題の生じた原因を探らせ、周囲の児童の気持を考えさせ、解決の方法を見つけさせた。そして、話合いの結果をあたたく見守った。②各教科・道徳・特別活動の事前指導を大切にされた。児童の実態を調べ、興味・関心が引きつけられるところから授業に入った。③1人1人の児童に役割意識を持たせた。児童の1日の生活を班単位で活動させ、小集団を活発にさせた。班の構成を班長・学級の係長・給食当番長の4人とし、学級と生活を密着させ、班長だけに依存することなく、相互に補うようにした。そして、児童と児童の受容的な人間関係を育てた。以上のことを学級会活動に反映させた。

話合い活動は、計画委員会を設け、班の輪番制で全員に司会と記録ができるようにした。計画委員会では、話合いがスムーズに流れるように、内容と順序を話し合った。議題の選定は、月の最初の話合い活動で決めた。そして、話合いを活発にするために、あらかじめ学級会プリントに自分の考えをまとめさせた。当日は、児童の話を書くように聞き、話合いの結果をあたたく見守った。

係活動は、教師が必要とする学級経営上の仕事を、まとめて学習当番にした。そして、児童が必要とする係をいっしょに考えた。月の第1週目の活動の時間に、話合い活動をして、係活動に見通しをもたせた。その上で、具体的な計画を立てさせ、第2週目に係活動を実施してきた。

集会活動は、月の第1週目の話合い活動で、学級のみんなでしたいことを話し合ってきた。事前に具体的な集会活動の計画を立てさせ、第3週目の話合い活動で、それを話し合ってきた。学級会の係は、集会活動をやりながらできるだけ全員がするようにしてきた。そして、第4週目は、集会活動を実施してきた。

その他、学級でこまったこと、よくしたいことは、学級での指導・学級指導・個人指導でとりあつかった。

5. 学級会活動（話合い活動）の実際 ————— 授業研究

(1) 議 題

「紙飛行機で、学級の記録をつくろう」

(2) 議題選定の経過

- 10月31日(水) ○ 計画委員会で、「11月の計画をたてよう」という議題の話合いの内容と順序を話し合った。
- 話合いの結果を記録用紙に書き、教室背面の学級会コーナーに掲示をさせた。
- 11月2日(金) ○ 計画委員会から、議題と話合いの内容と順序を知らせ、自分の考えを用意しておくように呼びかけた。
- 11月5日(月) ○ 話合い活動で、①学級でこまっていること、よくしたいこと、②係にしてほしいこと、③係からの発表を話し合った。
- 集会係が、「紙飛行機大会」の仕事を出した。
- 11月7日(水) ○ 帰りの会で、紙飛行機で何をするのかを話し合った。その結果、学級の記録をつくることになった。

- 11月9日(金) ○ 計画委員会で、「紙飛行機で、学級の記録をつくろう」という議題の話合いの内容と順序を話し合った。
- 集会係に、ルールと係の提案の用意をさせる。
- 11月15日(木) ○ 計画委員会から、議題と話合いの内容と順序を知らせ、自分の考えを用意しておくように呼びかけた。

第 8 回 学 級 会				11月21日	
議 題	紙飛行機で学級の記録をつくろう。	提 案 者			
提 案 理 由	美化係で教室のかざりをつくっていた時、おり紙で、紙飛行機を作ってしまった。これをみんなで作って飛ばしたらどうかと思って提案しました。				
話 合 い の 順 序 と 内 容	1. 開 会	} 3分	近藤		
	2. 議 題 の 確 認				
	3. 提 案 理 由 の 説 明				
	4. 質 問	} 10分	先生		
	5. 話 合 い				
	1) いつ、どこでやるか	} 10分	近藤		
	2) どんな記録をつくろうか				
	3) 個人戦か、団体戦(班戦)か	} 10分	三枝		
4) 材料は何にするか					
5) ルールはどうするか(集会係)					
6) どんな係をつくろうか(集会係)	} 2分	松尾			
6) 決まったことの発表					
7. 先生の話					
8. 閉 会					
準 備	ルール、係を書いた紙	計 画 委 員 会	司 近藤	福田	
			松尾	桜井	

(3) ね ら い

みんなで意見を出し合って、よりよい紙飛行機大会ができるようにする。

(4) 実施計画

20ページの表

(5) 留意点

- ① あらかじめ学級会プリントに自分の考えを書かせ、それをもとに進んで発言できるようにさせる。
- ② 学級会の始めに、目標へのせまり方を話し、終わりの「先生の話」で、それを評価する。
- ③ いつ・どこでやるかは、担任の指導計画によることが大きく、話合いの時間をとらない。
- ④ 学級会について、必要な助言をする。

(6) 評価

実践可能な飛行機大会の話し合いができた。

6. 指導後の児童の変容

全般的には、学級の士気が高まり、自分たちに生じた問題はみんなで取り組み、いっしょに考えようとする雰囲気になってきた。学級会の時間が好きな児童は、4月は3名だったが、7月には27名にも増加した。

話し合い活動は、事前指導に力を注ぎ、計画委員会を設けて全員に司会や記録をさせる輪番制としたため、話し合いがスムーズに流れるようになった。友達の考えを真剣に聞こうとする児童が増加してきている。声が大きくなり、はっきりと自分の意思表示をしたり、質問やつけたしの考えを話す児童が多くなってきた。しかし、まだ若干ではあるが、個人を傷つけるような発言をする児童がいるのは残念である。

係活動は、当番活動と区別をするとともに、話し合い活動を受けて活動をするために、各係の活動内容がどの児童にもわかるようになった。また、月ごとに活動内容が変化し、時間内に仕事を終わらせるように計画させるので、楽しそうに作業をする児童が多くなった。

集会活動は、月に1回ずつ行なえるため、話し合い活動が盛り上がり、一層の学級意識の向上が見られるようになった。

7. 反省と今後の課題

実際の授業で、話し合いに夢中になって、つい個人を傷つける話し方があり、教師が直接指導をする場面があった。日常の学級経営の中で、「通じ合う人間関係」をさらに深める手だてをさぐるのが、今後の課題となると考える。

〔実践事例 3〕

文京区立駕籠町小学校

2年1組（男16名、女12名）

指導者 藤田 研治

1. 本学級の研究主題

助け合う喜びを味わわせる学級会活動の在り方

2. 主題設定の理由

昨年度は、係活動を中心に認め励まし合う機会を多く設けることによって、「やり遂げる喜びを味わわせる学級会活動」を進めてきた。本年度も基本的に指導は変わらないものの、昨年度の集会活動では、力を合わせて、計画を立て役割分担をし準備を十分に、集会を成功させたという喜びを味わっていない。係活動こそ、教師の力をまだ借りるとはいえ、自分たちの力でやるんだという気持ちになっているが、集会活動では、児童の多くは教師に頼り、教師がほとんどお膳立てをしてくれるものと考えている。

そこで学級の重点目標に、「助け合って仕事をします」を設定し、話し合いを通して助け合い協力し合う活動をおし進めたいと考え本主題を設定した。

3. 学級の実能

1年生からの持ち上がりの学級であり、全員学級会の時間を楽しみにしている。1年生のときは、係活動に多くの時間を費したため、話し合い活動の経験は少ない。2年生になってからは、主に集会活動を中心に活動し、2学期になってやっと話し合いの大切さがわかりはじめた。話し合いは男子によって進められることが多く、女子はほとんど発言しない。しかし、司会の記録などの仕事は好んでやりたがる。また、意見のくい違いはよくあるが、あまり自分の考えに固執しない。友だちの考えを聞き、それが正しいと思えばいつでも自分の考えを取り下げるなど、おっとりした感じで話し合う場合が多い。それだけに、少数意見で全体が引きずられやすい傾向にある。議題の予告などをして、考えを持って話し合いに参加できるように指導中である。

4. 指導の実際

- 話し合い活動では、司会や記録以外に「はじめのことばの係」や「学級会の歌の係」など、学級会の流れに沿った係を設定し、一人でも多くの児童が活躍できる機会を持たせた。
- 自分の考えにいつまでもこだわらないように、人の考えを注意深く聞くことができるようにと考え、発言カードに類するものはいっさい使用しなかった。

- 話し合い活動では、少人数で相談する時間を多く取り入れた。
- 発言しやすい雰囲気を作るために、日常の教科指導等の学習活動において、発言の方法や態度、また、失敗を恐れない気持ちを養うように繰り返し指導した。特に、自分の考えが持てた場合は指名されなくても、必ず手をあげるように指導してきた。また、答えられなくても、指名された場合は、「わかりません。」「考え中です。」とはっきり返事をするように指導した。
- 発言の際、必ず考えに「わけ」を付け足して発言させた。
- 発言回数の少ない児童が発言したときは、話し合い活動にかきらずほめるようにした。
- 係活動の時間を出来る限り確保し、継続的に活動できるよう配慮した。

5. 学級会活動（話し合い活動）の実際 —— 授業研究 ——

(1) 議題 水そうで飼うものを相談しよう

(2) 議題選定の経過

11月29日(木) 放課後 学級会係と教師で議題案を整理した。以下の7つにまとめられた。

①読書感想文コンクールをしよう。②紙工作大会をしよう。③落とし物をどうするかそうだんしよう。④新聞記事コンクールを開こう。⑤水そうで飼うものをそうだんしよう。⑥ゲーム大会の計画をたてよう。⑦係の賞を作る計画をたてよう。

11月30日(金) 朝の会 議題案の整理結果を報告

帰りの会で①読書感想文のコンクールをしよう。⑤水そうで飼うものをそうだんしよう。⑥ゲーム大会の計画をたてよう。の3つにしばられた。

12月1日(土) 朝の会の議題決定、「水そうで飼うものをそうだんしよう。」に決まる。

12月3日(日) 放課後 第1回計画委員会（学級会係と教師）で話し合い活動の役割分担の原案を作る。

12月4日(火) 朝の会で役割分担原案を発表し決まる。

放課後 第2回計画委員会で「話し合いの柱」を決める。

(3) ねらい

多くの考えをだしあって、みんなが生き物を飼う相談ができる。

(4) 実施計画 次ページ参照

(5) 指導上の留意点

- 提案理由をしっかりとつかませるため、絵や文にまとめて発表させる。
- 友達の考えをしっかりと聞いて、自分の考えと比べながら、賛成反対の意志表示ができるようにする。

実施計画

第 12 回 学 級 会		12月5日(水) 第5校時	
議 題	水そうで飼うものを相談しよう。		
めあて	みんなで楽しめる生き物をきめよう。		
役 司会	鳴 神 大 介	宮 部 江都子	
割 書記	小 林 太 郎	原 香緒理	
提案理由	秋が過ぎて虫がいなくなると、生き物系の仕事 事がなくなるし、水そうに何も入っていないと さびしいから何か生き物を飼いたい。	提 案 者	生き物係 高 橋 鋒 山 弦 間 鈴 木
(時刻)	話 し 合 い の 内 容 と 順 序		
1:40 (10分)	1. 役割の紹介 2. はじめのことば 3. 学級会のうた 4. 議題の確かめと今日のめあて 5. 提案理由の説明		
1:50 (25分)	6. 話合い ① 何を飼うか決める ② 誰が持ってくるか決める		
2:15 (10分)	7. 決まったことの発表 8. 今日の反省 9. 先生の話		
2:25	10. おわりのことば		

(6) 評 価

- 水そうで飼うものを決めるために、一人一人が自分の考えをしっかりと発表することができたか。
- 友達の考えと自分の考えを比べ、互いに認め合って水そうに飼うものを決めることができたか。

6. 指導後の児童の変容

- ① 話合い活動だけではなく、日常の教科指導等でも、進んで発言しようとする児童が増えてきた。
- ② 思いつきの勝手な発言が少なくなってきた。(グループでの話合いを取り入れたためと思われる。

- ③ 自分の考えに固執することなく、反対意見に素直に耳を傾けられるようになってきた。特に男子にその傾向が見られる。
- ④ 発言の少ない児童に、話し合い活動での係（はじめのことばの係や学級会の歌の係など）や集会の係になろうという態度が見られるようになった。
- ⑤ 男子が好むスポーツ的な集会により、写生会やコンクールなどの集会を聞こうという傾向が高まってきた。

7. 反省と今後の課題

1年生のときに、主として係活動に力を入れてきたことも手伝って、話し合い活動に関心を示す児童が少なかった。集会活動なども全体での話し合いも持たずに、それぞれの係で計画を立て実施することが多かった。そのためか、議題箱に提案カードを書いて入れることに、はじめはとまどっていた。

司会が中心となって進める話し合い活動も、かつてがわからず、教師の手をだいぶ借りたが、2学期からは慣れてきたようだ。司会は固定したままだが、できるだけ早い時期に輪番制にしたいと考えている。話し合いは、まだまだ数人の男子によって進められることがあるので、継続して指導した。

講師の指導として次のようなことが指摘された。

- ・ 昨年度に比べ、クラスの児童の成長のあとがうかがえた。
- ・ 明るい雰囲気で授業が進められた。
- ・ 発言の仕方が訓練されていて、発言がはっきりしていた。しかし、型にはまっているきらいもないではなかった。
- ・ 子供にとって具体的なものが話題にでた方がより関心が高まるのではないか。また関連ある話し合いがでた場合、本音を出し合った方が良いのではないか。
- ・ 本時のねらいを明確にして授業を進めた方が良いのではないか。

《学級会コーナー 3》—— 司会を全員に ——

A学級（男16女22計38名）は、4～6年生の3年間、クラス替えをしていない。4年生までは議長団を固定し、係活動として位置づけていた。しかし、5年生から生活班の輪番制で議長団を経験させた。その結果、6年生の2学期を終了した時点で、司会経験者34人未経験者4人であった。3学期の学級会は少なくとも10回は開けるので、卒業するまでに全員が1度は司会を経験することになる。1人でも多く司会経験者が増えると、学級会の雰囲気が変わってくる。学級会に臨む姿勢も変わる。積極的・意欲的・協力的になってくる。そしてこの結果、各教科にもよい影響を与えることが多い。こんなことから、クラスの全員に司会の経験を与えることが大事であると考えます。

〔実践事例 4〕

足立区立梅島小学校

2年2組（男16名，女18名）

指導者 中井由貴子

1. 本学級の研究主題

児童が力を合わせて自分たちの手で進めて行く学級会活動の在り方

————— 低学年の手だて —————

2. 主題設定の理由

2年生になると児童は、ようやく学級会活動の姿がおぼろげながらわかるようになる。そして新鮮な気持ちで意欲的に活動するようになる。しかし、運営の大部分はまだ教師の手助けがないと進められない段階である。将来、自分達の手で学級の諸問題に気づき、解決し、実践できるようにするためには、2年生の時に児童の自発的・自治的な活動の芽を育てることが大切であろうと考えた。

そこで、学級会活動全般において、教師は具体的に手を貸すことを少しずつ減らし、児童みんなが助け合いながら活動できるように、意図的にし向けて行こう、その段階的な手だてを明らかにしよう、と考え本主題を設定した。

3. 学級の実態

1年生から担任している学級である。男子は元気が良すぎてトラブルが多いが明るく、よく発表できる。女子は比較的聞く態度ができていてよく考えるが、活発に発言するのは数人に限られており、話し合いは男子のペースで展開されることが多い。いろいろと問題をもつた児童も2、3人いるが、学級の中には温かく受け容れられており喜んで参加している。

計画委員会の活動を、「学級会係」として4～5人の生活班ごとに輪番で担当させている。学期中に2～3回担当できるので、全員が司会・記録を経験できるようにしている。

全体にまだ思いつきをすぐ口にする児童が多いために、友達の意見を受けて発言できるように指導し励ましている。司会の進め方も記録のし方もまだ未熟で、担任が途中で意見をはさむと話し合いの流れに大きく影響してしまう。

児童は、話し合いを新鮮に感じ、学級会の時間を楽しみにしている様子である。

4. 指導の実際

- 話し方、司会のし方に慣れさせ自信をつけさせるために、朝の会帰りの会の時間を確保し日直に司会をさせた。
- 授業の中で、結論・理由説明が「～なので」「～だから」と自然に話せるようにした。

- 2人グループ、4人グループ、6人グループ、12人グループを作っておき、集会の活動や教科の中で活用し、協力し合えた時に大いに認め励ました。
- 学級会活動を楽しく充実したものにするために、学級の歌を作ったり、役割分担の目印にする小道具を作って使うなどして雰囲気づくりをした。
- 計画委員会の活動を無理なく全員に経験させるため、班ごとの輪番制として、担当になるたびにその班で相談して役割を決めさせた。なるべくどの仕事も経験するようにと助言した。指名係、計時係、提案者など一つずつ仕事を増やして児童に任せて行った。
- 学級会コーナーを作り、学級会の予告や決まったことのお知らせなどを常に掲示して意識づけを図った。お知らせ係・感想あつめ係など広報活動を教え徐々に任せてきた。
- 係りの活動は、学級会や朝の会帰りの会などで様子を報告したりお願いしたりするように助言し、学級の中で自分が役に立ち認められているという満足感を児童に持たせるように配慮した。

5. 学級会活動（話し合い活動）の実践 —— 授業研究

(1) 議題 “ひまわりのたねを1年生にプレゼントしよう”

(2) 活動の経過

議題ができるまで

2年生の理科学習の1つとして、ひまわりを観察園で育てていたが、2学期になるとたくさんのたねがとれた。「かわかしてからみんなで分けよう。」ということになり、お花係がずっと預かっていた。係り活動の時に、お花係から「たねをそろそろなんとかしたい。」と担任に申し出があった。そこで「自分達はどうしたいと思っているか、議題ポストに入れてみたら。」と助言しておいた。

今回、ポストには6つの議案が入っていた。集会関係の議案（クリスマス会・ゲーム集会、忘年会・思い出集会、お誕生会）と、本議案であった。朝の会、帰りの会で選定したところ、集会については学期末に1回計画することになって本議題にしぼられた。

2年生は3学級あり、1クラスだけが単独で1年生にこのような働きかけをすることについては、議題選定にあたって学年の先生方に相談して、「児童の発想を大切にしよう」ということになり、本議題に決まった。

12月 6日(木) 朝の会・帰りの会 議案収集・議題選定

12月 7日(金) 中休み 不採択問題の処理

実施計画を作る

12月 8日(木) 放課後 実施計画を作る

12月 10日(金) 帰りの会 議題と話し合いの柱を予告・掲示

話し合いの活動

12月 12日(水) 学級会 本時

実践

12月 19日(水) 学級会 プレゼントカードを作成し手紙を書く

12月 21日(金) 昼休み 1年生へ渡す

(3) 本時のねらい

みんなでとったひまわりのたねを、1年生に喜んでもらえるようにプレゼントする方法を話し合い、決めることができる。

(4) 実施計画

だい 20 回 学 ぎ ゅ う 会				12月12日 5 ころじ	
ぎ だ い	ひまわりのたねを、1年生にプレゼントしよう。				
か か り	しかい かさじままち子。高なしあい。 こくばんきろく も木けんじ。 ノートきろく よし田なお人。	ていあ んしゃ	水上ひろ子 さいとうりょうすけ (お花がかり) くどうゆみ		
ていあ んり ゅう	2学きになって、りかのひまわりのたねが、たくさんとれました。みんなでわけてもたくさんあるので、1年生に、プレゼントしたらどうかと思っています。みんなで話しあってください。				
話し合 いの じゅん じょ	1. はじめのことば 2. ぎだいのたしかめ 3. ていあんりゅうのせつめい 4. 話し合い	(1) だれにあげるか (2) どういうふうにするか 5. きまったことのはっぴよう 6. 先生の話	7. おわり のことば		

(5) 指導上の留意点

- 朝の会・帰りの会・係りの活動などで出される日常の話題やつぶやきの中から議題の掘り起こしを図る。
- 輪番制の効用をいかして、司会技術の未熟な面をみんなでカバーして話し合えるように指導し励まして行く。

(6) 評 価

- 1年生に喜んでもらえるようなプレゼントのし方を考え合い、決めることができたか。
- 友達の意見を聞き、その上で発言することができたか。

6. 指導後の児童の変容

- クリスマスカードにポケットをつけ、ひまわりのたねを入れて一人一人のあて名を書き、直接手渡しに行った。その後1年生からお礼状が届くなど交流がうまれた。
- 話し合う項目(柱)は、1時間に自分達では2～3が適当だと考えるようになり、児童の手でつくれるようになってきた。
- 学級会コーナーに机を置き、必要なものをそろえて活用するようになってきた。

- 司会や記録の番がきても、心配する児童があまりいなくなった。
- はじめは、司会者用の台本を与えていたが、自分の力で話し合いを進めようとする児童が増えてきた。
- 司会進行を助けるような発言のできる児童が出てきた。
- 話し合いを自分達でなんとか進められるようになると、実践活動への意欲が出てきた。
- 「学級会はぼくたちの時間だから、先生に頼らないで決めたい。」という発言が話し合いの中で出されるようになった。

7. 反省と今後の課題

本来、児童の自主性を育てるのが特別活動の大きな使命の一つであり、学級会活動においても、ツボをおさえた教師の助言が児童の発想や意欲をふくらませるものだと思うが、まだまだ助言の機会を見計らう力が足りないことを痛感した。

また、輪番制でどの子にも司会をさせる方針で、議題ごとに機械的に担当させていたが、議題によっては児童の個性による向き・不向きが生じる場合もあるということが感じられた。司会進行に支障が起こった場合、フォロワーの支えにも限界がある。意見の整理や絞り込みが困難になると、どうしても教師の発言が多くなってしまう。議題や話し合う項目の吟味、司会者と議題との相性などをより深く検討しなければならないと思った。

児童一人一人への理解をさらに深め、持ち味をとらえ、伸ばしていきたい。また、集団の中で自分を生かしていこうとする態度も育てていきたい。

◀学級会コーナー 4▶ 学級会活動を育てる「先生の話」

学級会の話し合い活動や集会活動の終わりには「先生の話」として教師の評価がなされる。この評価の内容が学級会活動を育てる重要なポイントの一つであることは言うまでもない。いくつかの研究授業を参観して心に残った“話”を挙げてみたい。

- 「今日は普段あまり発言しない〇〇さんががんばって発言したね。えらかったと。」
- 「〇〇君の意見は、先生も考えつかなかったなあ。なるほどと思ったよ。」
- 「〇〇さんは、司会さんを助ける発言をしたね。自分が司会をした時の経験が生きていたね。」
- 「司会の〇〇君は、いろいろな人に意見を言ってもらおうよう指名していたね。」

このように、全体に対して、「今日は、みんなよく意見が言えたね」といった話をするのではなく、どういう発言がよかったかなど具体的な話をするの方が望ましい。つまり個人に対する評価の方が、評価される児童にとっても、それを聞いている児童にとっても良い影響を与えている。司会グループへの賞賛や励ましの言葉の大切さもあらためて感じ実践に生かしている。

Ⅲ 研究の反省と今後の課題

今年度は昨年度に引き続き、「学級経営を基盤とした学級会活動の在り方」をテーマに、昨年度課題として残された。学級経営の中で、学級会活動がどのような役割を果たすかを4回の授業を通して究明してきた。

このことは同時に、学級経営上の人間関係のとらえ方を明らかにすることでもあった。

都立教育研究所の井上裕吉先生のご指導をいただきながら、授業研究を進め、教師の人間性が大きな関わりをもつことが明らかになったと同時に、「学級経営を基盤として学級会活動を実践するんだ」という教師の自覚により、個々の児童・学級集団へのはば広い助言・指導が容易に行われるようになってきた。

そのため、1回の学級会活動の授業の評価を単なる話し合い活動を進める上での技術的なものに終始するのではなく、個々の児童、学級集団の成長を願うことを第一の視点として見つめ、次への実践へ継げるための評価を行えるようになってきた。

以上の点から考え、われわれが「学級経営を基盤とした学級会活動の在り方」をテーマとし、学級会活動をもう一度見直してきたことが正しかったと確信するに足る成果であったと考えられる。

つまり、学級会活動の究極的なねらいは、話し合いが上手になることではなく、個々の児童・学級集団の成長を願い、より豊かな、より確かな実践活動を展開することであるとすれば、学級会活動の指導は誰にでも容易にできるはずである。

しかし、学級会活動の実践の現状を考えた時、「難しい・わからない」あるいは、「子供たちに任せておけばいい」と無関心な声が多いことが事実である。

そこで、今後の課題としては、より多くの先生方に学級会活動に興味と関心を持ってもらい、学級会活動をやってみようという同士の輪を広げることが学級会活動研究部が果たすべき役割であると考えます。

したがって、学級経営を基盤として学級会活動を見つめながら、誰にでもできる学級会活動を目指し、場に応じた適切な指導の在り方と児童の成長を明らかにしていきたい。

そのためには、より多くの授業研究を行い、より多くの資料を集め、分析し、実践を積み重ねていくことにより、研究を深めていきたい。

終わりに、この一年間、研究のために忙しい中をやりくりして出席くださった各地区の幹事の先生方、進んで授業研究を引き受けてくださった先生方、執筆にたずさわってくださった先生方、研究会場を提供してくださった校長先生はじめ各先生方に厚く感謝いたします。

また、授業研究のさい、その都度、適切にご指導とご配慮を賜った、都立教育研究所井上裕吉先生、文京区立指ヶ谷小学校長岡田和雄先生、足立区立栗島小学校長早坂一先生、岩園副会長先生に深く感謝の意を表します。

Ⅱ 児童会活動

テーマ 「児童会活動の特質をふまえた望ましい指導のあり方」

I 研究の視点	33
1. 主題設定の理由	33
2. 研究の進め方	33
II 授業研究(実践事例)	34
1. 運動会のあいことばを決めよう	34
— 代表委員会話合い活動 — O市O校	
2. みんなで仲良く遊ぼう	37
— 代表委員会話合い活動 — T区T校	
3. 事前研究会 — 指導案等の検討 —	41
4. 20分休みに遊びをしょうかいして、楽しく遊ぼう	42
— 代表委員会話合い活動 — K区K校	
III 集会・委員会活動の実践例	46
1. アイデアいっぱい 楽しい七夕集会	S区K校 46
2. 夏休み作品展	K区H校 49
3. 運動委員会	I区I校 51
4. 栽培委員会	I区I校 53
IV まとめと今後の課題	54
1. 研究のまとめ	54
2. 今後の課題	54

〈児童会コーナー〉

コーナー 1	代表委員会の事前の指導…こんなところにきをつけて	47
コーナー 2	事後の指導…次回へ生かす工夫	48
コーナー 3	教師集団の共通理解を図るには	51
コーナー 4	教師の指導性とは	52

○ 研究の経過

59. 5. 31 (木) 定期総会 分科会 組織づくり 本年度の研究方針
59. 6. 19 (火) 研究計画 研究主題 研究内容 研究日程
59. 7. 9 (月) 集会活動についての事例研究
59. 9. 11 (火) 授業研究(実践事例 1)
「運動会のあいことばを決めよう」 青梅市立青梅第三小学校
59. 10. 22 (月) 授業研究(実践事例 2)
「みんなで仲良く遊ぼう」 台東区立竹町小学校
59. 11. 8 (木) 授業研究のための事前研究
59. 11. 14 (水) 授業研究(実践事例 3) 江東区立亀島小学校
「20分休みに遊びをしょうかいして 楽しく遊ぼう」
59. 12. 10 (月) 研究集録の編集計画 執筆者決定 研究発表者決定
60. 1. 14 (月) 執筆内容の検討, 研究発表準備(役割分担決定)
60. 2. 14 (木) 研究発表会準備
60. 2. 28 (木) 研究発表会

研究・執筆者名簿					
部長	今野 正保	新宿・淀橋三小		有村 久春	中野・東中野小
副部長	柏村喜久子	板橋・若木小	(前部長)	星野 隆治	中野・桃園三小
副部長	梅木 栄子	新宿・落合一小		銀杏 陽子	中野・新山小
副部長	佐々木善光	文京・真砂小		及川きよみ	北・岩淵小
副部長	門馬 茂	豊島・文成小		池谷 隆子	荒川・第三峡田小
	永塚 正治	千代田・小川小	(司会)	若林 彰	板橋・板四小
	小幡 賢司	港・東町小		河崎 智子	板橋・板四小
	中川 秀男	港・青南小	(記録)	早乙女悦子	板橋・稻荷台小
	野村 邦男	文京・汐見小	(元部長)	渡辺 寿	練馬・北町西小
(発表者)	山崎 誠二	台東・竹町小		加来 和子	足立・西新井小
(司会)	岩堀 早苗	江東・越中島小		山田 雅子	武蔵野・大野田小
(発表者)	伊藤 雅祥	江東・亀島小		野田代理恵	青梅・五小
	青山 啓子	品川・小山小		金田一清子	青梅・三小
	藤田 祐子	品川・源氏前小		伊藤 均	青梅・三小
	味村美恵子	品川・杜松小		田中 節子	調布・上ノ原小
	矢野 裕一	品川・芳水小		大垣 花子	清瀬・九小
	木村 昭延	大田・赤松小	(記録)	山崎 敏光	多摩・北永山小

I 研究の視点

1. 主題設定の理由

「ゆとりある充実した学校生活」が掲げられたとき、児童会活動に明るい展望が開けたという期待をもたれた先生方は少なくなかった。しかし、現状は「議題案が集まらない」「時間がとれない」「共通理解が得られない」などの問題点が数多くあり、担当教師の悩みは消えないのである。

問題となる背景を探ると、そこには児童会活動の特質が深く関わっているように思われる。一つには集団の質と量である。全校集会活動を行う場合の集団は1年生から6年生までと発達段階が著しく異なり、成員は何百人もいるのである。二つめには、学校全体の教育活動と深い関りをもって進めなければならないことである。特に学校行事や生活指導のあり方によっては強い影響を受けることがありきわめて重要である。三つめには、自発的・自治的活動すなわち「児童の活動」であるということである。「児童の活動」はゆったりとした活動時間が必要になることが多い。ところが、現状ではなかなかその時間が確保できないのである。

児童会活動における望ましい指導のあり方は、学校行事や裁量・ゆとりの活動などとの違いだけを論じることによって明らかになるものではないであろう。それは、児童会活動の特質を一つ一つ明らかにし、これらをふまえたうえで各学校の実態に即した柔軟で多様な指導を工夫することによって見い出されるものと思う。こうした考えに立ち、昨年度から引き続いて本主題を設定したのである。

2. 研究の進め方

私達は明日からの指導において生きて働く具体的で実践的な「望ましい指導のあり方」を得たいと思い、昨年度から「実践からの学び」を重視して研究を進めてきた。本年度もこうした立場から、地域や学校の環境・施設・児童数など実態が異なるところで授業研究を行うとともに、各学校から持ちよった実践資料の検討も行った。

研究内容の焦点化にあたってはいろいろな意見が出されたが、悩みが多く出された代表委員会話し合い活動に重点を絞った。授業研究は3回実施した。第1回は多摩地区の大規模校で、第2回は都心部の小規模校で、第3回は最近新設された学校である。研究授業を行うにあたっては、共同研究として実のあるものにするため事前研究を行うように心がけ、事前から事後までの一貫した指導のあり方について研究した。また、研究授業後は授業記録をもとにして様々な角度から検討し、話し合い活動を活発にするための手だてを探った。

研究は次のような日程で進めた。1学期は研究の内容と進め方、役割分担を決める。各学校の実践資料を持ち寄り、主に集会活動の指導のあり方を研究する。2学期は授業研究を3回実施する。3学期はまとめを行う。各地区代表幹事はだれも多忙ではあるが、月1回必ず研究会を行うこと確認して研究を進めた。

Ⅱ 授業研究（実践事例）

〈事例 1〉 「運動会のあいことばを決めよう」－ 代表委員会話し合い活動－（〇市〇校）

1. 本校児童会活動の概要

・ 児童会活動のねらい

- (1) 子ども達に自分たちの学校生活を楽しくさせるため、校内の生活から問題をとらえさせ話し合わせ、決まったことを、それぞれの機関を通して全校の子ども達に知らせる。
- (2) 学校行事の一部を担当したり、集会活動を通して、子ども達の自主性・自治性を育てる。

・ 児童会活動の実態

- (1) 昨年度あたりから、話し合い活動が活発になりつつある。
- (2) 「一年生を迎える会」「スポーツ大会」等、行事中心の議題が多く、生活からの議題は非常に少ない。
- (3) 全校児童や学級から議題を吸いあげ、役員会で原案を作り提案する形が定着してきた。

2. 事例の概要

(1) ねらい

ともすると、受身になりがちな学校行事を主体的に受けとめ、意欲的に運動会に参加させたり、連帯感や成功感を持たせる手段の一つとして、全校のあいことば・クラスのあいことば・シンボルマーク・全校競技（児童会企画・運営）について話し合わせ、実践させる。

(2) 本時にいたるまで

- 運動会のあいことば……………全校募集 → 児童会役員原案作成 → 代表委員会
- シンボルマーク……………全校募集（紅白に分かれて） → 実行委員会でそれぞれ3点にしぼる。 → 全校投票（クラスごと）で決定
- クラスのあいことば……………クラスで検討し決定 1年生のあいことば書きについては、4年生以上のクラスから立候補し、代表委員会で決定
- 全校競技……………児童会役員原案作成 → 代表委員会で決定

(3) 本時の展望

第 5 回 代 表 委 員 会					9月11日6校時
議 題	運動会のあいことばを決めよう			提案者	Y・N
提 案 理 由	運動会に向けて、練習がはじまっています。全校のあいことばや、クラスのあいことばなどを決めて、みんなで力をあわせて、よい運動会にしたいと思います。よい意見をたくさん出して下さい。				
議 長	S・E	副議長	H・T	記 録	T・T, Y・E
話 合 い の 内 容 と 順 序					児童の活動等
1. はじめのことば					
2. 議題の確認					

3. 提案理由の説明・質問

4. 話し合い

① 全校のあいことばについて

原案

- 全校のあいことば「走れはやく、おどれたのしく、
(約70枚応募) みんなで力をあわせよう」
- あいことばを書く人
5, 6年の学級委員にお願いしたい。

② クラスのあいことばについて

原案

- 2年～6年はあいことばを決めて自分たちのクラス
でつくる。
- 1年はあいことばをきめる。
- 1年のあいことばは、4年～6年の書きたいクラス
に立こうほしてもらい書いてもらう。

③ 全校きょうぎ(大玉送り)について

原案

- 昨年とちがって、1年から6年まで送って、こんど
ぎゃくに6年から1年まで大玉をもどす。

5. 決まったことの発表

6. おわりのことば

○ 提案にたいして質問はなく、話し合いに入る。

○ 各クラスの話合いの報告がされ、原案通り決定される。

○ 「学級委員がいそがしい場合は他の人でもよい」という修正案が出され、決定された。

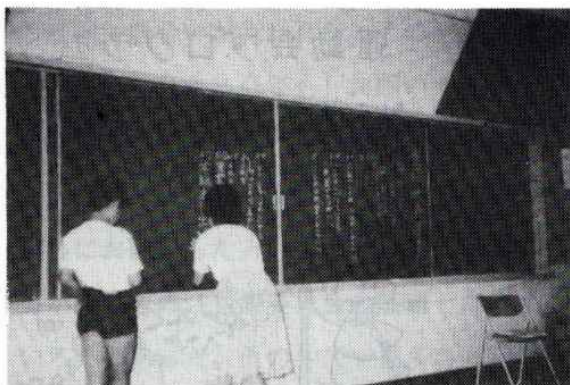
○ 1年生のあいことば書きに、10クラスが立候補する。

○ 立候補理由をのべる。

○ それにもとづいて、活発な討論が行われ、決定される。

○ 今までより、大玉にさわられる機会が多くなり、原案が支持される。

○ 大玉送りのスタートは、6年の応援団がやることになる。





(6) 児童の反応

〈児童の作文より〉

ぼく達、前期児童会役員の最後の仕事は、運動会のとりくみでした。夕方おそくまで残り、原案を立てたりとてもたいへんでした。特にあいことばを決めるのには、苦勞しました。たくさんの方の応募があって、一番ふさわしいのはどれか、ずい分まよいながら決めました。案がまとまらなくて、困ったこともありました。実行委員会を作って、いろいろ指図した時も大へんでした。そして、運動会では、ぼく達で計画した大玉送りも成功のうちに終わりました。あちこちにかかげられた。シンボルマークや、あいことばが青空にとても美しく輝いていました。苦勞が実って、とてもすばらしい運動会になったと思います。ぼく達は、いろいろなことをやってきて、本当によかったと思います。代表委員や、実行委員の人達もよくやってくれました。

(7) まとめ

前年度は各クラスから持ちよった「あいことば」をそのまま提案した。今回は役員会で原案（原案づくりの資料は全校より募集）を作り提案した。そのため具体的に発展した話し合いができた。ただ、原案に依存してしまう傾向もみられた。このような体験を次の活動に発展させるために記録や資料や、子ども達の感想反省などをきめ細かに取り、次時に役立つ資料作り及びその資料の活用に取り組みたい。また、指導のねらいをはっきりさせて取り組ませるなど、残された課題は大きいですが、手だてを考慮し努力を続けたい。

(4) 活動の実際

「1年生のあいことばを書く」ということに立候補したクラスが多く、意欲的に運動会に参加しようという姿勢がみられた。又、自分のクラスが、ぜひ引き受けたいという熱意が話し合いを活発にさせた。

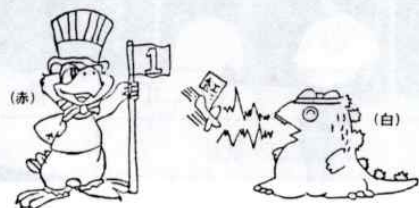
(5) 事後の活動（運動会で実践したこと）

当日、大きな全校のあいことばの下に、25本の各クラスのあいことばがかかげられた。練習中も、教室にかかげて、それに向かって努力してきたようである。

全校競技「大玉送り」は、練習の段階から児童会役員の手で行われ、今年度は二往復になった大玉の動きが、全校競技をより盛り上げていった。

運動会プログラム

あいことば
走れはやく おどれ 楽しく
みんなで 力を あわせよう



1. 代表委員会の活動の実態

本校の9月までの代表委員会の議題名は右記の通りである。

9月までに、定例の代表委員会が5回、臨時の代表委員会が3回と計8回の代表委員会が行われた。

しかし、議題の多くは、全校集会のための話し合いや、学校行事への参加に関する議題である。

児童が学校生活を改善、向上する上で直面している切実な問題やより豊かな学校生活を目指そうとする議題が極めて少ない。これらは、年度当初には予測することが困難ではあ

るが、今まさに解決を図らなければならない問題である。

そこで、代表委員会において、全校児童との相互の交流を活発にすることにより、学校生活の向上発展への関心が高まると、学校生活をより豊かにするための諸問題が発見され、自主的に解決していこうとする意欲が生まれ、全校児童に密着した創造的な実践活動が展開されると考え、実践化を図った。全校児童との交流を活発にするための方法としては、○学級会で学級の諸問題に気付かせる活動を活発にする。○各学年・学級・委員会との連携を深める。○お願いカードで悩みをつかみ要望を知る。○広報活動を活発にする。等の場や機会を通して進められると考えた。

6月の代表委員会で「学校生活で困っていることを調べよう」ということになった。本校では、昨年もこの議題で話し合いが行われた。その結果、「お願いカード」が作られた。今年も「お願いカード」を使って、全校児童の悩みを調べ、代表委員会の活動に役立てることにした。学級・学年内で処理できるもの、各種委員会にお願いした方がよいもの、先生方にお願いした方がよいもの、代表委員会の議題となりうるものなど、いろいろあった。その中で一番多かった悩みが「遊び」に関するものであった。再度、遊びだけに関する「お願いカード」をとって代表委員会で話し合うことにした。

(議 題 名)	
<4月>	・代表委員会の議長団を選出しよう ・代表委員会だよりを出そう ・代表委員会の年間活動計画を決めよう
<5月>	・子どもえん日の計画を立てよう
<6月>	・七夕集会の計画を立てよう。 ・学校生活で困っていることを調べよう。
<7月>	・一学期の活動の反省をしよう。
<9月>	・運動会のスローガンを決めよう。 ・応援のし方を決めよう ・運動会の係り分担をしよう ・勤労感謝の集いの計画を立てよう

お願いカード

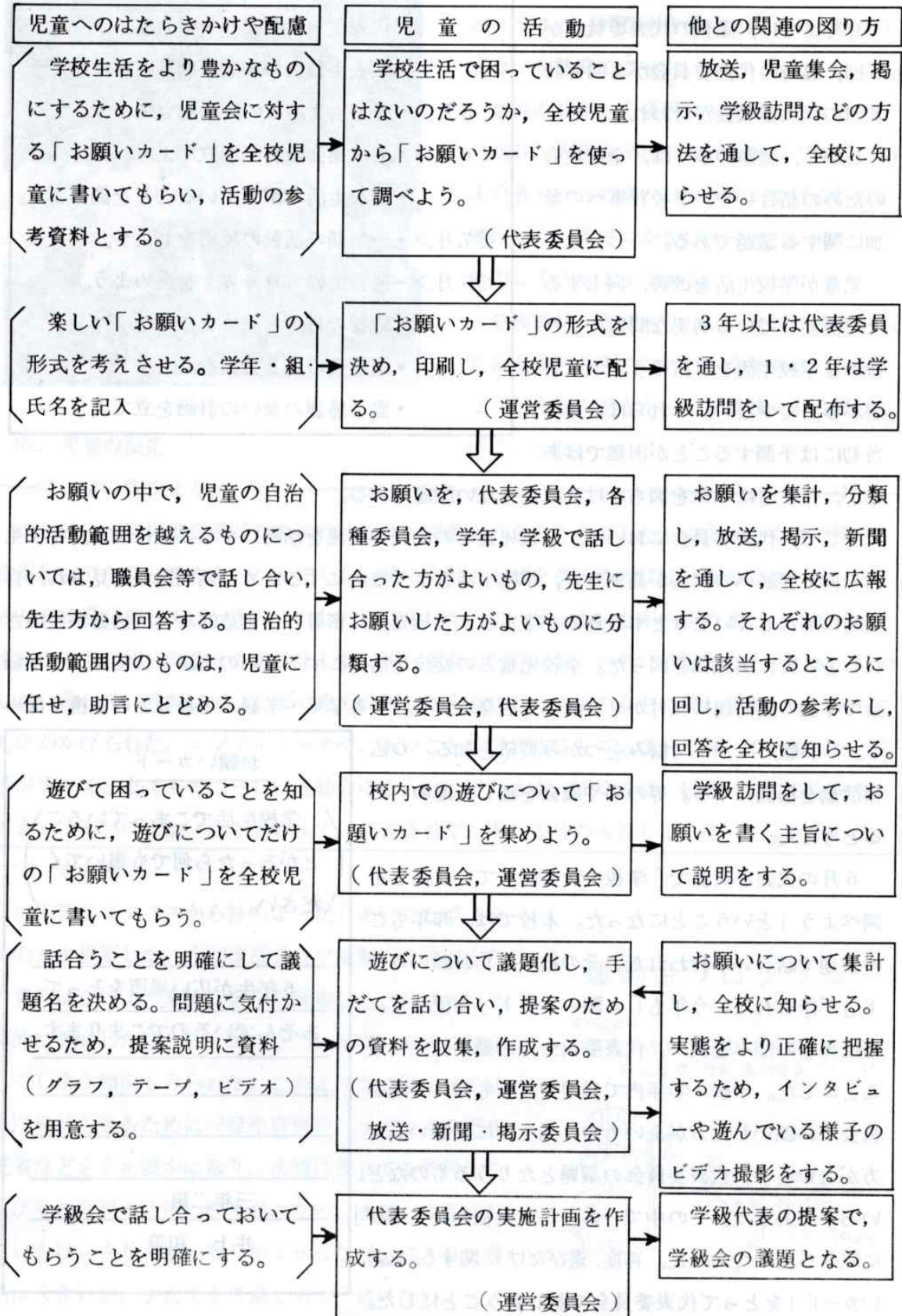
(学校生活でこまっていることがあったら何でも書いてください。)

6年生が広い場所をとって
あそんでいるのでこまります。

三年二組
井上 和美

2 本時にいたるまで

代表委員会、学級会、各種委員会、特別活動部会、生活指導部会、職員会などを相互に関連させながら、6月から10月（本時）まで、話し合いをすすめてきた。その経過は次の通りである。



3. 本時のねらい

- (1) 「学校生活で困っていること」の中で一番多かった「遊び」について、全校的視野に立って受け取め、「みんなで」「仲良く」遊ぶ方法を考えさせる。
- (2) 代表の一人として、学級の意見を発表することができ、また、話し合いによっては、学級の意見にこだわらず、自分の意見を発表できるようにさせる。

4. 本時の展開

指導の手だて	活動の過程	児童の反応	考察
<p>○提案理由の説明を重視し、くわしく発表させる。</p> <p>○資料を用意して、この議題で話し合っていくことの重要性と方向性をわからせる。</p> <p>○禁止項目をつくらせるのではなく、遊び方の工夫や仲良く遊ぶ意識の啓蒙を図るように助言する。</p> <p>○全校児童が仲良く遊ぶと</p>	<p>○出席の確認</p> <p>1. はじめの言葉</p> <p>2. 議題の確認</p> <p>3. 提案理由の説明</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>「お願いカード」の集計の結果、遊びについて困っている（高学年が広い場所を占める・ホールが飛んできて危ない・いろいろな遊びをしたいが分からない・いろいろな学年の人と遊びたい・遊び場を自由にしてほしい・その他）人がたいへん多かった。そこで、これらを解決して、みんなで仲良く遊ぶことができるようにしたい。（集計グラフ、ビデオ、テープを使用）</p> </div> <p>4. 話し合い</p> <p>◎ みんなで仲良く遊ぶための約束をつくろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・約束づくり ・標語やポスターを公募して掲示しよう。 ・掲示委員会に担当してもらおう <p>◎ みんなで仲良く遊ぶ遊びを決めよう。</p>	<p>○提案理由の説明のときのグラフを見て、遊びに関して困っている人が多いのに驚く。</p> <p>○困っている人が多いなあ。</p> <p>○遊び場で困っている人も多しんだなあ。</p> <p>○ちがう学年の人とも遊びたいという人も多い。</p> <p>○＜ビデオを見て＞ボールをけて、ぶつかったらあぶないなあ。高学年が広い場所をとっているなあ。</p> <p>○＜テープを聞いて＞下の学年の子たちは困っているなあ、屋上ばかりじゃあつまらないよ。</p> <p>○ボールをけてもよい場所を決めて、そこでける。</p> <p>○サッカーやドッジボールなどの試合はやらない。</p> <p>○広い場所を占める遊びはやらない。</p> <p>○あぶなくない遊びを工夫する。</p> <p>○みんなで一緒に遊ぶ時間をつくろう。</p>	<p>○資料を用意しての提案理由の説明はよく分かり、この議題で話し合っていくことの重要性がよくとらえられたようだ。また、どんなことを話し合えばよいのかもわかった。</p> <p>○提案理由を重視することによって、話し合いが明確化される。</p> <p>○ボールけりなど禁止するのではなく解決していったのは、全校的視野に立った解決でやろう。</p> <p>○標語やポスターの公募で全校児童の意識化を図ろうとしたの</p>

<p>いうねらいが達成できる遊びを考えさせる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・網引き、各種鬼ごっこ。 ・休み時間や運動の時間に。 ・運動委員会が担当する。 ・たてわりグループで正月の遊びもしたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ○みんなで遊べるものが多い。 ○低学年でも遊べるものが多い。 ○長い時間のも計画してほしい。正月の遊びをしよう。 	<p>は実践化と結びつくものであろう。</p> <p>○時間、場、係り分担を考えて</p>
<p>○遊びを知らないことが悩みの一因であることに気づかせ、楽しい遊びをつくるように考えさせる。</p>	<p>同 いろいろな遊びの紹介をしよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童集会や掲示などで紹介し合う。 ・学級単位で、先生からも。 ・運営・集会委員会で担当。 <p>5. 決まったことの発表</p> <p>6. 先生の話</p> <p>7. 終わりの言葉</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ボールとなわとびと鉄棒ぐらいでしか遊んでいない。 ○もっと多くの遊びがある。 ○もっと楽しい遊びがあるよ。 ○楽しい遊びを工夫してみんなに教えてあげよう。 ○家の人や先生たちからも聞いてこよう。 	<p>の話合いは実践化に直結したものである。</p> <p>○話合いの時間が足りなくなつたのは話し合うことが多すぎたからである。焦点化の必要あり。</p>

4. 事後の活動

- 新しい遊びの約束は、放送、掲示、児童集会、学級訪問などを通して全校に知らせた。また、遊びの約束の標語やポスターを公募し、掲示することによって関心を高めた。
- みんなで仲良く遊ぶ遊びとして出された、網引き、各種鬼ごっこは、運動の時間や休み時間に運動委員会が中心になって行っている。今まで高学年の児童と遊ぶことの少なかった低学年の児童が、高学年と手をつないで一緒になって遊ぶようになった。
- 遊びの紹介をするようになった結果、遊びの種類が増えてきている。
- この活動を通して、低学年は校庭、高学年は屋上と指定されていた遊び場を、全校児童と交流したいという児童の要望から、週3日間は自由となり、異学年の児童が仲良く遊ぶ姿が見られるようになった。また、たてわりグループでの正月の遊びも計画され、カルタ、すごろく、ゲーム、はねつき、こま回しなどで楽しく遊ぶことができた。児童が作ったカルタやすごろく、ふくわらいなどが多く見られた。

5. 考察

児童集会や学校行事参加のための議題が多い中で、学校生活の見直しをさせ、より豊かな学校生活を送らせることは重要である。そのために、全校児童のかかえている問題を引き出す「お願いカード」の活用は効果的である。それらの問題を解決し、改善し、実践していくことによって、代表委員会に対する期待や信頼も高まり、今までの全校児童との距離も縮められつつある。また、これらの活動を通して、今まで自分たちの力ではどうしようもないと思っていたことができたという自信、たてわりグループ 正月の遊びをしようという創造的活動への発展、と活動の深まりと広がりが出てくるようになってきた。今後は、教師間の共通理解を図るための手だてを考え、代表委員の活性化を図りたいと考えている。

◎ 事前研究会 — 指導案等の検討 —

1. 事前研のめあて

第2回授業研究会を終えてからの反省で「指導案を中心に事前研究ができれば、より効果的な研究会がもてるのではないだろうか」との声があった。確かに今までのを見ると共同研究として十分な準備ができず、授業者個人に頼る傾向があったためテーマにそった深まりのある研究ができなかったように思われた。そこで、指導のねらい、展開のながれ、活動内容・指導案の形式等を検討するとともに、授業を見る視点についても共通理解をもって授業研究に望むために事前研究会をもった。

2. 検討されたこと

(1) 議題名

議題名は抽象的でない方がよい。議題名は見れば何について話し合うのかが具体的に分かり、学級の意見や自分の考えをまとめられるものがよい。

(2) 指導のねらいと話合いのめあて

議題案集めから事後実践まで見通しをもって指導・助言を行うために明確なねらいをもつことが必要である。話合いのめあては話合いの流れが議題からそれず深めるうで大切なものである。

(3) 提案理由

形骸化している傾向がある。提案者自身の考えを具体方策を含めて述べるようにした。資料などを用いて説明されると問題点等が明確になる。

3. 事前研の成果

指導案の形式がはっきりしていなかったため、児童会活動の概要や児童の実態・資料などをどのように記述してよいか分からない面があったが、それらを検討し下記の通りとなった。

〈原案の指導案〉	〈検討後の指導案〉
<p>議 題 「みんなで楽しく遊ぼう」</p> <p>1. 本校児童会活動の概要</p> <p>(1) 児童会活動の目標</p> <p>(2) 活動の実態</p> <p style="padding-left: 2em;">児童会活動の組織・活動時間、活動の内容、めあて・本年度の活動</p> <p>2. 「みんなで楽しく遊ぼう」をめぐる</p> <p>(1) 本時にいたるまで、(2) 指導のねらい、(3) 展開の概要、(4) 実施計画</p> <p>資料……代表委員会計画案・代表委員会の記録・遊びについてのアンケート、集計・特活部実施案・計画委だより。</p>	<p>1. 議 題 「20分休みに遊びをしようかいして、楽しく遊ぼう」</p> <p>2. 本時にいたるまで</p> <p>(1) 議題決定までの経過</p> <p>(2) 児童の実態 (3) 活動の過程</p> <p>3. 指導のねらい</p> <p>4. 実施計画</p> <p>5. 評 価</p> <p>資料……児童活動の概要(児童会の目標・組織と活動内容・児童会の運営方法・本年度の活動)・アンケート集計、グラフ、計画委だより)</p>

〈事例 3〉 「20分休みに遊びをしようかいて、楽しく遊ぼう」

— 代表委員会話し合い活動 — K区K校

1. 本校児童会活動の概要

※この事例は見聞きで構成してあります。

- ① 本校は、開校4年目を向えた新設校であり、児童会活動がようやく定着してきた段階である。
- ② 昨年度までの代表委員会の活動は、年間計画で決められたことを議題とするだけの教師主導的な面が強かった。議題も集会活動が主であった。
- ③ 本年度は、年間計画に弾力性を持たせ、児童の生活面から出てきた議題を積極的に取り上げるようにした。集会活動は、集会委員会や内容と関連する委員会で分担し、企画運営を任せた。
- ④ 代表委員会は、各委員会から出された案に検討を加えるとともに、協力できることを話し合うようにした。
- ⑤ 計画委員会を新設し、代表委員会の前に全校児童の意見を吸い上げ議題を決めるなどの準備が確実に出来るようにした。これは、昨年度まで議長団を中心に小委員会があったが、時間の確保が難しく代表委員会の準備が不十分なことが多かったからである。計画委員会は、議題決めだけでなく、議題について全校児童の実態を調べ話し合いの資料を作ったり、結果を児童朝会で報告するなどして全校児童と代表委員会とのつながりを深める仕事を担うようにした。
- ⑥ 以上のような改善を加えながら、本年度の代表委員会を指導してきたが、児童の実態は、代表委員としての自覚が不足し、全校的視野に立った話し合いがまだできないのが実状である。しかし、計画委員会で議題を決め「計画委員会だより」で事前に代表委員に提示してきたので、話し合いが少しずつ活発に行えるようになってきた。

3. 指導のねらい

- 休み時間の遊びを工夫し、1年生から6年生までいっしょに遊べる方法を決めることができるようにさせる。
- 仲よく遊ぶ方法を考えることを通し、代表委員としての自覚を高め、進んで仕事ができるようにさせる。

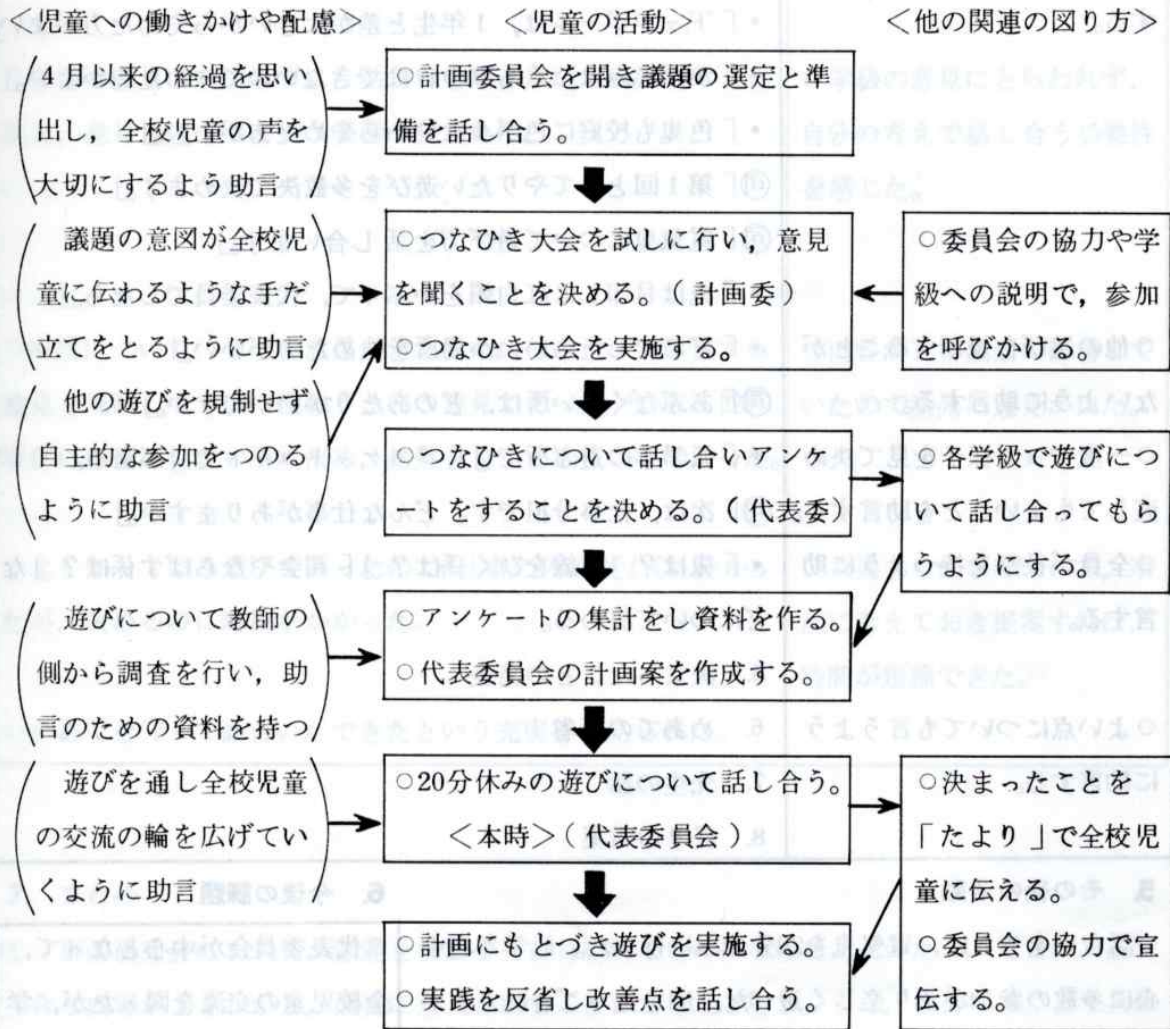
4. 授業の展開

指導の手だて	活動の過程
<p>○議題は内容がよく分かるように行動目標的に、めあてはより具体的に、提案理由は経過を大切に、どうしたいかも分かるように説明させた。</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1. はじめの言葉（出席の確認） 2. 議題の確認と連絡事項の発表 3. めあて、提案理由の説明 4. 話し合い <ul style="list-style-type: none"> ○つなひきのスライドの様子を説明しながら見せる。 ○遊びのアンケート結果をグラフを使い説明する。

2 本時にいたるまで

4月以来、遊びに関連したことがしばしば議題として取り上げられた。まず初めに、サッカーゴールの使い方について5年生から意見が出された。代表委員会で話し合って校庭での遊びの約束や場所決めを行った。ところが、二学期になり、「他の遊びができない」「場所がとれない」などの意見が出されたので、計画委員会で議題として取り上げることとしたのである。計画委員会では、話し合いの前に全校児童の反応を調べるために、つなひき大会を企画し実施した。さらに、遊びのアンケートも行い遊びについての実態をつかみ、話し合いの資料とした。

① 活動の過程



児 童 の 反 応	考 察
○議題の確認の後で、生活委員会より集会について連絡があった。伝達事項がしっかりと徹底しなかったようである。 ○児童の様子を説明しながらスライドを映すことができた。 ○アンケート結果をグラフや表に表わし、積極面を強調しながら説明されたので、よく理解できたようだ。	○提案理由と話し合いの間に連絡が入ったので、意図が伝わりにくくなってしまった。 ○つなひきの楽しい様子や全校児童の考えがよく分かり話し合いの意欲づけになった。

<p>○どれもできそうなので、今回は一つを試みるように助言する。</p>	<p>④「スライドやアンケート結果を見て感想を言って下さい。」</p> <p>④「意見が出ないので近くの人と話し合ってください。」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「みんな力を合わせ、楽しくやっているのよ良かった。」 ・「つなひきのようにみんなで力を合せる遊びがいい。」 ・「ルールがはっきりしなかったから決めておいた方がよい。」 <p>④「1年から6年までできる遊びは、どんなものがいいですか。」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「しっぽとり」「ドッジボール」「うず」「玉入れ」「色鬼」「電気鬼」「かげふみ」が出される。 ・「ドッジボールは、1年生と差が大きいからやめた方がよい。」 ・「かげふみは、くもりの日はできないのでやめた方がよい。」 ・「色鬼も校庭に色が少ないからやめた方がよい。」
<p>○他の遊びを規制することがないように助言する。</p>	<p>④「第1回としてやりたい遊びを多数決で決めます。」</p> <p>④「電気鬼について遊び方を話し合います。」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「鬼は目印しに紅白帽をかぶって、代表委員でしたら。」 ・「どこでしたらいいか場所を決めた方がいい。」
<p>○一度やって様子を見て決め直してもよいことを助言する。</p>	<p>④「あぶくない所は、どのあたりがいいですか。」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「低学年の遊ぶ所で」「バスケットコートで」が出る。 <p>④「次は、仕事分担です。どんな仕事がありますか。」</p>
<p>○全員が役割を持つように助言する。</p> <p>○よい点についても言うように助言する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・「鬼は?」「線をひく係は?」「司会やらばす係は?」などについて決める。 <ol style="list-style-type: none"> 5. 決まったことの発表 6. めあての反省 7. 先生の話 8. 終りの言葉

5. その後の活動

○話し合いをもとに、電気鬼を20分休みに行った。低学年を中心に多数の参加があり楽しく遊べた。回を追うごとに人数が増えてきたので、再度代表委員会で話し合い下記のように他の遊びも入れて、順番に行うこととした。

① 遊びの順番 ② 場所(なかよし広場) ③ 遊ぶ日

<ol style="list-style-type: none"> 1. 玉入れ 2. しっぽとり 3. ボール遊び 4. 電気おに 5. うず 		<p>毎週</p> <p>火曜日</p> <p>金曜日</p> <p>※雨天は次の日にする。</p>
--	--	--

6. 今後の課題

○代表委員会が中心となって、全校児童の交流を図ったが、学年の枠をはずした遊びが自然にできるようになるまでは、これからも継続的な活動を続けていく必要性を感じる。また、生活面の議題は、全校の関心を高めることが必要であり、学級会との連携を図りながら、今後も取上げていくようにしたい。

- | | |
|--|---|
| ○資料について意見が少ないので、司会がバズを行った。その後、意見や感想が多く出た。 | ○バズセッションが話し合いの活性化に役立った。 |
| ○各学級で友達から聞いてきた意見も出された。 | ○スライドやアンケート結果から意見が多く出され、資料が活用できたようであった。 |
| ○アンケート結果から全校児童の考えを尊重して意見を言えた。 | ○話し合いの目あてを設けていたので議題にそって話し合いを深めることができた。 |
| ○出された遊びの中から、全校でできそうな遊びか検討した。 | |
| ○低学年のことも考えて意見を出すことができた。 | |
| ○学級の意見にしばらずに、話し合いを聞きながら自分の考えを変え、意見を述べるという姿勢が見られた。 | ○学級の意見にとらわれず、自分の考えで話し合う必要性を感じた。 |
| ○場所について、2つの意見が対立した。他の遊びを尊重する意見と規制しても広く使おうという意見であった。今回は、他の遊びに影響の少ない所に決め、結果を見るということになった。 | ○内容が日常生活に密着していたので活発に意見が出た。 |
| ○よく知っている遊びであったので、仕事の内容がすぐに分かったが、決めるのに時間がかかった。 | ○共通する仕事について、事前に考えておき提案すれば、時間が短縮できた。 |
| ○めあてを守って話し合いができたという充実感が見られた。 | |

7. まとめ

- ① 事前研究会において、議題を検討し行動目標的なものに改めた。そのため、児童は、話し合う内容がよくわかり、活発に意見を出すことができたと思う。また、めあても、より具体的な内容にしたので、児童が常に念頭において意見が出せ、議題にそって話し合えた。
- ② さらに、話し合いの内容も、検討事項を絞ったので、焦点の合った話し合いができた。深まりのある話し合いがもてたので、児童に充実感を持たすことができ実践意欲も高められた。
- ③ 試しの遊びやアンケートの結果をスライドやグラフ、表にまとめ、資料として話し合いの前に発表したことで、全校児童の遊びの様子を代表委員がよく理解できた。また、全校児童の意見にそって意欲的に話し合うことができた。
- ④ 助言は、自治的、自発的なことを越えない場合は、非指示的なものが望ましい。課題解決に向けて、多面性を与える助言にすることが大切である。

Ⅲ 集会・委員会活動の実践例

〈実践例 1〉「テイデアいっぱい 楽しい七夕集会」— 集会活動 — S区K校
本校では、代表委員会を軸として実行委員会を組織し、全校児童の創意工夫とアイデアを生かして、毎年、楽しくいきいきとした七夕集会を行っている。

1. 昭和59年度七夕集会の活動日程

- 5月の代表委員会で本年度の七夕集会の基本方針を確認する。(日時・場所一校庭など)
- 6月6日の昼の放送・7日の集会で基本方針を話し、アンケートの記入のおねがいをする。
- 7日 代表委員・連絡係を通してアンケート用紙を全校児童に配布○9日アンケート回収
- 11日 定例計画委員会で回収されたアンケートを基本方針にそって整理し、いくつかに絞る。
- 13日 定例代表委員会で計画委員会から提出された結果を、さらに基本方針にそって絞る。
実行委員会結成……計画委員 四年以上の代表委員 広報・集会・体育・放送・掲示・園芸の各委員会委員長、科学・ダンス・合奏・演劇・工作・絵画の各クラブの部長で構成する。
- 14日 決定事項の発表(昼の放送・児童集会)○15日 代表委員・連絡係により詳しく伝達。
- 15日 から 各パートで練習・準備。全校練習一歌と合奏—28日児童集会
装飾 笹かざり(一年生)7月2日, かざり完成3日, 短冊のかざりつけ4日(全員)
低学年へ…ダンスと歌合奏の指導(私たちの時間)ダンスクラブ・合奏クラブが指導
宇宙人パレード 出場者確認・コメント作り, コメント台本作り, 出場者うち合わせ
- 21日 小山タイム 実行委員会でプログラム・体形, 係分担についての話し合い
- 7月4日 総合リハーサル, ○7月5日 七夕集会実施
- 7月6日 反省用紙配布 9日 定例計画委員会で整理 12日 代表委員会で発表

2. アイデアを募る(条件を出し、アンケート形式で全校児童からアイデアを募る)

- 1. 七夕に関係しているもの =アンケートの内容=
- 2. 45分以内にできるもの ①七夕集会で自分達がやりたいもの
- 3. 全校全員が楽しめるもの (いくつでもよい)
- 4. 学級での練習や準備のいらぬもの ②七夕集会に委員会やクラブの人たちに
- 5. 動きのあるもの やってほしいもの(いくつでも)
- 6. 自分達の手でできお金のかからないもの ③雰囲気をもりあげるかざり

◎アンケートから出てきた主な意見(後述のプログラムにとりあげられたものは除く)

自分たちでやりたいもの

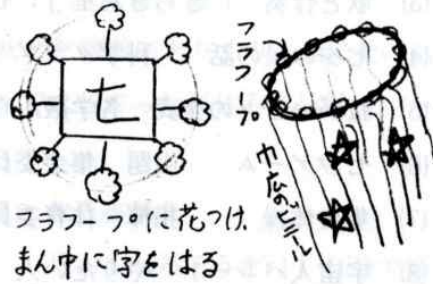
やってほしいもの(クラブ・委員会などに)

- 宇宙人パレード • UFOの絵 • 七夕伝説の劇(演劇クラブに)
- 織姫・ひこ星コンテスト・百年後の宇宙 • 七夕に伝わる各地の行事(図書委員会に)
- 七夕ミニオリンピック • 笹竹コンテスト • 太陽系ができるまで(科学クラブに)
- 織姫・ひこ星対抗大玉ころがし ほか • 雰囲気をもりあげるBGM(放送委員会に)

かざり 紙テープ、輪かざり・花・シュルチューン

- ・ちょうちん・星の冠・星のペンダント・アーチ
- ・星のワッペン・アルミ箔の天の川・扇状かざり
- ・かささぎ・織姫・ひこ星の絵・校庭からみてき

れいのように各教室の窓に星をちりばめる。



フラフーフに花つけ
まん中に字をはる

3. 役割分担

組織	活動内容	組織	活動内容
合奏クラブ	歌と合奏の指揮・伴奏	集会委員会	七夕クイズを考え出題する
科学クラブ	七夕の話	放送委員会	放送担当・BGMを選曲し流す
演劇クラブ	はじめの言葉(寸劇で)	体育委員会	集会体操の指揮
工作クラブ	かざりの計画・指導	掲示委員会	七夕集会の看板を書く
絵画クラブ	織姫・ひこ話の絵	園芸委員会	笹竹の管理と世話
代表委員会	七夕伝説の紙芝居朗読他	計画・広報	司会・進行
ダンスクラブ	ダンスの指揮・オープニングダンス(創作)バトントワーリング	委員会	インタビュー

4. プログラム

- (1) オープニングダンス 銀河プレリュード ダンスクラブ
- (2) 紙芝居「七夕の伝説」 ナレーション 代表委員 (模造紙2枚分の大きさ)

〈児童会コーナー 1〉 代表委員会の事前の指導……こんなところに気を付けて

月一回の代表委員会は、どうしても準備不足のため、なにについて話し合うのか、どんなことを相談していいのか、わからず、時間だけが延びてしまったり、去年と同じだったり、魅力のない会になってしまうことがあります。

そこで、代表委員会を開く前にこんな指導をしてみても、どうでしょう。

- (1) 代表委員会を開く一週間ぐらい前に運営委員会を開くようにします。そして、運営委員は、高学年代表委員が輪番で担当し、いつも同じ人でなく、みんな経験するようにします。また、代表委員会や運営委員会の司会・記録なども交代で行うようにします。
- (2) 運営委員会で、みんなから集まった議題を選定したり、処理をします。議題に取り上げるものも、取り上げないものも、どうなったかみんなにわかるようにしておきます。
- (3) 議題が決定したら、ねらいをはっきりさせ、実施計画を立てます。実施計画には、議題やめあて、話合いの順序などを考えておきます。

代表委員会までの日程を考え、運営委員の係の打ち合わせを十分に行っておきます。

- (4) 実施計画ができたなら、前もって代表委員に内容を知らせておきます。代表委員は自分の考えをまとめ、書いておくと、代表委員会の話合いが活発になります。

代表委員会がもたれるまでの事前の活動(運営委員会、議題選び、実施計画作成、予告や準備など)が1ヶ月のサイクルとして計画化されていることが必要です。

- (3) 歌と合奏 「きらきら星」「七夕さま」1・2年ハーモニカ・他に笛 指揮合奏クラブ
- (4) 七夕の星の話 科学クラブ (BGM 放送委員会)
- (5) ねがいごとの発表 各学級から代表1名ずつ
- (6) 七夕ゲーム 出題 集会委員会
- (7) 集会体操 指揮 体育委員会
- (8) 宇宙人パレード やりたい人 パレード先頭…ダンスクラブのバトントワーリング
- (9) 全校ダンス 「ディン・ドン・ダディ」 指揮 ダンスクラブ

<宇宙人パレード>

◎創意工夫で特に集会を盛りあげた

- ・やりたい人誰でもよい。一人でもグループ(五人以内)でもよい。
- ・衣装にお金をかけない。
- ・どこの星からきたのか、その星はどんな所か等をコメントでつづる。
- ・作成されたコメント台本を演劇クラブの人が読む。
- ・バトンに先導され学年間をパレード

5. まとめ

全校あげての大集会である。毎年のことながら、大変盛りあがった。特に宇宙人パレードには29組・88人が参加し夢いっぱいのパレードがくり広げられた。計画から反省にいたる一連の活動を通して実行委員はもちろん、全校児童が意欲的にとりくんだ。

自分達が出した意見やアイデアが、実現されていくことによる喜びと満足感を得、次への意欲をかりたてたようである。とりわけ、宇宙人パレードには全学年とも非常に満足したようである。

<児童会コーナー 2>

事後の指導……次回へ生かす工夫

集会に関する議題の場合、楽しい会にしようと、児童間の話合いには熱が入ります、集会等日も、成功するようにと目を輝かせ、児童は生き生きと活動しています。ところが、終わったあとはどうしているのでしょうか。事後の指導は、次回をよりよくするためにもしっかりしておかなければならないものですが、終わったという安心感から簡単に済ませてはいないでしょうか。ここに事後の指導の一例を紹介しますので、参考にしてみてください。

集会が終わったら連絡係が各クラスに感想や次回への希望を聞きに行きます。(この時間も集会計画の中に入れておきます。)それを持ちより、後日代表委員会で反省します。ただ反省に終わるのではなく、次回はどうしたらよいか話し合い、引きつぎができるようにきちんと記録に残します。また、集会時の写真等は、解説をつけ掲示します。一週間ほどしたら取りはずし、とじておきます。そして集会で使った物といっしょに集会ごとに整理しておきます。そうすれば、次回、計画を立てるときの資料になるわけです。前回の集会をもとにしなが、工夫を加えていくのも一つの方法ではないでしょうか。

また、資料を見ることにより、前年度の代表委員会からの引き継ぎがされ、自分達で工夫しさらに、次年度の代表委員会の資料を作成していくわけですから、児童の心の中には、事後の活動にも意欲が生じてくるのではないのでしょうか。

教師間にも同じことが言えると思いますが……。

〈実践例 2〉 「夏休み作品展」 — 集会活動 — K区I校

「夏休みに、先生から与えられるのではなく、自分で決めた課題にとりくみ、秋にその結果をもちよって、夏休み作品展をひらきたい」という趣旨ではじまった夏休み作品展は、今年で3回目になる。

第5回 代表委員会議題提案（7月2日6校時）

- 議題 夏休み作品展について
- 目的 夏休みぼけっとしていないでひとりひとり目的をもって何かやろう。
- 日時 9月5日から一週間
- 場所 児童会室
- 持ってくる日 9月1日
- 作品
 - ・大きすぎたり小さすぎたりしない。
 - ・何品出してもよい。 ・一人で作ってもグループで作ってもよい。 ・お金はなるべく使わない。 ・なるべく家にある物やはい品を利用して作るとよい。
- 係
 - ポスター係→3年生以上（各組1名）
 - 展示係→4年生以上（各組男女2人ずつ）
 - 審査員→5, 6年生（各組男女1人ずつ）
- その他
 - ・賞は一部につける。 ・見はりをつける。
 - ・みんなの参考になる作品は紹介する。

1. 代表委員会

「おもしろそうだ」「自分で好きなことを何かひとつやってみるのはいいことだ」「先生から出される宿題じゃないということがやる気を起こさせる」「友だちの作品をみるのが楽しみだ」「クラスでは、今度は何をつくろうかともう決めている人が何人もいる」など、作品展に期待をよせる意見が活発に出される。



2. ポスター

代表委員会に参加していない1年生や2年生にも夏休み作品展を知らせ、全校みんなの気持ちを作品展にむけるためにポスターを募集し、はり出す。夏休みに入る前に、子どもたちの間で、すでに作品展が話題になっている。

3. 作品展示

9月1日、各クラス毎に作品が集められる。短縮期間中の午後、展示係の子どもたちにより展示準備が行われる。計画委員の考えた会場図に基づき、パネルと机を使って、児童会室とその廊下が展示室へと変えられていく。壁にかけた方がよい作品、机の上にならべたいもの、空間につり下げたいもの等、子どもたちはいろいろ考えながら展示していく。作品には、絵画・



工作・手芸、自由研究など実に様々なものがみられた。

4. 作品に与えられる賞

「賞は特定の作品につける」という案に対して反対の意見がたくさん出された。「がんばって作るのだから出した作品には全部賞がほしい」「良い作品だけに賞をつけるのではやる気がなくなってしまう。」話し合いの結果

審査員は、作品全体をみてどんな賞をついたらよいか考え、話し合い、賞を色別の色紙で表すことになる。子どもたちは、作品についての賞をとっても喜んで見ていた。

クリーム	茶	ピンク	赤	黄	はだ色	きみどり	灰	むらさき	みどり	銀	金	賞とその色別
…カラフル賞	…がんばり賞	…たのしいで賞	…ティディア賞	…グループ賞	…科学賞	…ユニーク賞	…はい品利用者	…ユーモア賞	…研究賞	…児童会長賞	…優秀賞	

5. 作品展、優秀作品発表集会

土曜日の児童集会の時間、参考になる作品をみんなに紹介する。

プログラム

1. はじめのことば
2. 児童会会長のお話
3. 作品紹介とお話
 - 1年 「石あつめ」
 - 2年 「鉄棒をする人」
 - 3年 「しきりが動く本立て」
 - 4年 「牛乳パックで作ったいす」
 - 5年 「平安朝の歌よみ会」
 - 6年 「竹ひごでつくった家」
4. 作品紹介（学年1点ずつ、お話はなし）
5. 先生のお話
6. おわりのことば



作品紹介に選ばれた人には、前もって集まってもらい、集会のための打ち合わせ会をひらく。プログラムの順番や作品紹介の内容を確認する。作品紹介では、作った動機、つくり方、苦労したところ、作品についての感想などを話してもらう。

6. まとめ

作品展に作品を出さない子はほとんどいない。先生方の作品もいくつか出品される。作品には、年々、創意工夫されたものが多くなっている。作品展が終わった段階で、すでに来年つくるものを決めている児童も何人かいる。家の人たちにも見てもらいたくて案内状を出している。ほとんどの親が、子どもたち手づくりの会場に足を運んでくれている。子どもたちがつくりだした行事として、着実に定着してきている。

1. 指導計画と実施計画

自分たちの学校生活を向上発展させるための常時活動と、委員会が中心となって全校に働きかけて計画、運営できる自主的活動の2種類の活動が、より活発な活動をできるように指導計画を教師側はしっかりたてておかななくてはならない。ねらいや留意点、予想される活動などを盛りこんだ指導計画は、活動計画や実施計画をたてさせる上で大切である。

- 運動委員会の予想される活動 -

常時活動	自主的活動		
	1学期	2学期	3学期
<ul style="list-style-type: none"> ○ ボール調べ ○ 体育倉庫の整備 ○ ボール空気入れ 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 遊具作り ○ 七夕集会でのゲーム 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 遊び調べ ○ 遊びの紹介 	<ul style="list-style-type: none"> ○ なわとび進級表 ○ なわとび集会

2. 活動内容例

- なわとびリーダー -

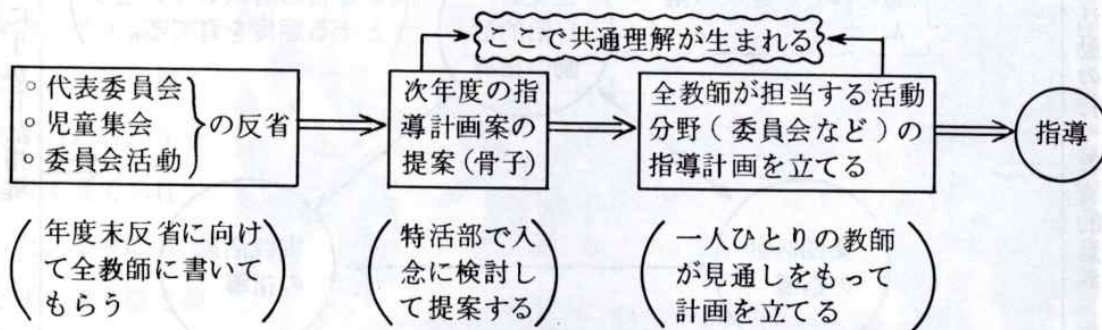
体力の向上と運動の生活化をねらい、全校でなわとびが実施されている。11月から3月まで検定カードに沿って計画的になわとびの練習をしている。運動委員会では、全校のなわとび活動に委員会として何かできることはないかという声があがった。話合いの結果、運動委員会のメンバーがなわとびリーダーとなって、全校のなわとび活動に参加することになった。

〈児童会コーナー 3〉 教師集団の共通理解を図るには

児童会活動は全校的規模で実践するところに特徴がある。それゆえに、教師集団の共通理解が重要である。共通理解なくして指導はありえない、といっても過言ではない。

共通理解を図っていく方法として2つ挙げてみたい。

⑦ 指導計画作成の過程の中で



⑧ 反省記録を生かすことで

集会が終わるごとに全教師に感想を書いてもらい(簡単にひと言でもよい)、それを整理して後日配布する。その記録のファイルは、年度末反省や次年度の計画の参考にする。このような方法は、共通理解の積み重ねにもなる。

なわとびリーダーの仕事として
以下のようなものが決められる。

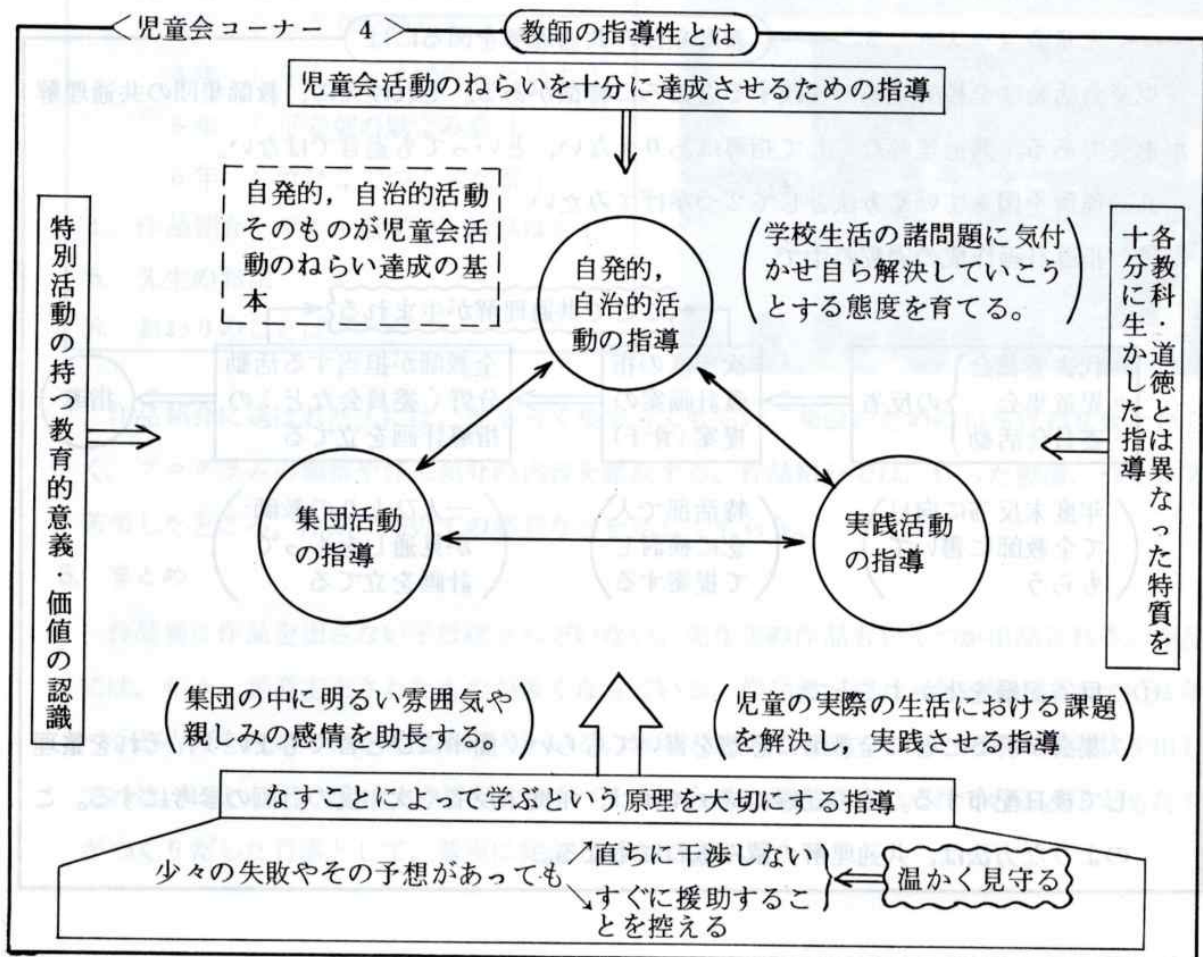
- 検定を行う
- なわとびのとび方をわからない人に教える。
- 進級表をつくり 進級のようすを全校に知らせる。
- 努力して進級した人を全校集会で紹介し、見本をみせてもらう。



— 下級生に教える運動委員会 —

毎週月・水・土の20分休みに、
なわとびリーダーとなった運動委

員会のメンバーは、検定を行ったり、とび方を教えていた。どのメンバーも自覚が生まれ、目が生き生きと輝いていた。上級生と下級生の触れ合いが生まれ、それは全校に広がっていった。他の児童も、なわとび活動に対する参加意欲が増していった。自分たちの考えで、自分たちの力でなわとび活動に参加し、全校の活動を活発にさせたことに満足のようにであった。全校集会で、努力し進級した人を紹介する運動委員会のメンバーは、誇らしげであった。



1. 指導計画と実施計画

常時活動の多い栽培委員会では、自主的活動が忘れさりがちである。目立たなく児童にとって興味のない活動もあるが、植物に対する愛情を持つことが大切であることを意識づけたい。

全校児童が植物に対する愛情を深められるよう、栽培委員会が働きかけるような自主的活動を考えさせたいものである。

－栽培委員会の予想される活動－

常時活動	自主的活動		
	1学期	2学期	3学期
<ul style="list-style-type: none"> ○ 学校園の世話 ○ プランターの草花の世話（種子まき、除草・かん水） 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 各学級へ草花を送る。 ○ 七夕集會に花を飾る。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ ぶどうかり ○ 落ち葉ひろい ○ 植物の紹介 ○ 感謝集會の花飾り 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 校庭の樹木に名札をつける。 ○ 6年生を送る集會に花を飾る。

2. 活動内容例

－集會に自分たちの育てた花を飾ろう－

栽培委員会では特別集會（1年生を迎える集會・七夕集會・感謝集會・6年生を送る集會）に、植物の飾りつけを担当してきた。しかし、今までは各学級に配られた植物（市販のもの）を集めて飾りつけていた。2学期の感謝集會が終わった後、飾りつけの花を種子から自分たちの手で育てたいという声があがった。そこで、3学期の6年生を送る集會、来年度の1年生を迎える集會に向けて、種まきから始めることになった。

何の植物を育てるかについて話し合われ、チューリップとショッカサイに決まった。さっそく種子まきが行われ、集會に向けて育てられていった。集會にちょうど咲くよう温度調節など工夫していった。残念ながら、チューリップの花は咲



－集會に飾りつけられた花－

かなかつたが、1年生を迎える集會には子どもの愛情と共に見事に咲き開き、集會に飾りつけられた。集會で、栽培委員会が今まで苦労して育ててきたことが紹介され、全校児童から大きな拍手をうけた。

Ⅳ まとめと今後の課題

1. 研究のまとめ

本年度は昨年度に引き続いて「児童会活動の特質をふまえた望ましい指導のあり方」を主題にして第2年次としての研究を行った。授業研究や事例研究会には都内全域から多忙の中を大勢の先生方が熱心に参加された。私達がここから学んだことは多々あるが、ここに本年度の研究の成果として代表委員会話し合い活動を活性化させる手だてを3点挙げておきたい。

(1) 事前の指導を行うこと

代表委員会は実施できる回数が少ない。組織や運営面から見て話し合いで結論が出なかったからと次回まで待つとか、臨時に開くということがやりにくい。また、学年や活動経験の異なる子ども達が一単位時間の話し合いで全校的な問題について有効な解決策を得ることは難しいことである。短い時間内に効果的な話し合いを進めるためには、担当教師や学級担任の温かい指導と援助のもとに行われる運営委員会を中心とした事前の活動が重要である。

(2) 資料の活用を図ること

本年度行った3回の研究授業ではいずれも資料が活用されているのが印象的であった。特に提案理由の段階で効果的に提示されていたので話し合いの課題が明確になった。例えばアンケートの結果をまとめたグラフ、遊びの実態を録画したビデオ、低学年の声を集めた録音テープ、今まで活動記録や反省などが出されていた。

児童会活動の記録や反省を話し合いの資料として活用することは、マンネリ化を打破し、創意・工夫を生み出す土壌になるものである。

(3) 内容を絞り、時間内に課題を解決すること

代表委員会は全校的な活動に取り組んでいるために1回の話し合いで解決しなければならない課題が多い。45分以内で話し合わなければならないことが沢山あれば指導的、指示的助言が多くなりがちであり、時間も延びてしまうことがある。自治的活動が育ちにくい要因の一つはここにもある。1時間以内にやること・できることを明確にして活動計画を立てることが大切である。

2. 今後の課題

本年度の研究授業では議題として遊びの問題を2回取り上げた。学校の日常生活に関する議題は生活指導との関連が深い。そのため自治的活動になじみにくい面があって指導が難しいと言われている。しかし、自発的・自治的に活動できる子どもを育てるためにはこうした議題に関する話し合いも大切であり、今後の大きな研究課題であると思われる。

3. おわりに

さいごになりましたが、各地域の先生方のご協力により研究を深めることができましたことに感謝します。特に研究授業を公開していただいた各校の先生方、適切なお指導をいただいた講師の先生方に厚くお礼申し上げます。

Ⅲ クラブ活動

テーマ 「クラブ活動の特質を生かす指導のあり方」

○ 研究の経過および研究・執筆者名簿	56
I まえがき	57
II 指導計画と実施計画	58
1. 年間指導計画	58
(1) 年間指導計画作成の基本的な考え方	58
(2) S区F校のクラブ活動の指導計画	58
2. 実施計画	60
(1) 実施計画作成の基本的な考え方	60
(2) 年間実施計画の例	61
(3) 1時間の活動の例	62
III クラブリーダー — 実践記録を中心として —	63
1. Q校のクラブ活動の3年間のあゆみ	63
2. 存在の薄かったクラブリーダー	66
3. 考察	67
IV 評価	69
1. ねらい	69
2. 観点	69
3. 方法	70
4. 個人カードの例	71
5. 評価を生かすために	71
V クラブ活動の実態調査から	72
1. クラブ実施上の問題点	72
2. 小規模校におけるクラブ例	73
3. 「クラブ活動に関する学校内の共通理解についての調査から	74
VI 研究の反省と今後の課題	78

—— クラブ活動の特質 ——

1. 学年のわくをはずした集団活動
2. 同好の児童の集団活動
3. 共通の興味・関心を追求する集団活動
4. 計画や運営を児童自身でする集団活動

○ 研究の経過

59. 5. 31 (木) 定期総会, 分科会, 組織づくり
 59. 6. 21 (木) 本年度のテーマ決定, 実態調査, 研究計画
 59. 7. 9 (月) 各校のクラブ活動の現状と問題点, 年間計画と実施計画の検討
 59. 8. 2~3 全特活東京大会参加
 59. 9. 4 (火) 各校のクラブ活動に対する組織・運営・実施上の共通理解
 59. 10. 12 (金) クラブ活動研究授業 板橋区立板橋第九小学校全クラブ
 59. 11. 1 (木) 研究集録のプロットの研究
 59. 11. 30 (金) 研究集録の原稿執筆者決定
 60. 1. 18 (金) 研究集録の原稿検討, 研究発表者の決定
 60. 1. 29 (火) 研究集録の校正, 研究のまとめ
 60. 2. 8 (金) 研究発表会の打ち合わせ, 諸準備
 60. 2. 28 (木) 研究発表会

研究・執筆者名簿

部長	関口 照治	墨 田・業 平 小	(発表)	福島 尚子	板 橋・第 九 小
副部長	後藤 治司	荒 川・第二瑞光小	(発表)	田中 和子	板 橋・赤塚新町小
副部長	湯田 耕司	三 鷹・井 口 小		山崎 玲子	北 三・第三岩淵小
(記録)	佐藤 正吉	中 野・北 原 小		小野寺輝子	足 立・千寿第八小
庶 務	長田 信彦	豊 島・高 松 小		中川 健二	世田谷・松 沢 小
会 計	大久保アヤ	新 宿・淀橋第六小		井上 睦美	世田谷・松 丘 小
(記録)	佐藤伊都子	墨 田・両 国 小		小野 幸子	荒 川・四日暮里小
	塩沢 雄一	千代田・番 町 小		土屋 信行	中 野・北 原 小
	原田喜美子	千代田・千 桜 小		宇都宮 透	八王子・陶 鎔 小
	寺内 和	中 央・泰 明 小		伊藤 正人	立 川・南富士見小
	菅野 靖江	台 東・東 泉 小		野田 照彦	三 鷹・第 一 小
	塚越 正昭	墨 田・両 国 小		大崎美枝子	青 梅・第 三 小
	橋本 京子	品 川・第四日野小		上山根百樹	調 布・杉 森 小
	阿部 仁志	目 黒・向 原 小		土屋 徳松	町 田・忠生第五小
	北村 文夫	大 田・入新井一小		北村 敏子	田 無・谷 戸 小
	須藤久美子	大 田・池 雪 小		菱沼 昭子	狛 江・第 七 小
	伴 文昭	大 田・女 塚 小		横内マツ子	清 瀬・第 四 小
	網 保夫	世田谷・池之上 小		宮崎 玲子	清 瀬 第 六 小
	渡辺 弦	世田谷・奥 沢 小		滝口 徹	多 摩・連光寺 小

I まえがき

1. 研究主題について

東京都小学校特別活動研究会の研究テーマは「特別活動の特質をふまえた豊かな人間性の育成」である。これを受けてクラブ活動研究部では、昨年度の「クラブ活動の特質を高める集団活動のあり方」は研究の視点が漠然としているのではないかという反省にもとづいて、本年度の研究テーマを「クラブ活動の特質を生かす指導のあり方」とした。

2. 昨年度の反省

- (1) クラブの選択指導では、児童の声を中心に研究を深めてきたが、児童の考えの多様化につれて、クラブの種類の変化の方向をつかみたい。
- (2) クラブ活動が組織として円滑にすすめられていくためには、過去の経験を生かし、所属員同士の人間関係をよくし、技術の継承にも力を入れ、伝統あるクラブの育成に力をそそぐ必要がある。そのためにクラブの実態を児童自身がよく理解したり、発表の場の多様化を図り、クラブの地位向上にも努めなければならない。
- (3) 実態調査からみて、年間の回数を総時間数でみると基準に達していない学校が多くみられる。学校行事やカットによる代替えを円滑にやる方法の研究も必要である。

3. 本年度の研究の方向

(1) 指導計画と実施計画

テーマにあるように昨年度は「……集団活動のあり方」であった。本年度は「……指導のあり方」に研究をすすめる視点をあててみると、学校によってはクラブ活動の運営の基本になるべき指導計画の不備や、実施計画の不十分なところがみられた。そこで、指導計画や実施計画を立てるために、これだけはおさえておかねばならない点を検討し具体例をあげることにした。

(2) リーダーについて

クラブ活動を運営するためには、クラブ長、副クラブ長、書記、班長などのリーダーが必要である。だれでもがどのリーダーにもなれるようにすることが理想であるが、現実にはなかなかリーダーの活躍がうまくいかない面がみられる。そのためリーダーの実態をつかみ、選出方法、役割や心構え、教師とのかかわりなどを研究することにした。

(3) 評価

評価は、あまりやりすぎると重荷になるので、どのようにしたらよいか、クラブ日記や活動記録、個人カードの活用などを重点的に研究して、児童の興味・関心の満足度を高めたい。

(4) 実態調査から

実態調査はクラブ活動をみつめるよい方法である。どのような点がクラブ活動実施上問題になっているかを見い出して、その対策を考えたい。

Ⅱ 指導計画と実施計画

1. 年間指導計画

特別活動全体の指導計画の中に位置づき、クラブの特性を生かした教師の計画である。これは年間を通してクラブの設定や組織・運営の基本方針をおさえた計画で、この計画をもつことによって児童作成の実施計画（案）のバックボーンとなり、指導助言のよりどころができるわけである。

(1) 年間指導計画作成の基本的な考え方

- ① 児童の要求をできるだけ受け入れやすくしておく。
- ② 固定的な計画ではなく、実情により、いつでも変えられるものにしておく。
- ③ 児童が実施計画を立てる際の手がかりとなるものである。
- ④ 教科学習の補助的内容にならないようにする。

このような観点に立って年間指導計画を立てるわけであるが、あくまでも指導にあたる教師は、指導計画を参考にしながら、相談相手となり、実施計画を立てさせることが大切である。児童が主体となり運営し活動していくというクラブ活動の特質から考えてみても、指導計画どおり進められるより、児童の創意を生かすには、当然のことながら実施計画と指導計画のズレは認められてよいと考える。しかし、児童の主体性を認めすぎるとは、かえって集団としての活動がくずれたり、個人の恣意による活動が現れたりして、本来のクラブ活動のねらいそのものまで失うことになりかねないので、十分に留意したい。

(2) S区F校のクラブ活動の指導計画

① クラブ活動のねらい

児童が同好の集団において、共通の興味・関心を追求する活動をみんなと協力しながら自発的・自治的に行い、ひとりひとりの個性を伸長するとともに、学校生活を充実した楽しい豊かなものにする。

② 活動の内容

4, 5, 6年の全児童が、同好の集団に分かれて、みんなで活動の組織を作り、計画、運営に関する話し合いや共通の興味・関心を追求したり、その成果を発表したりする活動を、自発的、自治的にすすめる活動である。

③ 組織と参加学年

- ・設置するクラブの種類は、児童の希望や学校の実態を考えて学校側で決定する。
- ・4, 5, 6年の全児童が参加する。年間を通して交代しない。
- ・1クラブは各学年の児童によって構成されるようにし、集団活動の可能な人数をもって組織する。(6名以上)
- ・各クラブごとに運営の組織を作る(クラブ長、副クラブ長、記録、班長など)

④ 運 営

- ・毎週、木曜日 6 校時（50 分間）を活動の時間として当てる。
- ・全校教師で指導にあたる。できる限り 1 クラブ 2 名の指導者を配当するようにする。
- ・学校として活動の時間の確保に努める。

⑤ 指導上の留意事項

- ・児童の個々の興味や関心をできる限り尊重して指導に当たるとともに、児童が自発的、自治的に協力して活動計画を立てて活動を進めるようにすること。
- ・児童の個人の活動のみに終わることなく、できる限り集団活動を重視して指導に当たること。
- ・実施計画の作成に当たっては、危険性、予算のうらづけなど児童に無理のないように指導すること。
- ・活動の内容が単に教科の学習や補習にならないように留意すること。
- ・活動の成果も大切であるが、それ以上に協力して進める活動の過程を重視して指導に当たること。

- ・教師の助言は、児童の自発的、自治的な活動をさまたげないように留意すること。
- ・活動に必要な材料等の経費については、個人作品は児童個人の負担とすること。共同作品等の経費は学校で考慮すること。

- ・活動のために必要な経費を各クラブごとに学校として毎年明示すること。
- ・各クラブの活動の成果の発表の機会を多くするように努めること。
- ・第 3 学年はクラブ活動の選択について、3 学期に指導（学級指導）を行う。その後、クラブ見学会や 1 日クラブ参加などを経、クラブ発表会を観覧した後、希望を取り三学期中に所属を決定するようにすること。
- ・所属決定に当たっては、児童が安易に所属を考えないように慎重に指導に当たるとともに個別指導なども十分取り入れて当たること。
- ・同一児童ができる限り、2～3 年間にわたって同一クラブに所属して活動することを大切に、各クラブの伝統を作り上げるように努めること。

⑥ 予想されるクラブ活動の種類と活動

- ・年度当初に予想される活動

○ 第 1 回クラブ活動

自己紹介

組織づくり・クラブの運営組織

教師の指導のもとに活動内容を話し合っ て決める。（教師の指導助言と児童の希望の中からふさわしい活動を児童に選ばせる。）

活動計画をたてる。

担当教師の指導分担を明確にする。（全教師が指導に当たる。）

・予想されるクラブ活動の種類と活動

名称	活動のめあて	予想される活動	場所	人数
科学	○実験や科学的な原理を応用した工作物の作成をみんなで計画を立てて協力して行わせ、その楽しさを味わわせる。	○共同実験○生物観察などの計画と実施 ○クラブ発表会への参加	理科室	
美術	○絵画、工作、焼物などの作品の製作を、みんなで計画を立てて協力して行わせ、かいた	○絵画、工作、焼物の製作計画と製作活動 ○作品の展示、鑑賞など	工作室	

以下 略

2. 実施計画

(1) 実施計画作成の基本的な考え方

年間実施計画を立てる（何と何を、どんな目的で、いつごろ、何時間ぐらいする）

↓

題材別に実施計画を立てる（この題材を割り当てた時間内に、どんな順序、方法で）

↓

その時間の活動計画を立てる

- ① 児童が主体になって、教師の適切な助言のもとに作成する。
- ② クラブ内の人間関係を深めるもの。
- ③ 活動しやすくするために、融通性に富んだもの。
- ④ 個人の技能の伸長や成果ばかり期待しない。
- ⑤ 教科の補習的な内容にならないようにする。
- ⑥ 年間指導計画はそのまま正面に出さず、あくまで参考資料とする。
- ⑦ 年間活動予定時数は、はっきり明示しておき、計画作成上の重要な資料とする。
- ⑧ 前年度までの活動記録や実施計画も参考にする。
- ⑨ 季節的な考慮も忘れない。
- ⑩ 発表の機会を計画の中へ入れておく。
- ⑪ 学校の用具や施設も考慮する。
- ⑫ 実施に要する経費も考える。

以上のような点を十分考慮して、年間実施計画を作成する。ただし、前年度も同じクラブに所属していたり、同一クラブに継続して所属する者には、十分に個人計画が立てられるであろうが、一般的には、1か月から1学期間位の計画を立てさせ、少しずつ実践し、成功あるいは完成の喜びを味わわせることが大切である。もちろんこの時は、クラブ活動本来の目的を失うことのないよう留意しなければならない。

(2) 年間実施計画の例

① 演劇クラブの例

(演劇)クラブ年間実施計画				
めあて	<ul style="list-style-type: none"> 年2回の発表会を目標に、演技の研究をし、一人一人のめあてをたててしっかり練習する。 みんなで協力して活動する。 			
世話係	クラブ長(石川) 副クラブ長(大野・加藤) 書記(吉田・山田)			
活動場所	5年2組教室・体育館舞台	担当	佐藤先生	
学期	月	時間	活 動 の 予 定	備 考
1	4	3	<ul style="list-style-type: none"> 自己紹介 グループ作り 基本の練習の方法を相談し計画を立てる 	<ul style="list-style-type: none"> 世話係を決める 年間実施計画を立てる 1学期の計画を立てる 去年の活動を参考にする
	5	4	<ul style="list-style-type: none"> 早口言葉と台本選び パントマイムの練習をする 	<ul style="list-style-type: none"> 台本読みをする 全員で分担し、印刷・製本をする
3	2	4	<ul style="list-style-type: none"> 立ちげいこをする 大道具・小道具作り 	<ul style="list-style-type: none"> 共同製作
	3	2	<ul style="list-style-type: none"> クラブ発表会に参加 1年間の反省 	<ul style="list-style-type: none"> 記録に残す

② 机上旅行クラブの例

(机上旅行)クラブ年間実施計画				
めあて	<ul style="list-style-type: none"> 時刻表の見方がわかり、旅行計画が立てられるようにし、その土地の様子や歴史などを研究する。 知らない土地の様子を友だちどうしで教え合い、協力して知るようになる。 			
世話係	クラブ長(渡辺) 副クラブ長(竹田・三浦) 書記(山口・米田)			
活動場所	6年3組教室	担当	鈴木先生	
学期	月	時間	活 動 の 予 定	備 考
2	11	4	<ul style="list-style-type: none"> グループ研究 	
	12	3	<ul style="list-style-type: none"> 冬休みの旅行計画を立てる。 文通してわかったことをまとめる。 	
3	1	3	<ul style="list-style-type: none"> クラブ発表会の計画を立てる。 冬休みの旅行の発表をする 研究のまとめ 	<ul style="list-style-type: none"> 机上旅行クラブの活動を知らせる工夫
	2	4	<ul style="list-style-type: none"> 1年間の研究をまとめて印刷・製本する。 クラブ発表会の資料づくり 	<ul style="list-style-type: none"> 本は全学級に配る
	3	2	<ul style="list-style-type: none"> クラブ発表会に参加 1年間の反省 	<ul style="list-style-type: none"> 記録に残す

(3) 1時間の活動の例

1時間を効果的に活動させるには、さらに具体的な活動計画が必要である。次に1時間の活動の例をあげてみる。

〔球技クラブの例〕

① 実施計画

月	日	曜	司会	記録
活動内容	ソフトボール			
ねらい	グループに分かれて練習方法を話し合い、計画的に練習する。			
活 動 の 予 定				準 備
1. 出席をとる。 2. 今日の予定を確認する。 3. 全員で準備運動をする。 4. A, B, Cのグループに分かれて練習する。 ○話し合い ○練習 ○整理運動 5. 今日の反省をする 6. 先生の話 7. 来週の予定を話し合う				○ボール ○バット ○ベース
記 録	(大切な活動内容、予定以外の活動、反省など)			

② 本時の実践

児 童 の 活 動 ○リーダー・メンバー	教 師 の 留 意 点
—— 前 略 —— ○準備運動をします。 リーダーを中心にして準備運動をする ○グループに分かれて練習してください。 (Aグループ)キャッチボールの相手が同学年になら ないように話し合って決めている。 ○よし、今の受け方がいい。 —— 後 略 ——	○教師も準備運動をする。 ○グループ練習を見てまわり、 活動内容を把握していく。 ○Aグループに入り、児童相手にキャッチボールをする。

③ 問題点・対策

ア. 雨の日に備えて、室内での活動内容も合わせて計画を立てなければならない。例えば、各球技のルールを調べるなど。

イ. 技術向上に陥りやすい傾向がある。そのために、グループ単位の活動を重視する。

1. Q校のここ3年間のクラブ活動の実践例の中からリーダーに関するものをあげてみた。

「リーダーを育てる」ことは各分野からの指導が相互に影響し合うことがいえそうだ。しかも、どんなりっぱな手だてをとっていても、最後にはその子の人間性にかかわるものが大きいように思う。しかし、適切な指導の手だてをとることにより、それらが効果的に影響し合い、少しずつリーダーとしての力が定着していくのではないかと考えられる。

Q校もクラブの分野からとくにリーダーを育てようという手だてはとらなかった。しかし、どうにかリーダーらしい行動が見られ、活動内容もねらいに沿って充実のきざしが見えてきた。どの教師も本来の指導助言という立場をとることができるようになり、安心してクラブの担当をやれるようになったという声を聞くようになった。

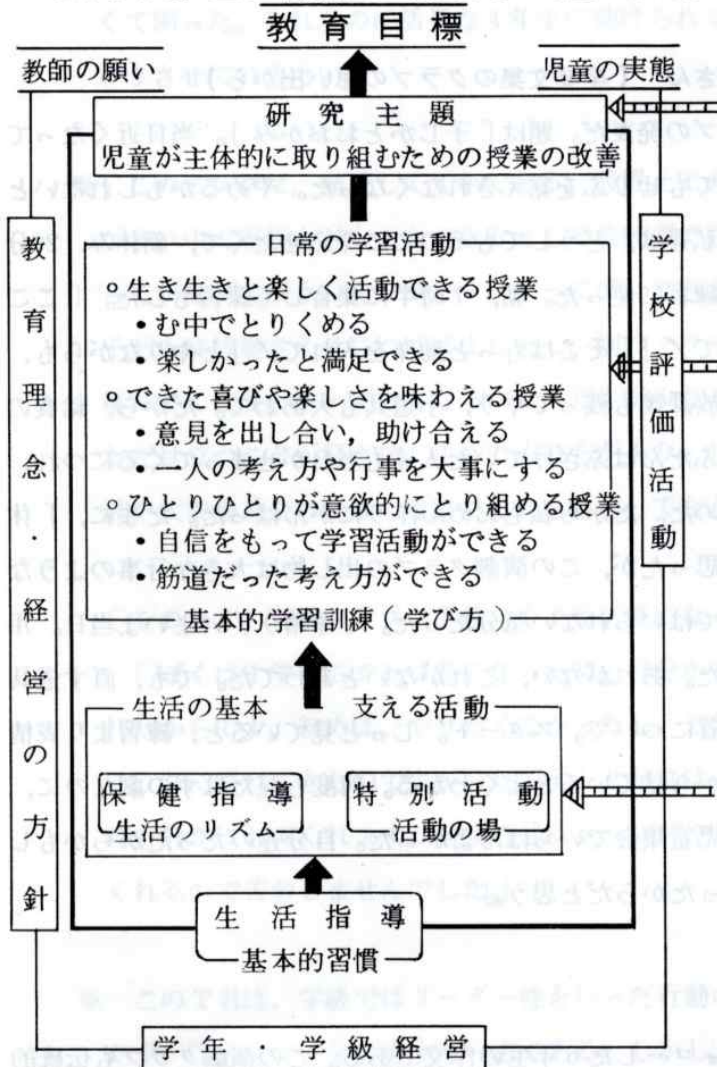
ここに、Q校の取り組みの一部を図式でとらえてみたい。

児童が主体的に取り組むための授業の改善

- ・算数科を通して
- ・特別活動・保健指導・生活指導を支えとして

研究の基本構想

〔自ら考え、正しく判断し、実践できる児童の育成〕



図式でもわかるように、特別活動にしぼって研究主題をとらえたわけではない。しかし、実際に児童の生活で顕著に変化を表しはじめたのが実践の場として児童活動にみられたのである。

それに併せて、児童活動部としてはきめ細かな指導計画を立て、全職員の共通理解を図っていった。

委員会をはじめ、クラブ活動等にもリーダー、フォロワーの両面から児童に主体性がみえはじめたという変容の報告が多く寄せられている。

次にその実践の一端を児童の記録の中から述べていきたい。

〔その1〕

陸上クラブのT君(クラブに入っ
ての感想から)

「4年生の時、走るのが好きで陸上クラブに入った。その時、リレーの選手にもなれ、ますます好きになった。幅とびでは他の人よりも

記録が伸びた。5,6年ではもっと記録を伸ばそうと入った。3年間もやっているのも最後にはクラブをまとめようと思ってクラブ長に立候補してなった。でもなってみると、みんながどういうことをやりたいのかがよくわからなかったり、自分勝手なことばかりする人がいたりして苦勞した。それでも、クラブの前の日か当日の先生と打ち合わせは忘れたことがない。それと、うまくいくようにしたことは、ペアを組んだりする時には、ぼくから進んで4,5年生となるようにしている。オリンピック等はみんなが楽しく、仲よくできた。ただ走ったり、とんだりだけでなくそういうことも工夫して楽しくなるようにしていきたい。」

※ T君は作文にもあるように、3年間継続入部し、クラブ長となった。学力もあり、クラスの人望も厚いようだ。特に、友達を好き嫌いをしない、性格的なものなのか、常に彼のまわりは明るい雰囲気である。T君が4年生の時、やはり3年継続していたMという6年生がいた。M君は卒業してからも陸上クラブで記録をあげていった。T君たちもM君の人柄のよさや記録のことで影響を受けたようだ。自分も6年生になったらまとめ役をやらうと思っていたようだ。

〔その2〕 演劇クラブのWさん（卒業文集のクラブの思い出から）

「……児童集会の演劇クラブの発表だ。題は「子じかとおおかみ」。当日近くになってある役の4年生の子がどうしてもせりふを覚えきれなくなった。やめるかもしれないところまで考えた。でも私達は、どうしてもそのこにやらせたくて、朝休み、20分休、昼休みと遊び時間を全部練習に使った。朝、7時半に集合して練習もした。「ここがだめ!」「あそこも注意して!」「そこはもっと動作を入れて!」とやりながらも、6年生はおめん作りをした。放課後も残ってやり、小道具も大あわて。だから、給食の時も欲しい程大変だった。/ふだんはふざけていた人達も当日がせまってくるにつれ、さすがに、真剣に練習しはじめた。だから私もおめん作りにがんばった。たまに、「休み時間が欲しいなあー。」と思ったが、この演劇クラブの出し物は大きな行事のような気がして、休み時間など考えてはられない気分だった。(中略)/いよいよ当日。用意しているとおめんがこわれた。あれがない、これがないとあわてた。でも、直す道具も持っていた。私は照明の位置について。スタート。じっと見ていると、練習より表情が出ていてびっくりした。上から見ているとよくわかる。何度も見たはずの劇なのに、感動してしまった。今までの児童集会でいちばんよかった。自分達のだったからかもしれない。でも、精いっぱいやったからだと思う。」

※ 上記の作文はクラブ長をフォローした6年生の作文である。この演劇クラブも伝統的

に継続しているとはいえいろいろな面で紆余曲折したクラブでもある。そういうクラブ長は3年間継続して入っていた子になった。おとなしく、ふだんは目立たない子どもなのに、作文のようなよきフォロアーがいたおかげでリーダーとして十分活躍できた。

4年生を中心にし、自分達はうら方にまわって努力した。その結果リーダーとしての役目を十分果たせた例である。かげで指導助言していた先生の努力も当然見逃せない。しかし、このように、児童自らがやる気を出して、取り組んだ時にはどの子も満足した結果になることがわかる。

〔その3〕 昔遊びクラブのS君（2学期のクラブの反省から）

「1学期よりも慣れてきたのかふざける人が多かった。でも、男女の区別なくグループでやれるようになった。長馬はいっしょにできなかったけど、お手玉、ビー玉、竹馬、竹ジャッキはいっしょにやれた。昔は男女別々の遊びだったのもあるかもしれない。2学期からはたたみの部屋でできたので、坐ってやる遊びが自由にできた。ぼくは勝手なところがあるので、ふだんの遊びは自分のいい分がほとんど通ってしまう。でも、クラブでは4年生もいるので、そうもいかない。何かを決める時でも、何も発言してくれなくて困った。それなのに活発な4年生に助けられている。3学期には計画の確認をしっかりさせていきたい。」

※ このクラブは、発足して4年である。設置上工夫したクラブである。運動クラブ志向が多い中で場所なども工夫できるとして教師側で作ったものである。構成人数が年によってかなりちがう。せっかくリーダーに慣れてきたのに継続しない。集団遊びのへたな子どもは技能さえ身につけばよしとし、別のクラブへ行った。おのずと他のクラブへと移ってしまう。リーダーとなるべく6年生が少なく困った時もあった。S君のように、ただ目立つことが好きで、生活にもむらがあり、おのずと問題も出てくる。しかし、学級や代表委員会の経験も豊富でそれを応用してなんとかリーダーをつとめている。

〔その4〕 将棋クラブのT君（クラブ長になったの感想から）

「ぼくは1学期にクラブ長になった時、自分から立候補したからでなく、すいせんされたからです。初めは、やりたくなかったし、やり方もわかりませんでした。やっているうちに慣れてきたのでよかったです。2学期はみんなもはじめと終わりのあいさつの時も静かにしてくれます。将棋の他にトランプや百人一首もやりますが、先生が教えてくれるので苦勞しませんでした。」

※ このT君は、学級ではリーダー性を持った行動のみられない子である。むしろ、目立たず、学級会での発言も少ない方である。しかし、希望によって集まったメンバーから、

どうしてもクラブ長にならざるを得ない場合もある。そんな時でも、クラブ長会でやることを教えてもらったり、計画を立てていくうちに、運営のしかたがわかっていったようだ。

〔その5〕 バスケットクラブのT君（クラブ長としての感想）

「バスケットのクラブ長をやっていて一番気をつけることは、一時間のやることを忘れないようにし、順番にやるようにしていることです。準備運動から始まって、あと片付けまでです。もう今は慣れてきました。1, 2学期には先生にとってもほめられてうれしかったです。それに、担任の先生までぼくの活躍ぶりをほめてくれました。どこで知ったのかと驚きました。もう一つうれしかったのは、2学期になってみんながシュートの練習の時に必ず声を出してくれます。時々、シュートが決まるとすぐほめてくれる声が聞こえてきます。本当にクラブ長になってよかったと思います。

※ T君は学習態度もよく成績も優秀である。しかし、行動をおこすと行き過ぎたり、人あたりが厳しかったり、小さいことにもこだわり過ぎるせいか学級では、リーダーに立候補してもなかなか推せんしてもらえなかった。

クラブで認められ、生き生きと活躍するうちに、自分本位な考え方を直そうと意識できるようになったようだ。時々、クラブ担当教師からも担任へT君ががんばっている旨を話してくれていた。

このように、思わぬところで認められたことがきっかけで自信へとつながっていく。リーダーを育てるということは、クラブにおいても学級担任と何らかの関わりを多く持つ程効果も大きいと思われる。

2 存在の薄かったクラブリーダー（教師の観察から）

「あなたの学校にクラブ活動の計画や評価がありますか。」とたずねると、「計画？別に作っていないけれど子供達は毎時間楽しく活動している。」あるいは、「評価はやっているけれど、計画の方はなくともやれている。」という答が返ってくる。特活の研究会に、出席しても、クラブ活動の分科会は、参加者も少なく低調である。何の計画がなくとも、毎時間が流れているようだ。ましてやリーダーの存在すら考慮されずにいる。

次の二つのこともよく見かける事例ではないだろうか。

〔その1〕 ある手芸クラブの例

あいさつ、出席と終り、各自の製作に入る。わからないところは仲良しの友達にこっそりと聞いたり、本を見て間に合わせる。「ここどうするの」「うまいでしょう。」の会話すらないまま終ることもあるという。それでも運営に支障がない。例え、リーダー性

をとれず、司会もやれなくとも、担当教師が肩がわりをする。いわゆる教師主導型になってしまう。しかし、技能も身につくこともあってか問題ともならない。

〔その2〕 あるバスケットクラブの例

同じバスケットクラブでも前記のような場合と異なり、リーダーの存在の薄かった例である。バスケット型の運動は4年生から授業をするし、教材としても好まれる一つである。しかし、かなり技能差が出る。そのような状態で入部してくる。そのために同学年毎のグループを作り、技能優先の形でクラブをやってしまう。得意な児童は喜ぶが、未熟な子はぼんやりと過ごしてしまうことがある、しかも、クラブを担当する先生が技能に堪能だったりすると、技能優先の教え込みになってしまう傾向がある。そうになると、継続して入部しても先生をたよってしまい、リーダーとしての意識が育ってこないのである。当然、クラブ長はいても形式的存在になってしまう。

3. 考察 — 1, 2の実態から考えられること —

クラブリーダーに求められるものはいったいどんなことなのだろうか。児童活動の中でもクラブ活動は、児童自らの手で運営できるという特質を持っている。また、教師側はその特質を生かすチャンスでもある。代表委員会・各種委員会、学級会にしる自発的、自治的活動といえど限界がある。しかし、クラブは児童がのびのびとユニークな活動ができる場である。

そこで、よく見直し、集団活動を民主的に運営できるリーダーの育成にあたりたい。上記の実践例から、配慮したいものをまとめてみたい。

(1) 校内体制が確立していること

☆時間確保について

「学芸会の前で忙しいからカット。」という声を聞く。その時、特活主任が困ると言うのはおかしい。教務の立場で他の教科と同様に考えている体制を重視してきた。

☆担当教師の人数について

小規模校程問題になる。担当者がどうしてもひとりの場合が出る。その時は、年度当初から連携クラブを作っておく。当然、補教体制もそれを利用できるのである。

☆異学年との交流について

クラブ以外でも異学年との交流の場が欲しい。たてわり遊び等を年間計画に位置づける等工夫してみた。はじめは形式的だったが、だんだんと、上も下もスムーズに遊べるようになった。その中で、高学年はより一層リーダー性を発揮してきた。

(2) リーダー育成のための具体的手だてがあること

☆全体計画を立てる

指導計画には、クラブ活動全体の計画が含まれる。学期別の大まかなわく組が必要

である。できれば常に目につくところに掲示しておきたいものである。

☆クラブ長会議を設ける

入部指導から実施計画までスムーズにできたところで、リーダーがうまく運営できていないことが多かった。そこで、クラブ長会議を開き、次のようなことを話し合わせた。

- ◎年間、毎時間の年間計画の立て方
- ◎クラブ長の役割(仕事)
- ◎クラブ長としての反省(悩み)
- ◎予算

このクラブ長会を通して、クラブ長としての責任と自覚を持たせ、自分たちの手で運営できるようにさせた。細かい事では、一時間の流れ(・あいさつ・出欠・今日の予定と準備・作業・行動・後片づけ・反省・先生の話・次回の子定・さようなら)等も指導した。部長がだんだんと慣れ、不安もなくなったことが児童の作文の中からもうかがえた。

(3) その他の配慮事項

☆継続活動が望ましい

毎年の活動内容が活かされることにすることは当然である。それよりもっと望ましいのは、児童の何人かずつが継続入部していることである。しかし、校内事情もあったり、また、発達段階からも他へ興味が傾いたりするために理想的にはならない。それでも、できる限り継続させたいものである。それはリーダーへの自信へとつながっていることが児童の作文等からも十分うかがえたからである。

☆学級担任との連携をはかる

学級、学年経営の中で高学年特に6年生のどの児童も責任感をもってリーダー性を発揮できるよう指導することの大切さは冒頭にも述べた。その中で、どの子が、どんな場で、どんな活躍をしているのかを担当が十分把握することが大切である。

どの子の作文の中にもクラブの先生からの賞賛はもちろんうれしいことであるが、担任がそれを知っていることは何よりもうれしく、満足できるものようだ。実際には高学年の経営によるだろうが、全職員の共通理解がもっと影響すると思う。併せて、日頃から担任は、クラス以外での活躍を把握できる手だての工夫も必要と思われる。

以上、実践を中心に「リーダー」について述べてきた。一見活発そうにみえても、教師の掌の中でのことのようにも思える。また、意欲的活動をみて、指導助言のよさに満足してはられないことは当然である。しかし、校内が一致してリーダーの育成に力を注ぎ、校内全体が生き生きしている時には、生活指導上の問題点が少なくなるというのも事実のようだ。

IV 評価

1. ねらい

- (1) 目標に対する達成度を明確にするため
- (2) 活動状況を客観的に把握し、計画を改善していく指針を得るため
- (3) 運営上の問題点や、指導すべき重点を的確にとらえ、必要な処置をするため

上記のねらいをもとに、クラブ活動における評価を考え実施していくならば、年間を通して、しかもできるだけきめ細かく行うことが大切である。

2. 観点

学校側・指導に当たる教師と、活動の主体となる児童側との両方の側面から考えていく必要がある。いずれにしても、評価に必要な観点が準備され、その上で実施され生かされている学校では、児童の期待感や成就感が増し、クラブ活動そのものや児童の変容も大きいと言えよう。

(1) 指導計画についての観点

- 学校の実状に合った計画がたてられているか
- クラブの設置条件がクラブの特質に沿っているか
- 指導者数・指導体制に不備はなかったか
- 特質を生かした集団を編成することができたか
- 活動時間を十分に確保することができたか
- 指導計画を実施計画に生かすことができたか
- 他の諸活動との関連を図ることができたか
- 活動の成果を発表できる機会を設けることができたか
- 活動の場所や用具の数量が適当であったか
- 児童の希望や意見を取り入れ、尊重することができたか

(2) 指導方法や内容についての観点

- 児童にとって、適切な入部指導を行うことができたか
- 所属の決定では、児童の意思を十分に尊重することができたか
- 児童の力で実施計画をたてるよう指導できたか
- 技術面の指導に片寄らないよう助言できたか
- リーダーを中心とした協力体制がとれるよう指導できたか
- 望ましい人間関係が育つよう指導できたか
- 児童の希望や意見を吸い上げる手立てを取ることができたか
- 児童が、すすんで個人カードや活動記録簿に記入するようはたらきかけることができたか
- 安全の確保・事故の防止に細心の注意を払うことができたか

(3) 児童個人についての観点

- 自発的に参加し、興味関心の追求に熱中しているか
- 個人のめあてをもち、計画的に活動しているか
- 友達の長所を取り入れ、自分のものにしていこうとしているか
- 困難があっても、くじけることなく前向きに活動しているか
- 自分に与えられた役割を責任を持って果たそうとしているか
- 他の成員と協力して活動しようとする態度が見られるか
- 自分の考えを積極的に発表しているか

(4) 集団についての観点

- 和やかなふん囲気の中で活動されているか
- 成員は、所属感を感じながら活動しているか
- 互いに認め合い、協力し合おうとしているか
- 選ばれたリーダーが尊重され、リーダーを中心とした活動がなされているか

※ 以上の観点は、どの学校にも共通するものと思われる。これらの他に、学校の実情・児童の実態・文化的なクラブの特性・運動的なクラブの特性・地域の教育力などに応じた観点を設定していくことによって、より確かな、より役立つ評価に結びつくものと思われる。

3. 方法

評価の方法は多種多様であり、それぞれが有力であるといえる。しかし、いくら有力ではあっても、すべての方法や数多くの方法によって実施することは、指導者にとっても児童にとっても負担過重となるので注意しなければならない。例えば、ひとつの方法によって数年間、継続的に児童の変容を追いながら確かめていくやり方もあるだろう。あるいは毎年のように評価の方法を変えることによって、クラブ活動を見つめる側面を増やし、評価慣れによる弊害を防ぐやり方もあるだろう。いずれにしても大切なことは、公平な目で慎重に見つめ、正しい情報によって判断するということである。

以下に、いくつかの方法を挙げておく。

(1) 記録による方法

クラブ毎の「活動記録ノート」や個々の児童による「個人カード」がまず挙げられる。いずれも多く多くの学校で行われていると思われるが、感想・意見欄や、反省・自由記入欄に記入されている内容は、われわれに大きな示唆を与えてくれ、改善への手がかりを与えてくれる場合が多いものである。この他に、「チームノート」や「グループノート」による小集団毎の記録を活用する方法、リーダーの抱えている悩みや問題点を探り、適切な助言を加えることによってリーダーを育てるための「キャプテンノート」を活用する方法なども有効である。個人カードへの記入も、毎時間終了直前に行うことが望ましいであろうが、時間的に負担が大きい時には学期毎でも十分に情報が得られる。

(2) 観察による方法

指導者が「記録ノート」や「観察カード」を準備し、随時、随所で観察結果を具体的に記入したり、チェックリセットを用いてチェックしていく方法である。

チェック項目の一例を挙げておく。

- 自らすすんで話合いに参加しているか
- みんなといっしょに仲よく活動しているか
- 自分の責任を果たそうとする意欲が見られるか

(3) 調査による方法

意識調査や実態調査による方法である。記入方式より選択による方式の方が、集計が容易にでき、傾向や問題点が明確になるのを、よく実施されていると思われる。

4. 個人カード(自己評価)の例 — 学期末に記入する方法 —

クラブ 場所		1 学 期			クラブ名	年 組・名前	
先生	クラブ長	よく でき た	だ い た い で き た	が ん ば ら う	おもな活動内容	感想・反省	
副クラブ長	書記				一 学 期		
自分でよく反省しよう					二 学 期		
①友だちといっしょに計画がたてられた。					三 学 期		
②計画し、決められたことを進んで実行できた。							
③友だちと、力を合わせて楽しく活動できた。						○ △ ×	
④クラブの用具を忘れずに用意することができた。						・楽しく活動できましたか — — —	
感想・意見	一					・自分の考えが言えましたか — — —	
	学 期	先生より				・友だちがふえましたか — — —	
	二					・責任をはたしましたか — — —	
						・(クラブ毎に決める) — — —	
						※ ○—よくできた △—だいたいできた ×—もう少し	

※各項目毎に3学期分の線を引いておく

5. 評価を生かすために

計画→実践→評価→計画 この繰り返しが、一般的な教育活動であり、クラブ活動においても決して例外ではない。したがって、どの観点であっても、どのような方法による評価であっても、計画の改善に役立つものでなければならない。評価によって明らかにされた問題点には、素早く対応策を用意し、改善されたという事実を積み重ねていくことによって、評価そのものに対する指導者や児童の意識が高まり、ますますその重要性が増すはずである。評価のための評価に終わることだけは避けなければならない。

V クラブ活動の実態調査から

クラブ活動の実態調査のねらいは、都内の小学校で行われているクラブ活動の現状を把握し、クラブ活動を通して児童の健全な自主性・豊かな社会性の育成、個性の伸長を図るためのものである。そのため具体的な調査をし、クラブ活動の指導上の問題点をとらえ、地道に取り組んでいかねばならない。

1. クラブ実施上の問題点

1つのクラブでなく学校全体からみてクラブ活動上問題があるか、クラブ指導者の立場から述べてもらったのがつぎの表である。

・調査年月 昭和59年 6月 調査学校 東京都内25校, S区27校

どんな問題があるか(自由記入方法)	5	10 (校数)
指導者の不足(担当希望の片寄り)	S区 10校, 都 8校	
校庭がせまい(施設・設備)	S区 8校, 都 7校	
児童の人数のアンバランス(男女比)	S区 5校, 都 4校	
運動クラブに集中(児童の希望の片寄り)	S区 5校, 都 4校	
児童減・学級減によるクラブ減	S区 3校, 都 2校	
教師指導型になる	S区 2校, 都 1校	
予算不足, 児童に負担がかかりすぎる	S区 2校, 都 1校	
実施回数が少ない	S区 2校, 都 1校	
児童の能力差が大きい	S区 2校, 都 1校	
その他	S区 2校, 都 1校	

「その他」には、集団の中で一人ひとりの個性の伸長がむずかしい。週1回では協力関係がむずかしいがあった。

担当者決定の際に、担当者の技能の面を考慮しているか。専科教師のクラブ担当と専科との関連。1つのクラブの担当数への配慮。クラブの成立条件(人数の上・下限, 男女比)校外の活動を認めるか。個人負担と学校負担の区別については、2で述べる。

(1) クラブ実施時間 (クラブの単位あたりの時間)

時間(分)	45	60	45~60	45~90	95
校数	12	8	4	1	1

単位時間が45分を越える学校の中には、5, 6, 校時を当てているところがあった。

(2) クラブの年間回数

年間回数	18	20	21	23	24	25	26	28	30	31	33	35
校数	1	2	1	2	2	2	5	1	5	2	1	2

平均 = 26.8回

回数は単位時間の長・短と関連があることが認められ、60分, 90分の単位時間をとっている学校は実施回数が少なかった。単位時間95分の学校は年間回数18回と少ない。年間回数が少ないと、クラブ員同士の交流がそれだけ少なくなるので好ましくない。

(3) 45分に調整したクラブの年間回数

年間回数	20	23	24	25	27	28	30	31	32	33	34	35	37	38	40	41	47	52
校数	1	2	1	1	1	1	4	1	1	1	1	1	5	1	1	1	1	1

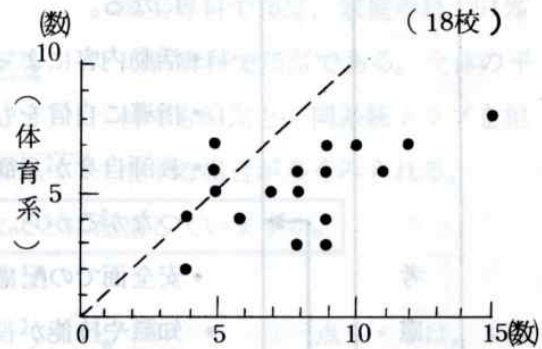
実施時間×回数÷45＝調整年間回数

45分～60分に、45～90分は90分として計算をした。

調整した年間実施回数が35回に達しない学校が15校、35回以上は11校であった。年間実施回数が35回に達しない学校は、回数を増やすよう努力しなければならない。

(4) クラブ数と体育系・文化系クラブの比

右図のように体系クラブ数が文化系クラブ数と同数か、より多い学校が4校あり、文化系クラブが多い学校が14校であった。



体育系クラブに児童の希望が集中する傾向が見られるので、狭い場所で出来る種目を取りあげたり、文化系クラブに興味を持たせるようにクラブ内容を充実させ、クラブ紹介にも力を入れなければならない。

2. 小規模校におけるクラブ(例)

(M区T校)

構成	4, 5, 6年の児童全員(53名)
時程と種目	月曜 6校時 体育系クラブ(バスケット, バドミントン, サッカー, テニボン, 卓球) 金曜 5校時 文化系クラブ(音楽, 美術, 工作, 手芸, 囲碁・将棋)
特色	児童全員が体育系クラブ, 文化系クラブに所属する。 実施回数 週2回 年間50回
担当者	体育系クラブか文化系クラブの一方を担当する。もう一方を副担当とし、担当者不在のとき補教にあたる。
2本立ての背景	児童数が少なくなるとクラブ数も少なくなる。クラブ数を増やすと体育系クラブのチームが成り立たなくなることがある。2本立てにすれば、ある程度クラブの種類がそろい、人数もクラブが成立するだけ確保することができる。児童間の交流の機会が多くなり、学校生活に変化を与えることができる。
問題点	1人が2つのクラブを経験するので利点が多いが、現在のクラブ(体育系5, 文化系4)の種類は5年間変わっていない。強いて言えば、新しいクラブが出来にくい点に問題がさる。

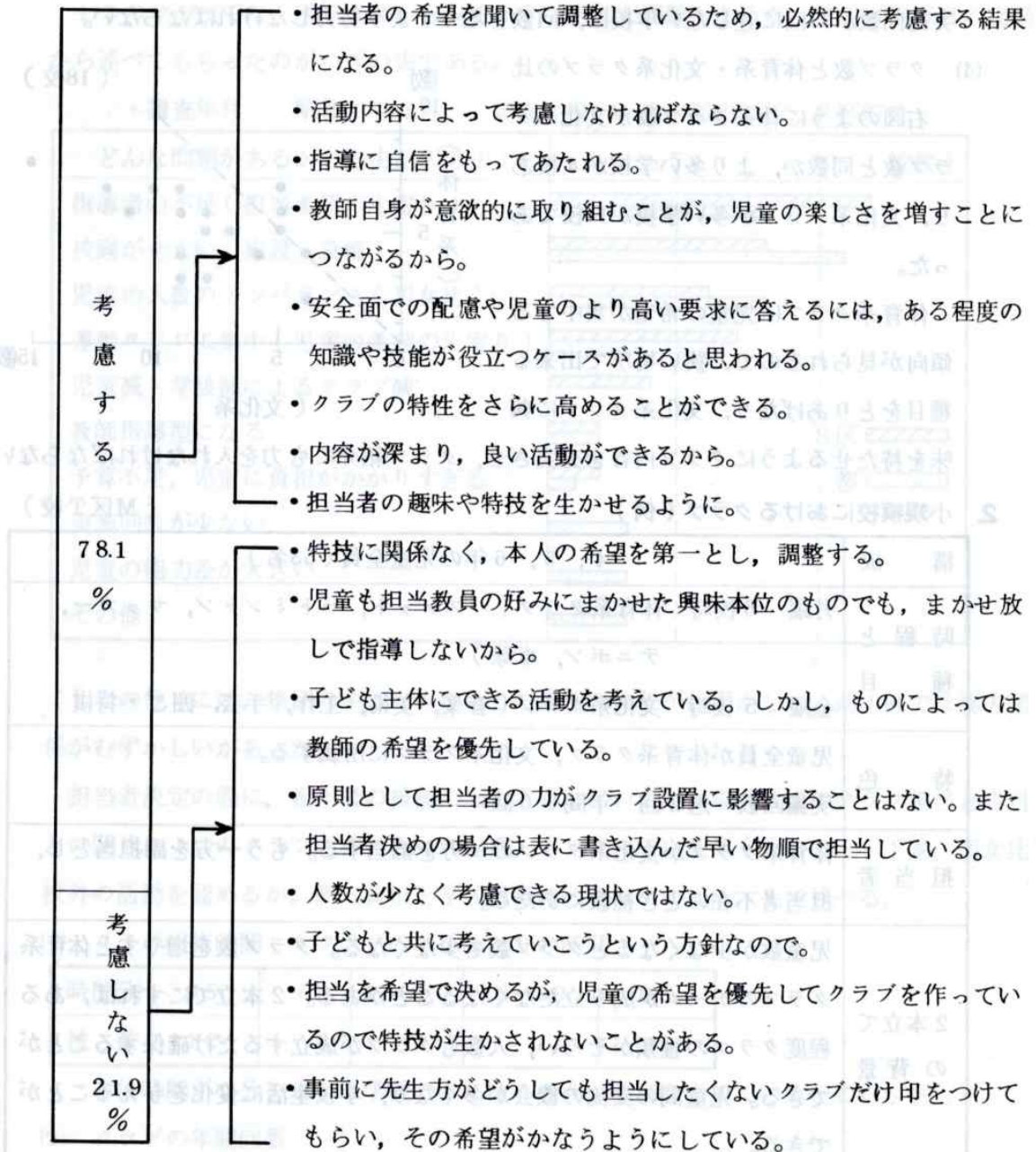
※ 都内でも3番目の小規模校

小規模校では、上記のような方法も今後考慮していく必要がある。

3. 「クラブ活動に関する学校内の共通理解」についての調査から

毎年4月にクラブ活動を編成して一学期指導をしていくにあたり、その特質を生かし、充実した活動ができるように、各校ではどのようにクラブ活動について考え、共通理解を図っているのかを調査してみた。

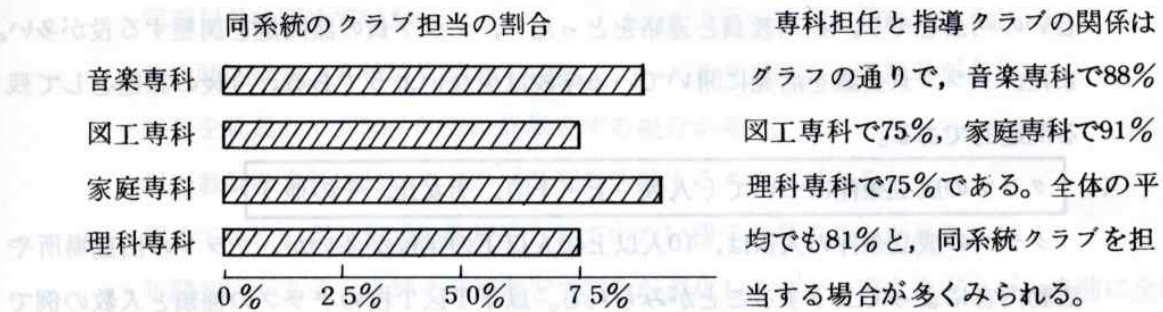
(1) クラブ担当者決定の際に、担当者側の技能の面を考慮しますか。



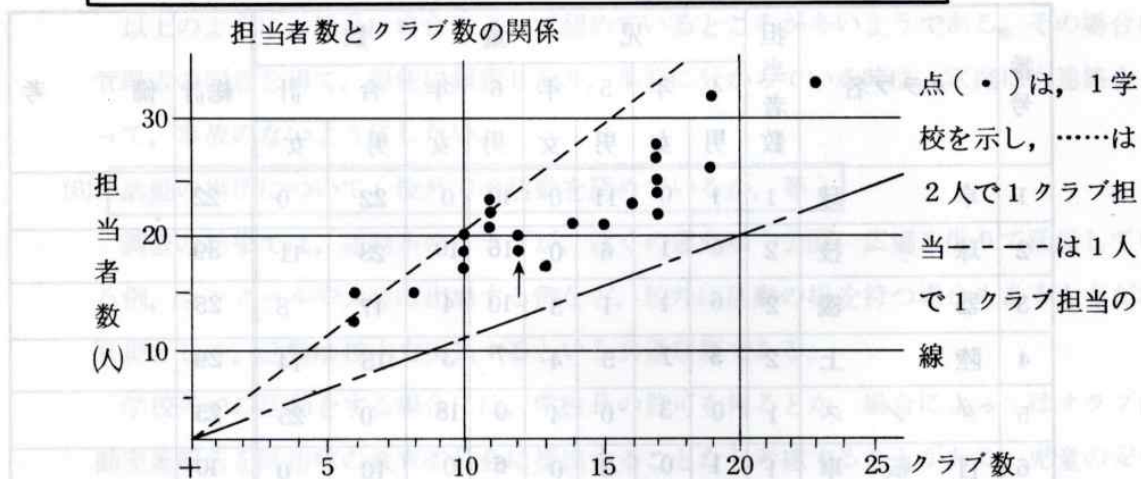
担当者の特技や技能を考慮して各クラブの指導者を決定している学校が多くみられる。その理由として、担当者が指導に自信を持ち意欲的に取り組むことで活動内容を深め、危険防止にもつながり、児童が楽しく活動できるとしている。このことは、次の専科担任の担当クラブ調査の結果とも一致する。考慮しないと答えている学校でも、意図的に技能を考慮していないのではなく、何らかの方法で教師の希望を生かそうとしている。

その中で、教師の所属希望調査を取って所属担当を決めるのではなく、自分として担当できないクラブだけあげて、他は担当し得るものとする考えを持つ学校があった。これは、クラブ担当者を決定するのにやりやすい方法であり、だれでも、どのクラブでも担当する方法へ近づけることになると考える。

専科の先生は、何クラブを担当していますか。



(2) クラブ担当者の人数について、どのようなことに配慮していますか。



クラブ担当者の人数を決めるときには、クラブ所属の児童の人数・活動の場所・活動の内容により、人数を決める学校が多くみられる。

1クラブあたりの担当者の人数を1~2名とする学校が多いが、原則として1名とする学校、2名とする学校と差がみられる。担当者の休暇・出張などでのクラブの補教の問題が、どの学校でもあるように思われる。1つのクラブに1人の担当者として、クラブ数をふやす事が望ましいが、担当者不在の場合の配慮を考えなければならない。

調査校の平均では、1クラブあたり担当者、約1.6人という結果であった。

(3) クラブ長の仕事について決めていることがありますか。

- ・クラブ全体のまとめ役。
- ・話し合いの司会
- ・クラブ員の問題を調整する。
- ・6年生を当て、活動のリーダーとする。
- ・各クラブの構成員の掌握
- ・個人カードに目を通す。
- ・あいさつ出欠席をとる。
- ・クラブ指導者に一任している。
- ・担当教員との連絡にあたる。
- ・クラブ発表会の計画・運営の補助
- ・クラブ担当教師や他のクラブ員の連絡。
- ・発表会などの企画・実践の中心となる。

- ・クラブ長会議に出席（情報交換・活動場所との調整）
- ・司会をしながら全員が話し合いに参加できるように配慮。
- ・グループ長との連絡を密にし、全体の活動の様子を正しく把握する。
- ・クラブの運営について、自主的というまでは、っていない。

クラブ長の仕事の内容については、上記調査の通り、あいさつや出欠席をとり、話し合いの司会をやり、担当教員と連絡をとったり、クラブ員の諸問題を調整する役が多い。また、クラブ長会議を活発に開いている学校は少ないようである。今後の課題として残る問題である。

(4) クラブの成立条件について（人数 上・下限，男女比，その他）

クラブの成立条件の人数は、10人以上40人以下の学校が多いが、クラブの活動場所や活動内容によって上下することがみられる。以下T区T校のクラブの種類と人数の例である。

番号	クラブ名	担当者数	児童数								総計	備考
			4年		5年		6年		合計			
			男	女	男	女	男	女	男	女		
1	卓球	1	1	0	11	0	10	0	22	0	22	
2	球技	2	6	1	6	0	16	10	28	11	39	
3	器機	2	6	1	1	3	10	4	17	8	25	
4	陸上	2	3	7	5	4	7	3	15	14	29	
5	ダンス	1	0	3	0	4	0	18	0	25	25	
6	自転車	1	1	0	3	0	6	0	10	0	10	
7	なわとび	1	4	7	3	5	1	0	8	12	20	
8	料理	2	3	5	2	8	0	10	5	23	28	
9	実験	1	4	0	5	0	2	5	11	5	16	
10	演劇	1	0	0	0	5	0	2	0	7	7	
11	けん玉	1	6	0	7	0	5	0	18	0	18	
12	おもちゃ工作	1	7	0	1	0	5	0	13	0	13	
13	手芸	2	0	22	2	12	0	2	2	36	38	
14	器楽	1	0	3	0	0	0	7	0	10	10	
15	地図・鉄道	2	10	0	4	0	11	0	25	0	25	統合
16	美術	1	0	4	5	9	0	2	5	15	20	改名
17	歴史	1	3	0	4	0	2	1	9	1	10	
18	ゲーム	2	7	1	12	0	15	0	34	1	35	改名
19	紙しばい	1	4	5	0	1	0	2	4	8	12	新設

この表からわかる通り、男女比にかたよりのあるクラブが19クラブ中11クラブある。

また、学年にかたよりのあるクラブが、9クラブあり、クラブ参加人数402名中265名(66%)の児童が問題のあるクラブに参加していることになる。こうした問題は、クラブ活動の成立条件としてだけで考えるのでは解決できない。日常の様々な教育活動の場で、異学年同士の交流、男女の協力を得るように共通理解したい。

(5) **活動の時間について(通常以外の時間の活動を認めるか)**

- 定期以外は認めていない。
- 15分の延長を認めている。
- 5校時のほか、6校時も認めている。
- クラブによって延長がある。
- 45分を延長して、50～60分の活動をする場合が多い。
- 担当教師の責任においてクラブ時間外活動するクラブがある。
- 認めていないが、年間に数度守られていない様子を見ることがある。
- 年間何回かある(卓球クラブなどで試合が消化しきれない場合など)が、事前に全職員に知らせてやっている。

以上のように、延長は場合によって認めているところが多いようである。その場合は、管理者の同意を得て、担任に報告したり、事前に分かっている時は、家庭にも連絡をとって、事故のないようにしたい。

(6) **活動の場所について(校外での活動を認めているか、等)**

調査の結果では、運動系のクラブが、近くの運動場や公園、広場を借りて活動している例、コンクールや大会に出場する例など、校外に活動の場を持つ場合もあるようだが原則として、活動は校内で実施するという共通理解である。

学校外での活動をする場合には、学校長の許可を得るとか、場合によってはクラブ活動実施報告を区市町の教育委員会に提出することなど考慮することがある。児童の安全のために万全を期したいものである。

(7) **活動経費について(個人負担と学校負担の区別)**

- クラブ担当の判断にまかせている。
- できる限り公費負担
- 工作クラブは学校の工作用紙を使用。マンガクラブは学校の更紙を使用。個人と学校負担の区別がはっきりしていない。
- 個人として作成し、持ち帰る分は、個人負担。
- 個人消耗品(料理クラブ、模型クラブ、美術クラブで自分で持ち込んだ材料)の費用以外は、校内予算で運営する。
- 家庭科クラブの調理等で(一回100円前後)かかる費用は個人負担。
- 明らかに個人に還元される分については個人負担。(例、料理クラブの調味料以外の材料費。おもちゃ工作クラブのたこ製の材料費、手芸クラブの綿、布代、等)

活動経費については、個人負担と学校負担の区別を、具体的に共通理解して、できるだけ学校予算で運営できるようにし、個人負担が多くならないようにしたい。

Ⅵ 研究の反省と今後の課題

1. 研究の反省

昨年度の研究テーマ「クラブ活動の特質を高める集団活動のあり方」を「クラブ活動の特質を生かす指導のあり方」にかえ、研究のポイントを教師の指導のあり方にしぼって研究をすすめてきた。クラブ活動の特質が①学年のわくをはずした集団活動、②同好の児童の集団活動、③共通の興味・関心を追求する集団活動、④計画や運営を児童自身とする集団活動であることから、これを指導計画と実施計画、リーダー、評価および問題点を解決するための実態調査の面から指導のあり方を研究してきたが、研究不足の面がみられた。

(1) 指導計画と実施計画

指導計画は、その学校のクラブ活動指導の基本になるものである。しかし、学校によっては、細切れ式にいくつかの項目をあげている学校がみられる。それでは、継続したクラブ活動や伝統的クラブ活動、内容の充実したクラブ活動になりにくい。これらを解決するために、しっかりした指導計画が必要になる。クラブ活動の実態にそくした指導計画や実施計画の研究を今後とも続けていく必要がある。

(2) リーダーについて

リーダーは、クラブ活動のみが必要とするものでない。学校教育の多くの面でリーダーがいた方がよい場合がある。教科のグループ活動や特別活動の学級会、係活動、委員会活動等からもリーダーの育成に力を入れていかねば、クラブ活動の円滑な運営に無理が生じてくる。クラブ活動のリーダーの育成とともに、他との関連を深めていきたい。

(3) 評価

通知表や指導要録に記入するためだけの評価であってはならない。児童の自主性・社会性を育てたり、個性の伸長につながるようにより研究を深めていく必要がある。

(4) 実態調査

クラブ指導について、種々の問題点をあげ自由記入の方法から追求することよりも、項目をあげて聞く方法がより実態に合う場合もあるという声もあった。今後検討したい。

2. 今後の課題

児童の教育が教科一辺倒になりがちな小学校で、人間性をより育てるためには、特別活動の果たす役割は大きい。その特別活動の中でもクラブ活動は、個性の伸長にかかわる面が大きい。そのために研究部員は、心構えを新たにしてクラブ活動の研究を通して、クラブ活動の特質を生かす指導に努めていかねばならない。

終わりに、この一年間、研究のために出席くださった先生方、調査研究に協力くださった先生方、クラブ活動の授業をされた先生方、講師の先生方、研究会場を提供してくださった校長先生はじめ各先生方に厚く感謝いたします。

Ⅳ 学 級 指 導

テーマ 「実践力を育てる学級指導の授業の在り方」

－ 指導過程と資料・終末段階の工夫 －

I まえがき	81
1. 研究主題について	81
2. 研究への取り組み	81
II 指導過程	82
1. 学級指導の基盤（他の教科や領域との関連）.....	82
2. 指導課程の基本型以外の具体例	82
3. 終末段階の工夫	83
III 授業研究とその考察	84
1. 「男女の特性」（5年）	84
2. 「友達関係をみなおそう」（6年）	88
3. 「あいさつ」（1年）	92
IV 実践意欲を高める資料	96
事例1. 「言われた言葉」（3年）	96
事例2. 「わすれもの」（2年）	96
事例3. 「忘れものよいじ」（1年）	97
事例4. 「みんなで仲よく遊ぼう」（2年）	97
事例5. 「卒業を目ざして」（6年）	98
事例6. 「卒業までの目あての確かめをしょう」（6年）.....	98
事例7. 「3学期だ、がんばるぞ!」（3年）	99
事例8. 「広がる読書」（6年）	99
事例9. 「相手の立場や気持ちを考えて生活しよう」（5年）	100
事例10. 「クラスのためになる活動をしょう」（3年）	100
事例11. 「楽しい学校生活」（5年）	101
事例12. 「すききらいをなくそう」（2年）.....	101
V 研究の反省と今後の課題	102

○ 研究の経過

- 59. 5. 31 (木) 定期総会, 部会, 組織づくり
- 59. 6. 28 (木) 情報交換, 研究への迫り方, テーマの確認
- 59. 9. 3 (月) 研究授業の授業案検討
- 59. 9. 25 (火) 研究授業 武蔵野市立武蔵野第四小学校 5年 高松学級
- 59. 10. 26 (金) 研究授業 千代田区立西神田小学校 6年 飯田学級
- 59. 11. 9 (金) 研究授業 中央区立月島第一小学校 1年 篠原学級
- 59. 11. 15 (木) 研究集録の内容検討, 執筆者の決定
- 60. 1. 18 (金) 執筆原稿内容の検討, 発表者決定, 役割決定
- 60. 1. 24 (木) 執筆原稿内容の再検討
- 60. 2. 19 (火) 研究発表の準備, 発表内容の検討
- 60. 2. 28 (木) 研究発表会

研究・執筆者名簿

部長	米本 滋雄	葛 飾・梅 田小	(記録)	篠崎たか子	荒 川・赤 土小
副部長	鈴木 和子	港 ・白 金小		大木 光子	板 橋・北前野小
"(発表)	橋本 肇	豊 島・目 白小	(記録)	高山 厚子	板 橋・志村五小
"(発表)	高松 和彦	武蔵野・武蔵野三小	前部長	安岡 正凱	練 馬・泉 新小
副部長	森山 裕夫	三 鷹・三鷹三小		薮 次雄	足 立・柳 原小
"(司会)	重松 誠	港 ・御 田小		森平 孝	葛 飾・梅 田小
	吉仲ミチ子	千代田・九 段小		赤岡 幸子	葛 飾・東柴又小
	飯田 良一	千代田・西神田小		鈴木 恭子	江戸川・上小岩二小
(発表)	篠原 昌子	中 央・月島一小		新田 寿子	江戸川・新 田小
	冨田 嘉子	新 宿・東戸山小		志田原節子	八王子・横山一小
	池田 令子	文 京・磔 川小		小松とし子	武蔵野・井之頭小
	小笠原潤子	文京・関口台町小		多田 斉子	調 布・染 地小
	嵯峨 悦子	墨 田・錦 糸小		八巻 八郎	町 田・つくし野小
	藤田 新二	墨 田・中 川小		青 正上	町 田・本町田東小
	呉宮 進	江 東・数 矢小		坪井ヤエ子	小金井・緑 小
	香田 礼子	江 東・水 神小	(司会)	田中 尚子	小 平・小平一小
	藤本 仁	大田・入新井一小		井上 芳子	小 平・小平十一小
	二田 孝	世田谷・代 田小		鬼塚 啓子	東村山・東萩山小
	石川 みち	中 野・東中野小		池田 政次	東大和・東大和二小
	飯田 公一	北・滝野川三小		加藤 明	多 摩・南落合小
	剣菱美智子	北・滝野川一小		岡本 恵子	稲 城・稲城八小

I まえがき

1. 研究主題について

学校生活を楽しく過ごすために個人としてなさなければならないことや、集団の一員として好ましい人間関係を培う行動様式を身につけさせていくことは、日常の学習活動や学級生活を充実させていく上に是非とも必要である。

学級指導は、児童が問題解決の具体的方法をつかみ、学習後直ちに実践していこうという意欲をもたせるところに大きな特色があり、豊かな人間性の育成に深いかわりをもっている。私たちは、学級指導が児童の人間形成上大きな役割を果たすことに着目したとき、適切な主題を精選した上で、授業を充実したものにしていけることが何より重要であると考えた。

そこで、昭和56年度までの研究（学級指導の本質の解明、実践に結びつく指導計画の在り方、好ましい人間関係を育てる適用に関する指導の在り方）を土台として、「実践力を育てる授業の在り方」を主題とし、具体的には、よりよい指導過程の在り方と資料の活用のし方を3年間研究してきた。

初年度（57年）は、導入段階に焦点をしばって研究し、三つの授業を行い検証した。その結果、授業が成功するか否かは、極端に言えば導入が決め手であることがわかった。また、スライドやビデオなど視覚に訴える資料が特に効果的であることがつかめた。

二年次は、展開段階に重点を置いて授業を三回行い、授業の深め方を検討した。原因や理由を考えさせ問題解決を凶らせるには、作文やグラフ、劇化が効果的であった。また、方法や対処の仕方を考えさせる段階では、指導事項を教師自身が明確にしておく必要があることがわかった。この点が学級会活動と大きく異なるところである。さらに、教師のなまの体験を語りかけることは、子どもの心に深く浸透していくこともわかった。

「実践力を育てる」には、導入・展開を充実した上で、授業のしめくくりの部分である終末段階を工夫し、最大の盛り上がりを持たせることが必要である。しかし、実際に授業を展開すると、往々にして授業が長びき、終末段階が短縮されたり省略されてしまうことすらある。そこで本年度は、三年計画の仕上げの年として、特に指導過程を吟味し、終末段階が大事にされる時間配分を考え、指導過程を組み立てることをねらった。そして、有効な資料の活用こそ実践に結びつく鍵であると考え、研究をすすめることにした。

2. 研究のねらいと方法

- 指導過程の各段階の重要性を認識し、資料の効果的活用を考える。
- 指導過程について、基本型以外のものについても考える。
- 終末段階の工夫に視点を当て、研究授業を三回行い、検証していく。
- 終末段階の工夫について事例を持ちより、研究の幅を広げる。
- 区、市、お互い同士情報を交換し合い、自己の実践に役立てる。

II 指導過程

(1) 学級指導の基盤

学級指導は、特別活動のねらいである「調和のとれた心身と個性伸長」「集団の一員としての自覚と協力」「自主的実践的態度」の育成に向かって教師が意図的計画的に指導するものである。学級集団の中に現在生じている問題や将来起こりそうな問題の解決と、学級集団の一層の向上をめざして指導計画が作成される。授業展開に当たっては、ねらいの達成に向けて、児童の実態をふまえて指導内容を精選し、指導過程を工夫することはいうまでもない。1単位時間もしくは $\frac{1}{2}$ 単位時間の授業を通して、学級指導の特質である児童の実践活動に直ちに結びつけるのがポイントであるが、その指導の成否は日常の学級経営が大きく影響する。教師と児童、児童相互の人間関係がうまくいっている集団では、本音が出され問題点が具体的に明らかになされた上で実態に即した解決法の発見から実践化へと進むことが出来る。逆の場合には、学級内の問題の把握や追求が表面的に流れ、従って一人一人に合った実践をふまえた解決法を見出すことが出来ない結果となろう。本年度の授業研究や実践事例を通じた研究でも、すぐれた学級経営の中でこそよい学級指導が行われることが分かった。学級指導の授業は、日常の学級経営が基盤となるといえよう。

(2) 指導過程

① 指導過程の基本型

導入段階	展開段階		終末段階
	前段	後段	
○問題の意識化 ○問題の共通化 ・現在こういう問題がある。 ・将来こういう問題が起こりそうだ。 ○ねらいとする生活現象面の問題を意識させる。 ○問題の存在に気づき焦点化を図る。	○問題の原因や理由の追求や把握 ・なぜだろう。 ・どうしてだろう。 ○問題発生の原因や理由について、一人一人の児童に確認させ理解させる。	○問題の解決、対処の仕方の追求把握 ・では、どうすればよいのであろう。 ○問題解決の方法や問題への対処の仕方を理解させる。 ○具体的な行動の仕方や技術を習得させる。	○実践への意欲化 ・これからこのようにしていこう。 ・がんばって続けよう。

基本となる指導過程を上記の表のように考えた。しかし、すべての主題を基本型によって授業展開をすることは当然無理を生じる。授業の精選、児童の興味関心の持続等いろいろな面からみてねらい達成に最も適した指導過程を工夫することが大切と考える。

② 指導過程の工夫

事例 主題「本のみつけ方」(4年)・ねらい 正しい図書の選び方や扱い方を理解させ、進んで図書館を利用することが出来るようにさせる。

指導段階	展開前後	展開後段			終末段階
問題の焦点化	問題追求	方法の発見	練習	欠点修正	実践化
・図書室で本を借りた時の様子を発表し合う。		・図書室の本のラベルについて知っていることを話し合う。 ・図書の十進分類法の説明を聞き、気づいたことを話し合う。	・グループ毎に指定された本をみつける。 ・どうやって本をみつけたか発表し合う。	・正しい本の扱い方、みつけ方を話し合っ てまとめる。	・本のみつけ方で自分が気を付けることをカードに書く。

展開後段にウェイトをかけた指導過程の事例をあげた。具体的な行動の仕方を十分に理解させ、動作化や反復練習を通して児童が実践できるようにすることをねらったものである。このような主題では、展開前段で本をうまくみつけられない理由を追求させることの意義は少ないように思われる。「男女の協力」「正しい姿勢」等の主題では、展開前段にウェイトをかけ、十分に原因や理由を追求させることが大切と考える。

(3) 終末段階の指導

授業の展開によって次第に高まる意欲を、さらに高揚して実践化へとつなげるのが終末段階のポイントである。自分自身や友達の実践の状況が児童の目に具体的にとらえられるようにする手だてから、児童は意欲を持続し、互いに励まし合う雰囲気の中で喜びをもって実践していくであろう。児童が自分に適した方法を見つけ実践できるような資料の活用を考えたいものである。○印の記入や実態の書きこみ等の資料は、児童がより明らかに実践状況をとらえることが出来、がんばり表やスローガン等の資料は、学級全体のムードを高め、協力し励まし合う中で継続して実践し、児童の身につくものとする。

〈学級指導コーナー〉 年間主題一覧表と年間指導計画 (A区)

市内には、未だ、単に主題名を学年別に年間にわたって配当した「年間主題一覧表」を「年間指導計画」であると、思いちがいをしている学校が少なくありません。

そのような学校は、学級指導の時間的位置づけが不明確であったり、「学級指導」と「学級での指導」の違いが不明確であったりしている場合が多いようです。

学級指導は、児童の実態から教師として指導が必要であると認めたことについて意図的計画的に指導することをねらっているのです。「年間主題一覧表」のように、即事性、即効性をどのように期待しようとしているかが見えてこないのでは困ります。そこに、①ねらい ②内容 ③資料 ④指導時期と指導時数 ⑤指導上の留意点 ⑥他領域、特別活動相互との関連、⑦評価の観点などが含まれた「年間指導計画」の必要性があるのです。

Ⅲ 授業研究とその考察

事例1

授業者 武蔵野市立第四小学校 高松 和彦

5年（適応） 1単位時間

1. 主 題 男女の特性

2. 主題設定の理由

まとまりのあるクラスを作ろうということについて、編成替えをして5年生に進級した4月の学級会で話し合った。やがて、「ラケットベースボール大会をしよう」との、集会活動を通してという学級経営の方針にもかなった議題が提案された。早速、男女混合のチームが編成され、何回かの練習を経る中で教え合ったり応援し合ったりする体験をふんだ後、大会が実施された。その後「みんなで遊ぶ日を作ろう」という議題でも学級会を開き、学期に数回、中休みを使い担任も交えて屋上で遊ぶことが決められた。遊びのルールにも工夫が加えられ、現在は男女が組になる手つなぎ鬼が行われている。

しかし、日直・清掃等の当番活動やグループ学習時の様子を細かく見ると、男女間に目立った対立はないにしても、互いの分担や協調が円滑にいかない面が見受けられる。これは、男女の特性についての認識不足や自己本位の考え方によるだけではなく、異性としての意識が芽生え始めたことにも起因しているものと考えられる。そこに、こだわりやわだかまりが生じてきたのでは、男女間の協力や好ましい人間関係は育ちにくい。そこで、この期に互いの言い分を出し合い、特性や長所についても考え合って、男女の相互理解を深め仲よく協力していく態度を育てるために本主題を設定した。

3. 本時のねらい

男女がお互いの特性を認め合うことにより、協力して諸活動に取り組む実践的態度を育てる。

4. 展 開

	学 習 活 動
導 入	○男子と女子が仲よくない例を知り、課題意識をもつ。
展 開	○男女間の対立やお互いに嫌だと感じるが生じる原因を考える。 ○男子と女子の特性について互いの考えを知る。
（ 前 段 ）	○男女の特性を認め合い、互いに協力し合っていくことの大切さについて気づく。
展 開 （ 後 段 ）	○性差による身体的特徴をつかみ、異性の心身の変化についても次第に知っていくことの必要性を理解する。 ○学校や学級での生活の、どのような場面で協力し合ったらよいかを具体的にとらえる。
終 末	○男女の仲が比較的よい学級であるという意識をもつ。 ○評価の仕方を理解し実践への意欲をもつ。

学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点 ・ 資 料
1. TPを見て，男女の仲がうまくいっていない場面があることを知る。 ・現時点のものだけでなく，低学年の頃からの問題も発表	○いやな思いをさせられた異性の言動をまとめたTPを提示。 ・具体例をいくつかあげさせる。 ○主題の提示。
2. 異性の言い分を聞きながら，男女が協力できないことについて話し合う。 3. 原因が，男子だから，女子だからという性差にあることを知る。 4. 一般的にとらえられていることを中心に，男女の特性について感じていることを発表する。 ・特性上のよい点・わるい点 ・日常の言動との関連 5. それぞれの家庭における両親の協力や仕事の分担について発表し合う。 6. TPを見て，男女のからだつきの変化や成長の違いについて話し合う。 ・問題解決への意欲をもつ。 7. 教師の小学校時代の説話を聞く。 8. 具体的な場面での男女の協力のしかたについて話し合う。 ・いくつかの例をもとに，協力の場面，内容，方法について具体化 ・互いに頼み合ったり，注意し合ったりできる雰囲気	○細かいことや一過性のことも問題になる理由TPを手がかりに考えさせる。 ○個人に対するものと，全体の傾向に対するものと，対象を明確にする。 ○必要に応じて，アナライザーで集計 ○片親の児童が2名いるので，事前に個別指導をしておく。 ・作文の発表もさせる。 ○子どもと大人の切りぬきの人型のTPから，成長過程にあることをとらえさせる。 ・子どもから大人に向かっていることの確認 ○“机運び”の体験を話す。 ○互いの特性や立場について，思いやる気持ちで考えさせたい。 ・男女とも同じことができるようになることが望ましいが，時に分担し，協力し合う場面も多いことを理解させる。
9. 日常の学級生活のVTRを視聴する。 ・自信と向上意欲 10. 自分のめあてと反省をカードに書く。 ・自己評価，相互評価の方法を知る	○学級を外的な眼で見させる。 ・努力してきた点を賞揚する。 ○学期末の意識調査を予告。 ・TP提示 ○めあてと反省についての個人評価。 ○高めあうための相互評価。 ・“協力の木”を常掲しシールをはること

5. 評価

男女が互いの性差や特性を認め合い、協力して諸活動に取り組んでいるか。

6. 授業考察と使用資料

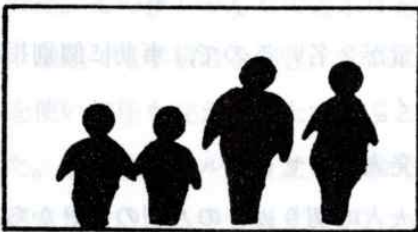
(1) 導入段階

低学年の頃から、男女間でいやな思いをしたことを作文に書かせた中から一部をピックアップしてTPにまとめた。その資料からお互いに仲よく協力し合うという面に欠けていたことに気づかせ、主題を提示、解決すべき問題を把握させることにした。

(2) 展開段階

男女間のトラブルの発生や、協力のできない場面について理由を考えさせる。その原因が男女の性差にある問題をとらえて、互いの特性に目を向けさせる。男子一般・女子一般について感じていることを発表し合い、日常の言動との関連についても追求する。家庭における大人の男女（両親）の協力について知り、現時点では男女の特性について余り考えていなかったことが問題の起こる原因であったことに気づかせる。（前段部分）

個人差はあるにしても大人になる過渡期にあることを認識し、今からよりよい生活習慣を身につけていかなければならないことを知らせる。



では、どのように対処していけばよいのか。具体的な場面や方法を含めた教師の体験談を聞いた後、それらを手がかりにしながら現在の学校生活の中での男女の協力のあり方や方法をとらえさせる。（後段部分）

(3) 終末段階

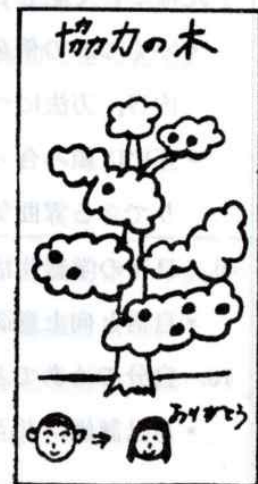
• 自己評価カード……「こうしていこう」というめあて、「こういうことはやめよう」という反省を書かせ、1週間ごとに両方について自己評価をさせ実践意欲を継続させる。教師のコメントを記す欄も設ける。（教師の評価というより認め励ますという意図で）

• 相互評価シール……「うれしかった」「有難いと思った」という感謝の気持ちをシールに託して『協力の木』にはる。人の言動に対しても目を向けさせる。

• 今の学級は、男女の仲が比較的良好ということを確認させ、はずみをつけさせる。

• 現時点の「男女は仲がよいか」という意識調査のTPを見せ、学期末の再調査でよい方に結果が変わるように努力しようとする気持ちをもたせる。

• 事前の調査などによって、考えたり感じたりする観点を意識させた。



互いの特性を理解し→認め合い→協力の成立 という段階の初歩指導にあたるので『男女の特性』としての授業展開を試みた。

(1) 指導過程—終末の工夫について—

- (ア) 授業の流れがすべて「男女の特性」にそって流れていたのがよかった。
- (イ) 男女が協力できない場面をもっとほりさげていけば、男女のちがいがおのずから子どもに指導でき、主題が深められたのではないか。
- (ウ) TP資料によれば、児童自身が男女仲がいいと認めているので、そこから出発してもいいのではないだろうか。
- (エ) 児童のアンケートの回答に「ふつう」という考えが多いけれど、教師は、「ふつう」が多いことに満足して出発すべきか、「ふつう」と答えていることが問題だとして出発すべきかを考えることも必要ではないだろうか。
- (オ) 両親の協力は、削除してもいいのではないか。また、保健指導との違いも明確にしたい。
- (カ) 終末の部分で、自分のめあてと反省を家庭学習にまわしていたが、めあては授業中に書かせて発表させれば、互いに認めあうことができ、終末部分がふくらんだのではないか。
- (キ) 終末の欄をもっと大きくしてもよい。「協力の木」今後を知りたい。

(2) 資料の活用

- (ア) 学級指導に資料の活用はかかせない。今回のたくさんの資料は、子どもたちが生き生きと授業に取り組むのに役立っている。人体のTPは、今すぐにでも活用したい。
- (イ) 子どもに分かるように、資料には文と数字だけでなく絵なども活用したらどうか。
- (ウ) 資料には、児童に考えさせる資料と教師のための資料がある。資料の扱いは、活用の場面と分量を考えることが大切である。
- (エ) 教師の体験談に、児童がよく耳を傾けていた。本時の教師の説話は効果的であった。

(3) その他

- (ア) 学級の欠点からの出発の授業が多い中で、さらに向上を旨とする発想がよい。
- (イ) 学級経営のよさが全面に出ていて、よい学級指導の授業であった。

〈学級指導コーナー〉 主題設定のなやみ

Q 「適応指導」の授業をしたつもりが、それは学級指導ではなく道徳ではなかったか、と講評を受ける場合があります。また、問題解決の方法として児童に話し合いをさせることで、学級会ではなかったか。と言われることもあります。その場合何が決めとなるのでしょうか。

- A (1) 主題は学校の年間計画にあたるものであれば、間違いはないでしょう。
- (2) 導入で、物語の紙芝居やペープサートを使うと、どうしても学級全体の児童の問題として受けとめられにくくなるのではないのでしょうか。導入の意識化の深さによって、終末も「あの子はえらいなあ。」とか「よく実行するなあ。」だけでなく「ぼくも今からやってみよう。」という即実践化へもっていかれるものと考えられます。

事例2

授業者 千代田区立西神田小学校 飯田 良一
6年（適応）1単位時間

1. 主題 友達関係をみなおそう

2. 主題設定の理由

5年生になる時に編成替えをして、そのまま6年生へと進級した。しかし、担任は6年生になった時に変わった。そのため、1学期は児童の実態の把握や担任との人間関係を作るためにかなりさかれてしまった。

本学級の児童は全体的に素直で活動的である。休み時間などはまっ先にとび出して、狭い校庭を目いっぱい使ってサッカーやバスケットボールなどで遊んでいる。人間関係も大きなトラブルはないように見える。しかし、よく見てみると、男子は時として個人主義的な言動をする所が見られを。自分のことだけして、後は知らん顔をしたり、まわりの人の悪い所だけを見ていたり、あげ足をとったりなどの点がみられる。また女子は集団としてまとまりを見せるが、自分たちだけで固まってしまっていて排他的となることもある。

こうした実態から考えてみると、残された5ヶ月の小学校生活を有意義なものとし、更に中学校という新しい世界に入った時に友達との望ましい関係が作れるようにするために、今の友達関係をみなおさせたい。そして友達関係を広げようと努力させるとともに、友達を通して自分というものを省みさせたいと考え、本主題を設定した。

3. 本時のねらい

望ましい友達の姿をイメージすることによって、今の自分と対比し、望ましい友達関係を作り上げていこうとする意欲を持たせる。

4. 展開

学 習 内 容	
導 入	○現在の学級の友達関係の実態を知り、自分との関わりを考える。
展 開 （ 前 段 ）	○周辺児・孤立児の存在に気づき、その理由について考える。
展 開 （ 後 段 ）	○“X氏からの手紙”によって、他の人が自分をどう知っているかを知る。
終 末	○もっと友達関係を広め、深めていく意欲を持つ。

学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点 ・ 資 料
<p>1. クラスのソシオメトリックテストの結果について、教師の話聞き、友達関係について考える。</p>	<p>○今月初めに行ったソシオメトリックテストの結果を集計したソシオグラムを書いた模造紙。</p>
<p>2. もしも、自分が周辺児・孤立児のところにいるとしたら、と考えた時に自分はどんな気持ちになるかを考えて発表する。</p> <p>3. どうして、そういう子がいるのかを考え発表する。</p> <p>4. 自分にとって付き合い良い友達や付き合いにくい友達とはどんな人なのかについて班で話し合う。その中で多かった意見3つをカードに書いて黒板にはる。</p>	<p>○周辺児・孤立児がだれなのか、に関心が集中しないように留意する。</p> <p>○2色のカードを用意し、各班に各色3枚ずつ配る。</p> <p>○細書き黒マジック 各班1本ずつ</p>
<p>5. 無作為に配られた原稿用紙の宛名の人にその人の良いところ、もっと良くなるヒント、他に言いたいことを書く。</p> <p>6. 書いてもらってわかったことを発表する。</p>	<p>○事前に名前を記入した原稿用紙</p> <p>○誹謗・中傷とにならないよう留意する。</p>
<p>7. これから友達とつき合っていくときに気をつけたいこと、考えていきたいことを発表する。</p>	<p>○望ましい友達関係とはどういうものかを考えさせたい。</p> <p>○公式的な言葉にならないようにして、具体的あるいは、個々に合った言葉でこれからの友達との付き合いに対する意欲を語らせたい。</p>

5. 評 価

望ましい友達の姿を考えるとともに、自分が友達とどう関わっているかを考えて、更に友達関係をよりよいものにしていこうとする意欲が持てたか。

6. 授業考察と使用資料

(1) 導入

本時の学習に対して関心を持たせ、意欲を高めるためにも、導入段階における資料は非常に重要である。本時のねらいに即しており、子どもに考えさせたい問題が端的につきやすい形で提示されていなければならないと考える。

今回、資料として取り上げたのは、子どもの交友関係を表したソシオグラムである。調査の方法は、○学級の中で仲の良い友達5人以内、○仲の良くない友達5人以内を紙に書かせた。集めた資料を集計して、ソシオメトリック・マトリックスを作った。授業で使用した資料は、この中から相互選択の関係のみ取り出した。男子は18名中16名が線で結ばれた。残る2名は、相互選択はなかったものの、被選択がある周辺児としてとらえられた。女子は12名中10名が線で結ばれた。残る2名は、被選択が1つもなく、孤立児としてとらえられた。この関係を氏名がわからないようにして模造紙に書いて、提示した。

子ども達は、初め意味がわからずがやがやみていたが、教師が簡単に意味を説明すると、急に静かになって食い入るように見はじめた。次に、孤立児、周辺児の存在に気づき、自分がその立場だったらと気持ちを述べた。

このような資料を使う是非、生の形で提示してよいかどうかなど、これからの課題として残されたが、本時を通した意欲づけに一定の成果があったと考えている。

(2) 展開

○前段……つき合い良い友達、つき合いにくい友達について、グループで話し合い、その特徴をカードに書いて発表させた。つき合い良い友達として○やさしい人○話が合う人など、つき合いにくい友達として○しっこい人○悪口を言う人などが多かった。
○後段……「X氏からの手紙」によって、その人の良い所、もっと良くなるヒントなどを書いて、その人を見つめさせるとともに、自分に来た手紙を読んで、他の人が自分をどう見ているか知らせた。しかし、中にその人がよくわからない、何を書いてあげたらいいかわからないなどで、短い時間で十分書けない子どもが見られた。原稿用紙ではなく、カードや葉書のような体裁にした方が良い。宛先を数人の子どもにしぼって、今後何回か実施することによって全員にまわるようにした方が良いのでは、などの指導を頂いた。

事後指導で、もらった手紙の感想を聞いたところ、多かったのは、○自分の気がつかない所を言われたのでうれしいあるいはとまどった、○異性からの見方がわかった。○あまり悪く書かれなくてよかった、などであった。

(3) 終末

教師の説話が中心となった。友達関係を広げること、深めることを、本時の学習をもとに進めていってほしいこと。小学校生活で残された5ヶ月を有効に使って欲しいことを中心に話した。

(1) 指導過程について

(ア) このような指導内容のときは、導入として、作文から入るのが普通だが、ソシオから入ったのがおもしろい。本時授業に関心を持たせた点で成功したと思う。

(イ) 導入段階は、問題に気づかせるのが目的であるが、本時の場合、孤立児に着目させるのか、友だち関係に目を向けさせるのか、友だち関係のなにをねらったのか、はっきりさせる必要があったのではないか。

(ウ) 展開前段で、つき合いよい友だちのトップに「やさしい人」をあげたグループが多かったが、友だち関係を作り上げていく大きな要素としての「やさしさ」について話し合いの中で掘り下げていくべきではなかったか。

(エ) つき合いにくい友だちでは、「しっこい人」がトップになっていたが具体的な事例をあげさせると、身近な事としてとらえられると思う。

(オ) X氏への手紙は実践的でよい。さらに工夫して活用して欲しい。

(2) 資料の活用

(ア) ソシオグラムは、本来教師が活用するが、本時ではなまのまま提示された。児童の興味と関心が集まり、問題意識を持たせるのに効果的な資料であった。

(イ) ソシオグラムは、扱い方によっては人権問題に関連するので、教師は学級児童の実態を十分把握した上で慎重に扱う必要があるが、本時は十分な配慮がなされていた。

(ウ) ソシオグラムを見ての児童の発言は少なかったが、それは抽象的な理解にとどまったからではないだろうか。児童に気づかせたい問題を明解にし、教師がソシオグラムの実態にふれることで具体的な意識化が図れるとよい。

(3) その他

(ア) 本時の主題の場合、授業の成否は、日常の学級経営によって決まる。その点、学級経営の良さがあらわれた温かい良い授業であった。

〈学級指導コーナー〉 学級指導の原点をみつめて (B区)

●年間指導計画は作成されているが、その計画と実践が直結しない●指導内容のもつ学年系統があいまいで、どの学年でも同じような指導をしてしまう●教師の指導体制、共通理解が不十分である●授業が形式的に流れやすく実践化されない●学級指導のための資料が不足しているなど、指導上の問題点や悩みはたくさんあります。そこで、区特活部では、本年度より「実践に結びつける適応指導のあり方」をテーマに研究をしています。研究の視点として●主題や目標、指導内容をどのようにおさえるか●指導過程をどのように考えるか●資料をどのように活用したらよいか●学習活動をどのように工夫するかなど、学級指導の原点にもどった取り組みをしています。

事例3

授業者 中央区立月島第一小学校 篠原 昌子

1年（適応） 1単位時間

1. 主題 あいさつ

2. 主題設定の理由

1学期、生活指導部における「言葉の調査」が行れた。調査の結果、「状況に応じた話し方」「思いやりのある言葉使い」に続いて、「あいさつの仕方」が指導を要する事項の上位を占めた。

学級においても、入学当初、社会や道徳で関連の題材を扱ってきたが、6か月経た実態は、登下校のあいさつは、担任に対しては殆んどできていたが、親切にしてもらったときや、「ごめんね」と謝る場では、教師や友達に先導されて応える児童が大半で、知っているけれど言葉になって表せない児童が目立つ。

友達に親切にしてもらったとき、「ありがとう」の言葉を返すことを即座的に指導に当たってきてはいるが、自発的に言える状態までにはなっていない。「ごめんなさい」も同様である。はずかしくて、びっくりして、おとなしすぎて、勇気が持たなくて言えないけど、さまざまな要因を抱えているこの期の児童ではあるが、「ごめんね」が言えている場では、争いも小事で収まっている。又、1年生も後半期に入り、活動範囲が広がってきた。用事をたのむときや来客等に対するあいさつの仕方も含め、この機会に全体的なものにしていきたい。

心がこもったあいさつをこの機に指導し、集団での取り組みにより、全体から個へと浸透させ、明るい生活ができるよう本主題を設定した。

3. 本時のねらい

日常生活をふり返り、場に合ったあいさつが身につけていないことに気づかせ、進んであいさつができるようにさせる。

4. 展開

	指 導 内 容
導 入	1. 「水飲み場」の様子絵を見て、動機づけをする。 ●その他の3場面絵を見させ、知らぬ顔をしていることに気づかせる。
展 開 へ 前 段)	2. どんなときに、どんなあいさつをすればよいか確かめさせる。 3. 他にどんな「あいさつ」があるか考えさせる。
展 開 へ 後 段)	4. 自分から進んで言えるように練習をさせる。 ●見直しをさせる。 ●心がこもったあいさつをさせる。
終 末	5. 本時の学習を確認し、集団としての実践化を図る。

学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点 ・ 資 料
<p>1. 絵を見て、回りの人に水がかかっても黙っていることに気づく。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・外、3枚の絵を見て話し合う。 <p>給食の失敗を助けてもらっている場面 登校中の場面 下校中の場面</p>	<p>○できるだけ身近かな場面を取り上げ、あいさつに対する興味を起こさせるようにする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・いずれの場面も知らぬ顔をしている程度の話し合いで留め、深入りはしないようにする。 <p>(資料1)</p>
<p>2. それぞれの場で、適切なあいさつがあることを思い起こし、発表する。</p> <p>3. 学校生活の中で、外にどんなあいさつがあるか考えてみる。</p> <p>事をたのむとき 校舎内で来客や職員に出会ったとき</p>	<p>○用意した吹き出しの「あいさつ」を絵の上部に貼っていく。</p> <p>(資料2-1)</p> <p>○いろいろな場の「あいさつ」があるが、ここでは学校生活の中で、特に人にたのむとき「すみません」、来客等に出会ったとき「会釈」を取り上げ、用意した吹き出しを絵の上部に掲示する。</p> <p>(資料2-2)</p>
<p>4. 「ごめんなさい」「ありがとう」の場面を動作化し、練習をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・それぞれの場面での様子を見て気づいたことを話し合う。 ・平常身についていない「あいさつ」を重点に練習をし、心がこもったあいさつができるようにする。 	<p>○「ごめんなさい」の場面では、生活上指導を要している児童を指名し、訓練させる。</p> <p>「ありがとう」の場面では、落とし物係を活動させ、実践の訓練をさせる。</p> <p>○体にぶつかって黙って通り過ぎたり、物を拾ってもらっても黙っていたり、ふざけのあいさつ等に気づかせ、心がこもった「あいさつ」ができるように手立てを加える。</p> <p>○特に、資料1の①、②、⑤の場面に重点を置いて再度、練習をさせる。</p>
<p>5. 心がこもったあいさつをすると気持ちが明るくなることをつかむ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・合言葉を合唱する。 ・がんばり表を常掲し、今後、お互いにあいさつをし合うことを約束する。 	<p>○すすんであいさつをすると、気持ちが明るくなることに気づかせ、実践力を高める方向に導くようにする。</p> <p>○実践化への合言葉として、心がこもったあいさつは、いいきもちだよ ルンルンを唱えさせ、学級集団の気持ちを高める。(資料3)</p> <p>○学級用がんばり表を掲示し、学級全体でがんばっていくことを約束させる。(資料4)</p>

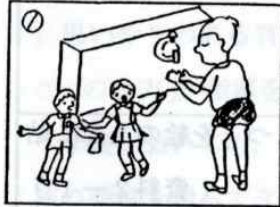
5. 評価

いろいろなあいさつの仕方がわかり、進んであいさつをしようとする積極的な取り組みができたか。

6. 資料の活用

(1) 導入段階 — 資料1

ここでは、VTRでもよいが、1年生の段階では映像人物に興味を引き、話題からそれ易いため、敢えて、絵で直観的に黙っていることに気づかせる。



(謝る場面)



(感謝の場面)



(登校の場面)



(帰宅の場面)

(2) 展開段階 — 資料2-1

各場面でどんなあいさつをすればよいか確かめる。代表児童にあいさつ言葉を書かせた方がより効果を高めるが、本時は、時間の都合上教師が用意した吹き出しを用いる。

ごめんなさい

ありがとう
ごさいました

おはよう
ごさいます

さようなら
こんにちは

● 展開段階 — 資料2-2

その外のあいさつとして会釈と依頼の場を指導するのに用いる。

えしゃく

すみません

(3) 終末段階 — 資料3

この時期の子供たちは、ちょっとした指導の手立てにより水を吸うスポンジの如く吸い込み、生活をリズム化していく。実践化への合言葉とし、唱えさせる。

こころがこもった あいさつは
いいきもちだよ ルンルン

● 終末段階 — 資料4

まず、学級がんばり表を常掲し、学級集団としての実践化を図る。

各日の絵は個々に描かせ、意欲を起こさせる。

1月の学校生活目標達成の資料とし、1月より個人点検表でがんばらせる。

こころがこもった あいさつは
いいきもちだよルンルン



(個人用) 1月生活目標達成のとき活用する。

こころがこもったあいさつ きもちよいへんじ		1の ()							
すんでやったらぬ		月	火	水	木	金	土	せんせいから おともだち	から ひとこと
がんばること									
おはよう	せんせいや おともだち								
ごさいます	ともだち								
さようなら	している おともだち								
こんにちは	せんせい おともだち								
ありがとう	おともだち								
ごさいます	おともだち								
ごめんなさい	目上の人								
ごめんな	おともだち								
すみません	たのむ人								
えしゃく	目上の人								

研究協議会から

(1) 指導過程並びに終末段階の工夫について

- (ア) 本日の授業の山場は心のこもったあいさつの動作である。導入に時間をかけていたが展開を導入的扱いとしてとり扱ってもよかった。新しい形の指導案を生み出している。
- (イ) 動作化の後で児童をほめる言葉がもっと強調されてもよい。その言葉と最後の合言葉で終われば、余韻の残る感動的な終末となったであろう。がんばりカードの活用もよかった。
- (ウ) 合言葉は終末部分をもりあがらせ、実践意欲を高めさせる有効な手だてであった。
- (エ) あいさつをしたり、されたりしてどんな気持ちになるかをずっと話し合わせるとよい。
- (オ) 低学年の児童にとって、心のこもったあいさつとは、自分からすすんでするあいさつということでおされたい。本日は目を見ながらあいさつしていたのでよかった。
- (カ) あいさつの指導は学校だけでなく、家庭・地域との連携が必要である。

(2) 資料の活用

- (ア) 導入の4枚の絵は、子どもの視覚に訴え、授業を進めるのに十分効果的であった。
- (イ) 動作化を取り入れ、ロールプレーをさせていたが、授業の展開をより効果的にしていた。特に、低学年の児童指導では数多くとりあげてよい方法ではないのか。
- (ウ) 全体評価の絵クラブは、児童全員がとりくむために効果的であった。
- (エ) 個人カードの扱いは、個人にまかせるだけでなく、担任や友人のはげましが必要である。

(3) その他

- (ア) 楽しい学級指導の授業であった。児童の特徴をよくつかみ、節度をもって児童に接している姿がにじみでていた。平素の学級経営のよさが推察される。
- (イ) 学級指導の機能を整理して考えるようにしたい。
 - ① 調和と統一のとれた人間関係を図る機能
 - ② 従来あった学級経営あるいは生活指導の機能
 - ③ 教科の領域の中において、相互を密着させる機能それらを学級的視野からとらえるが、学年内は統一した考えで進められることが大切である。

〈学級指導コーナー〉 年間指導計画は作成されたけれど…………… (C市)

本校はもちろん、市のだいたいの学校では毎年毎年年間計画を熱心に手直ししています。全職員分印刷してそれぞれの分担で実践化が期待されています。が、一向に実践されたという報告をうかがえないのです。教師の熱心さ、子どもに対する情熱だけでは何如ともし難い現実、時間確保ができていないという点なのです。このことを学校体制の中で考え実現化するための努力を研究とする取り組みはどうでしょう。教師と子どもの人間関係を深める学級指導を具体化するためには、授業研究を数多く行ない、時間確保の必要を強く訴えていかなければと思っています。

Ⅳ 実践意欲を高める資料

事例1

1. 主 題 言われた言葉 3年（適応） 1単位時間

2. ねらい

日常何気なくつかっている言葉の中には、友達の心を傷つけたり、悲しい思いをさせたりする
 場合があることに気づかせ、言葉のつかい方に気をつけることができるようにさせる。

3. 終末段階の指導の工夫

(1) 指導内容・学習活動 (2) 資料 - 実践を継続させる

○ 一人一人のこれからの決意を
 まとめて発表し合う。


○ 言葉づかいカードに努力目標
 を書く。

4. 資料の活用

(1) 自分の努力目標は、できるだけ
 具体的に書かせる。

(2) 実践，継続させるため，教師の
 助言，励ましの言葉を書き入れる。

ことばづかいカード ()



	日	日	日	日	日	日	日	日	日
① 守れた									
② あと一歩									
③ ごんねん									
先生から									

事例2

1. 主 題 わすれもの 2年（適応） 1単位時間

2. ねらい

学習用具を忘れることによって起こる迷惑や、不便さをわからせ、忘れものをしないた
 めの方法を考えさせ、実践できるようにさせる。

3. 終末段階の指導の工夫

(1) 指導内容・学習活動 (2) 資料 - 実践意欲を高める

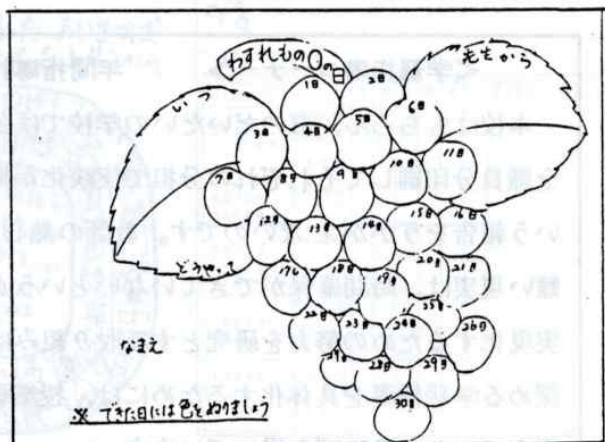
○ 一人一人に応じた実践方法を
 確認させる。

○ がんばりカードに「時」
 「方法」を書かせる。

4. 資料の活用

(1) 「時」「方法」は実践が継続可
 能であることを確認させ書かせる。

(2) カードは画用紙などを使い，掲
 示させる。これにより持続化を図る。



事例3

1. 主 題 忘れもの たいじ 1年 (適応) 1単位時間

2. ねらい

忘れものをして学習や作業などで困ったことを思い出し、忘れないようにするにはどうしたらよいか考えさせ、忘れものをしないようにさせる。

3. 終末段階の指導の工夫

(1) 指導内容・学習活動 (2) 資料 - 実践を継続させる







- 忘れものをしないようにする一人一人の工夫をカードに書く。
- がんばりカードに実践の記録を記入することを約束する。

4. 資料の活用

- (1) 忘れ物をしないように、次の日の準備を前日のうちに確認し、「赤い花」になるよう励ます。
- (2) 何週間か後で、実態を確かめさせ、必要に応じ再びカードを使用させる。

忘れもの がんばりカード (なまえ)

きれいな はなを さかせよう

月	火	水	木	金	土
					

忘れものなし→あお 2こ→きいろ
1こ→あお 3こいじょう→なし

事例4

1. 主 題 みんなで 仲よく 遊ぼう

2年 (適応) 1単位時間

2. ねらい

仲間に入っていったりさそってあげたりして、なるべく大勢の友達と仲よく楽しく遊べるようにさせる。

3. 終末段階の指導の工夫

(1) 指導内容・学習活動 (2) 資料 - 実践意欲を高める

- 具体的な場面を想定し、みんな で内容や項目を考える。
- 各自のめあても書いておき、実践につとめるように意識づける。

4. 資料の活用

- 帰りの会に記入し、よかった例を話し合わせ、その場で賞揚する。
- しばらく続け、とり残されている子がなくなったかどうかをみんな で確かめる。

なかよしあそびカード ()

	1人で	2人で	3人以上	あそび	さそった	入った
日						
日						
日						
日						
日						
自分のめあて				先生のことば		

事例5

1. 主 題 卒業をめざして (適応) 6年 (適応) 1 単位時間

2. ねらい

卒業までの残された日々を有意義に過ごすための計画をたて、その計画を実践できるようにさせる。

3. 終末段階の指導の工夫

(1) 指導内容・学習活動 (2) 資料 - 実践を継続させる。

① 話し合って決めたクラスの日あてをカードに記入する。

② 自分の日あてを、できるだけ具体的にカードに記入し、発表する。

4. 資料の活用

(1) 自分の日あては、毎日継続できるものを具体的に記入させ、帰りの会を使って自己評価をさせる。

(2) 継続させるために、1週間に1回集めて確認のマークをつける。

(3) カードは、取りはずしが可能な、目立つ場所に掲示し、お互いの様子がすぐわかるようにしておく。



事例6

1. 主 題 卒業までの日あての確かめをしよう (適応) 6年 (適応) 1 単位時間

2. ねらい

以前にたてた「卒業までの日あて」が、きちんと守られているかを確認し、日あての見直しをすることにより、最後まで、実践が継続できるようにさせる。

3. 終末段階の指導の工夫

(1) 指導内容・学習活動 (2) 資料 - 実践を継続させる

① 自分が立てた日あてを達成するために、月・週・日の日あてを記入する。

② 最後までやりぬこうという意欲を高める教師の話。

4. 資料の活用

(1) カードの形式は、児童にまかせ、自己評価しやすいものを工夫させる。

1 月						
日	月	火	水	木	金	土
●			●	●	●	●
6	7	8	9	10	11	12
●	●	●	×	●	×	●
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31		

卒業までの日あて
 ◎ 勉強をがんばる
 五 / 六年の教科書をやる
 2. 1. 一週間で約五十ページ
 どうしたら守れるか
 五時十分から八時まで
 テレビを見ない

(2) 日あては、親に見せ、励ましの言葉を書いてもらう。

事例7

1. 主 題 3学期だ、がんばるぞ！ 3年（適応） 1単位時間

2. ねらい

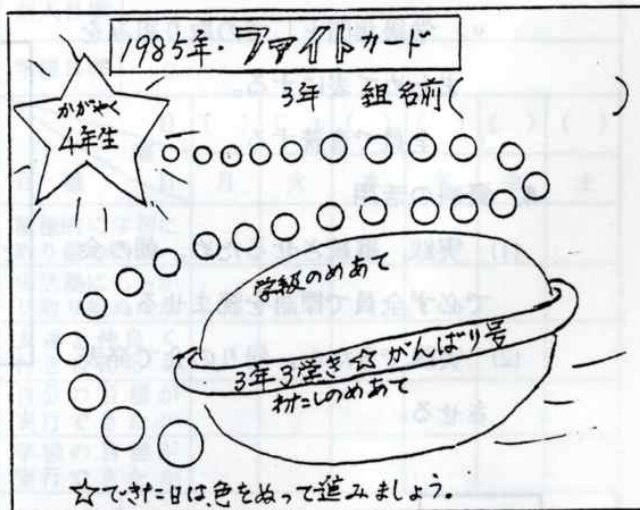
第3学期が学年のしめくくりの重要な学期であることを理解させ、「りっぱな4年生」をめざし、学級・個人の目標を話し合い、3学期の一日一日を努力させる。

3. 終末段階の指導の工夫

(1) 指導内容・学習活動

- 学級のめあてをふまえ、個々人の抱負を発表し合い、「ファイトカード」に自分の協力目標を記入する。
- 今後のカードへの記入について説明を聞く。

(2) 資料 — 実践意欲の授続を図る



4. 資料の活用

- (1) めあてはできるだけ具体的に把握させると共に、適切であるよう助言する。
- (2) 授業後、帰りの会等でめあてについて一日をふり返る時間を設定する。

事例8

1. 主 題 広がる読書 6年（図書館利用） 1単位時間

2. ねらい

ひとりひとりの読書量と読書傾向の問題点に気づかせ、より広い範囲にわたる読書計画を立て、継続的に実践できるようにさせる。

3. 終末段階の指導の工夫

(1) 指導内容・学習活動

- 今までで少なかったジャンルの本を書架から選ばせて、「広がる読書」のカードに記入する。
- 残りは土曜日までに選ばせる。

(2) 資料 — 実践を継続させる

		広がる読書 6年組〔 〕				
		歴史 伝記	S・F ぼう険 探てい	科学 童話	名作 童話	その他
一日 分以上読もう	めあて					
	月					
	日					
	月					
	日					

読み終わった日
読み終わった
月日
本の
名

事例9

1. 主 題 相手の立場や気持ちを考えて生活しよう 5年（適応） 1単位時間

2. ねらい

日常生活の中で、相手の立場に立って考えることの大切さを理解させ、協力して生活できるようにさせる。

3. 展 開

(1) 終末段階の指導内容・学習活動 (2) 終末段階の資料（実践させる資料）

- 学級集団としての取り組みをまとめて表にする。
- 全員で音読する。

4. 資料の活用

- (1) 実践、継続させるため、朝の会で必ず全員で標語を読ませる。
- (2) 実践できたか、帰りの会で発表させる。

<input type="radio"/>	ありがとう	あ
<input type="radio"/>	すみません	す
<input type="radio"/>	はい	は
		運
		動

事例10

1. 主 題 クラスのためになる活動をしよう 3年（適応） 1単位時間

2. ねらい

児童一人一人が、友達の活動に関心をもち、クラスのために役立つ活動をするようにさせる。

3. 展 開

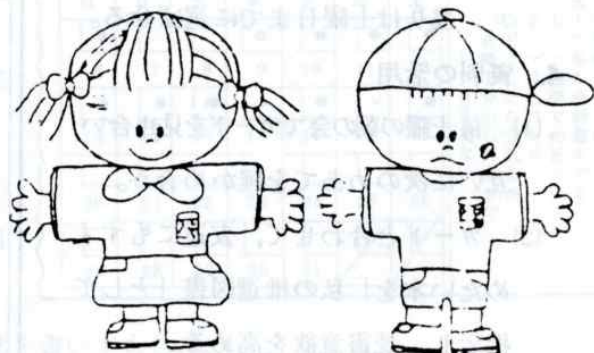
(1) 終末段階の指導内容・学習活動 (2) 終末段階の資料

- 「知り合う会」を設定し、学級全体の取り組みとして実践する。
- がんばりカードに、自分の努力目標を書かせる。

4. 資料の活用

- (1) クラス全体の取り組みであるため、目標達成の基準を明確にさせる。
- (2) ピクチャーパズルは、日直当番に記入させ、全員が書けるように配慮する。これにより、実践の持続化を図る。

終末段階 — ピクチャーパズル —



事例11

1. 主 題 楽しい学校生活 5年（適応） 1単位時間

2. ねらい

望ましい学校生活を送るためには、いつも自分の目あてを持って行動することが大切であることに気でさせる。

3. 終末段階の指導の工夫

(1) 指導内容・学習内容

- 一日の生活カードに、学級、個人の週間努力目標を書かせる。
- 具体目標に個々の到達状況を自己評価していくように約束させる。

4. 資料の活用

- (1) 実現できるかどうかの見通しを持った個人目標を設定させる。
- (2) グループ、学級全体で話し合い、お互いに励まし合いながら、次の日、次の週への継続を図る。

一日の生活カード 名前()						
個人目標						
学級目標						
目 標	日	()	()	()	()	()
	曜日	月	火	水	木	金 土
積極的に学習に取り組めたか						
係活動にしっかり取り組めたか						
友達と仲良く付き合えたか						
自分の目標が実行できたか						
学級の目標が実行できたか						
自己反省						
友達から						

事例12

1. 主 題 すききらいをなくそう 2年（給食） 1単位時間

2. ねらい

給食には、からだのためによりいろいろな栄養がバランスよく含まれていることを知り、給食を残さず食べることができるようにさせる。

3. 終末段階の指導の工夫

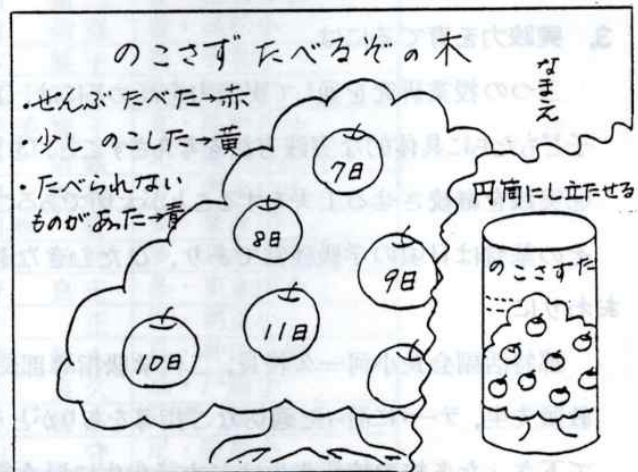
(1) 指導内容・学習活動

- “のこさず食べるぞの木”をつくり、その使い方を知る。
- みんなが残さずに食べて丈夫な体になれるように励ます。

4. 資料の活用

- (1) 給食の時間、いつも自分の目につく所に置けるように工夫した。
- (2) 友達同士も励まし合って楽しく木の実(りんご)が赤くなるようにさせたい。

(2) 資料 — 実践を継続させる



V 研究の反省と今後の課題

本年度は、東京の西、多摩市東永山小を皮切りにして、武蔵野、神田、月島と川が流れる如く研究授業の会場を東に移し、研究を進めていった。「特別活動の特質をふまえた豊かな人間性の育成」という全体テーマを受け、「実践力を育てる学級指導の授業の在り方」をテーマに研究をすすめる。本年は、その三年次ということで、終末段階に焦点をあて研究を深めた。三つの研究授業を予定通り行い、実践力を育てるための授業の在り方、終末段階の工夫のし方について学ぶところが多かった。

1. 指導過程について

今年度、終末段階の工夫ということで研究をすすめるに当たり、実践する意欲をもたせるには、特に終末段階に十分時間をとり、一人一人が決意も新たに取りくむようにしなければならないと確認して、研究をすすめた。そのために、指導過程は基本型のみでなく、展開または終末に特に重点を置いた指導過程の工夫も必要であろうと考え、去年に続き指導過程について学習し、授業研究を行った。

三つの授業は、基本型の形をとったが、従来のように導入・展開・終末という基本型にこだわるばかりでなく、時には展開部分を導入的扱いにして、その分、終末段階をふくらませて実践に結びつけさせる等の弾力的な指導過程の工夫が必要であることがわかった。

2. 資料について

終末段階は、子どもたちが問題解決の方法を発見し、自分たちの力で実践に入ろうとしている重要な段階である。「これから、このようにしていこう。」「がんばって続けよう。」という時に、実行する内容が明確にされ、実践状況が目で確かめられるようにすることが重要であることを確かめることができた。また、終末段階の実践資料を持ち寄ったが、学級の実態に合わせ資料を作成するよい手がかかりとなった。なお、資料づくりには時間がかかるので手を抜きがちである。それだけに、学年で共通した資料を作る。学校として保管する等の実践例をお互いに交換し合うことが今後の課題である。

3. 実践力を育てるには

三つの授業研究を通して実践力を高めるには、①実践への意欲づけがなされていることを、②子どもたちに具体的な実践方法を考えさせること、③児童相互に実践を高める工夫をさせること、④実践を継続させる工夫をすることが大切であることが確かめられたのが今年の収穫である。その基盤は日頃の学級経営であり、ひたむきな教師の姿勢であることを痛感させられた。

おわりに

都特活副会長小河一久校長、二代学級指導部長石川和男校長、三代学級指導部長安岡正 凱 教頭先生、テーマに沿った適切なお指導をありがとうございました。研究のために会場を提供して下さった各校の校長先生はじめ諸先生に厚く御礼申し上げます。授業を引き受けて下さった三人の先生、実践別をお寄せ下さった計20名余の先生方ありがとうございました。

昭和59年度

顧問・役員・理事名簿

顧問

顧問	小谷 威	清・芝山小長
"	中田 英義	千・番町小長
"	広瀬 英二	北・滝野川小長

役員

会長	外村 近	多・東永山小長
副会長	古橋 宏	豊・仰高小長
"	小河 一久	中央・月島一小長
"	岩園 敏明	八・清水小長
"	大西 弘	墨・二葉小長
庶務部長	石川 和男	豊・平和小長
庶務副部長	門倉 昭三	港・桧町小頭
"	松崎 繁	北・赤羽小頭
会計部長	早坂 一	足・栗島小長
会計副部長	島田 泰介	町・忠生一小長
"	小野 真澄	江戸・下鎌田東小頭
専門部長	竹石 善一	板・蓮根小長
専門副部長	岩下 紀夫	新・天神小頭
"	新倉 剛	世・千歳小頭
"	安岡 正凱	練・泉新小頭
学級会部長	大谷 武夫	港・高輪台小
児童会部長	今野 正保	新・淀橋三小
クラブ部長	関口 照治	墨・業平小
学級指導部長	米本 滋雄	葛・梅田小
事業部長	関口 主一郎	東大和・九小長
事業副部長	松野 彰夫	板・下赤塚小頭
"	渡辺 寿	練・北町西小
編集部長	小川 国寿	港・三光小長
編集副部長	高見 沢豊栄	立・六小頭
"	合原 渡	文・大塚小
会計監査	北村 康富	千・淡路小長
"	布施 篤美	多・西永山小長

本部幹事

庶務	池田 令子	文・礪川小
"	門馬 茂	豊・文成小
"	藤田 祐三	豊・椎名町小
"	長田 信彦	豊・高松小
"	松本 展子	豊・平和小
"	小林 千恵子	北・王子小
"	剣菱 美智子	北・滝野川小
"	小泉 信義	北・滝野川五小
"	木内 悦雄	多・西永山小
"	赤羽 根智	多・東永山小
"	山崎 敏光	多・北永山小
会計	細野 良正	多・東永山小
事業	高井 正	世・明正小
編集	小林 繁人	日・仲田小頭
"	浅井 良久	品・戸越小
"	石岡 勝彦	江東・第三砂町小
"	柴山 守	足・綾瀬小

理事・副理事

千代田区	大澤成四郎	芳林小
	香川 昭男	富士見小
中央区	高梨 寿一	月島一小
	笥 進	明正小
港区	五十島良治	桜川小
	岡田 定雄	桜田小
新宿区	河野 紀之	落合四小
	富田 嘉子	東戸山小
文京区	小笠原潤子	関口台町小
	池田 令子	礪川小
台東区	大高 正義	精華小
	屋代 定男	坂本小
墨田区	辺見 弘	第二寺島小
	嵯峨 悦子	錦糸小
江東区	長門 邦雄	扇橋小
	田中悠紀子	第二砂町小
品川区	岡野 高雄	源氏前小
	渋谷 登	城南小
目黒区	大村 将	菅刈小
	鮎川 郁男	月光原小
大田区	後藤 隆	入新井四小
	原田 昌明	池上二小
世田谷区	木場 住郎	多聞小
	佐々木章輔	祖師谷小
渋谷区	日根野 光	大和田小
	佐々木裕義	臨川小
中野区	有村 久春	東中野小
杉並区	木下 淑江	高井戸小
	影山 兼道	高井戸四小
豊島区	石川 和男	平和小
	門馬 茂	文成小
北区	古市 博	東十条小
	池田 簇	第四岩淵小
荒川区	那須 正義	第四日暮里小
	金子てる子	第一日暮里小
板橋区	井田 益彦	三小
	柏村喜久子	若木小
練馬区	沼田 定次	光が丘一小
	永森 修吾	関町北小
足立区	早坂 一	栗島小
	蒔 次雄	柳原小
葛飾区	前田 昭義	渋谷小
江戸川区	小笠原探源	第四葛西小
	氏家 和子	平井南小
八王子市	和泉 涉	六小
	宇都宮 透	陶鎔小

立川市	阪田 多聞	けやき台小
	佐々木和廣	若葉小
武蔵野市	高松 和彦	四小
	小松とし子	井之頭小
三鷹市	森山 裕夫	三小
	野田 照彦	一小
青梅市	五ノ井泰則	霞台小
	望月 信二	二小
府中市	藤本 学	南町小
	塚本 貞男	九小
昭島市	坂井 康宣	つつじが丘北小
	小林 スイ	つつじが丘南小
調布市	赤塚 靖	上ノ原小
	佐々木邦夫	八雲台小
町田市	八巻 八郎	つくし野小
	青 正上	本町田東小
小金井市	河西 芳	東小
	井口 清	三小
小平市	太田弘四郎	六小
	上村 和子	九小
日野市	畑中 隆宏	八小
	小笠原久雄	潤徳小
東村山市	吹毛井啓一	東萩山小
	伊東トミエ	久米川小
国分寺市	田野倉靖郎	八小
国立市	赤池 正人	五小
田無市	向井 明彦	西原二小
	野村 吉弘	柳沢小
保谷市	星 憲彦	保谷小
	丸山久美子	一小
狛江市	浮田 芳夫	三小
	坂本 昭雄	五小
東大和市	小川 義男	九小
	池田 政次	二小
清瀬市	片岡 恵次	清瀬小
	森本 善美	十小
東久留米市	安田 康隆	小山小
武蔵村山市	小林 昭二	八小
	松田 篤郎	三小
多摩市	小林 耕一	北豊ヶ丘小
稲城市	佐久間英明	八小
	北村 孝夫	八小
西多摩市	新井 皎一	数馬小
	宮沢 正夫	五日市小

編 集 後 記

学級会活動の研究授業を、初めて実施した新卒2年目の教師が、「学級会活動って、楽しいんですね…」と、感慨深げに感想をもらしていた。また、子どもと共にボールを蹴り、汗びっしょりのクラブ活動に情熱を注ぐ青年教師など、教科学習や道徳の指導では味わうことの出来ないよろこびを、子ども共々体験できる教育活動が特別活動である。

人間性豊かな児童の育成を目ざし、特別活動の特質解明に取り組んで6年、より望ましい特別活動のあり方を求め、児童活動では所属する集団を大切に、構成員の一人として自覚を持ち、自発的・自治的活動を続け、学校行事や学級指導では、学校生活に節目をつけ、望ましい学級生活を築こうと、学校現場は今、研究と努力を重ねている。

都特活は、学級会・児童会・クラブ・学級指導の四部に分かれ、それぞれに積極的な研究を進めているが、学級会活動部では「学級経営」とのかかわりを追求し、担任教師の「指導力」を問題に、子どもたちの主体性をどこまで伸ばし得るか、研究授業4回、研究協議を9回にわたって行い、その解明を図った。児童会活動部では、代表委員会の話し合い活動に焦点を当て、話し合い活動を深めるための事前指導、資料の活用をどのように図っていくか、3回の研究授業、8回の研究協議を重ね、望ましい指導のあり方を模索した。

また、クラブ活動部では実地に見学会をもち、前後12回の研究協議を重ね、①クラブ活動のリーダー問題、②クラブ活動の評価、③クラブ活動の指導計画と実施計画など、クラブ活動の本質に迫り、学級指導部では、研究授業3回、研究協議11回を通して、指導過程と資料の工夫・活用について、多くの実例を持ち寄り研究を深めてきた。

都特活の課題とする「豊かな人間性の育成」に向かって、実践的な研究を積極的に進め、疑問や混迷、隘路（あいろ）を少しでも切り開こうと努力して来た。結論に到達するには、まだまだ道は遠い。しかし、問題点が一つずつでも解明されれば、そのことが全都或は全国の各学校にいくらかでも資することができるのではないかと考えている。

本年度の研究をしめくくるに当って、多くの困難や条件を克服し、研究授業或は実証授業を通しての積極的な研究を進められた四部門の各位に、心からの敬意をおくり、合わせて、多くの指導・助言をいただいた講師の先生方に厚くお礼を申し上げ、編集後記といたします。

S 60.2. 専門部副部長 岩 下 紀 夫

年代別区分	代表者	編集者	印刷所	発行所	発行日
昭和50年代	高橋 昭一	高橋 昭一	三誠社	東京都文京区本郷2-22-4	昭和50年2月28日
昭和60年代	高橋 昭一	高橋 昭一	三誠社	東京都文京区本郷2-22-4	昭和60年2月28日
昭和70年代	高橋 昭一	高橋 昭一	三誠社	東京都文京区本郷2-22-4	昭和70年2月28日
昭和80年代	高橋 昭一	高橋 昭一	三誠社	東京都文京区本郷2-22-4	昭和80年2月28日
昭和90年代	高橋 昭一	高橋 昭一	三誠社	東京都文京区本郷2-22-4	昭和90年2月28日
平成元年代	高橋 昭一	高橋 昭一	三誠社	東京都文京区本郷2-22-4	平成元年2月28日
平成20年代	高橋 昭一	高橋 昭一	三誠社	東京都文京区本郷2-22-4	平成20年2月28日
令和元年代	高橋 昭一	高橋 昭一	三誠社	東京都文京区本郷2-22-4	令和元年2月28日

研究集録 第21号

**特別活動の特質をふまえた
豊かな人間性の育成**

印刷 昭和60年2月25日
 発行 昭和60年2月28日
 編集 東京都小学校特別活動研究会
 発行者 会長 外村 近
 (多摩市立東永山小学校)

印刷所 株式会社 三誠社
 代表取締役 茂呂 彌兵衛
 文京区本郷2-22-4
 TEL812-0241・811-2062